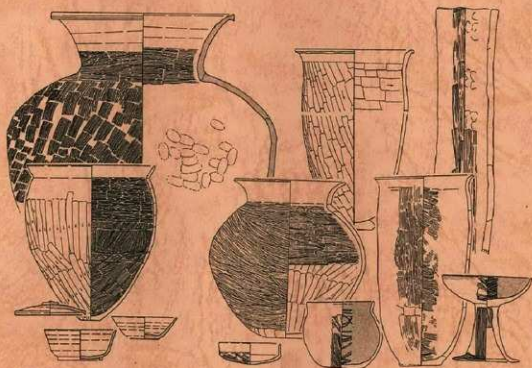


なかのじょういせきぐん
中之条遺跡群

みやうえいせき
宮上遺跡 I・II・III・IV



2001. 3

坂城町教育委員会

中之条遺跡群

宮上遺跡 I・II・III・IV



2001. 3

坂城町教育委員会

序 章

～過去からのメッセージ見つけたよ!!!～

平成3年から平成10年まで、断続的に坂城中学校の改築事業が行われました。工事によって大切な遺跡が壊れてしまうため、坂城町教育委員会では発掘調査を実施しました。その結果がこの報告書に書かれていますが、この章で簡単に宮上遺跡の発掘調査結果をまとめてみました。

☆☆遺跡や遺物って何だろう!!

遺跡とは昔の人が住んだりした跡が残っている場所をいいます。遺跡の種類にはムラの跡（集落址^{（むらあし）}）、墓（古墳時代の豪族などの墓は古墳といえます。）、田んぼの跡（水田址）などがあります。それらの遺跡から発見される土器、石器、金属器など昔の人が使ったものを遺物といえます。遺跡や遺物は当時の生活を知るためには欠かせないものです。

☆☆宮上遺跡ってどこ？

宮上というのは現在の坂城中学校周辺^{（まがら）}の字の名前です。この宮上^{（みやがみ）}地籍に位置する遺跡ということで、宮上遺跡と名づけられています。宮上遺跡からは住居の跡などが、見ついているため集落遺跡といえます。当時生活していた人たちは、この場所を何と呼んでいたかはわかりませんが、私たちは他の遺跡と区別するために、字名をつけ宮上遺跡と呼んでいます。



バックホーで表面の土を取り除いているところ

☆☆発掘調査ってどうやってするの？

遺跡は地下に埋まっているために、地面の上からはどうなっているかわかりません。遺跡の調査にあたっては、発掘調査という方法で当時の様子を調べます。発掘調査の手順は、簡単にいうと次のとおりです。

- ① バックホーによって、遺跡が埋藏されているところまで、表面の土を取り除きます。（遺跡が見つかる面より上の土を取り除きます。）
- ② 住居などがあるかどうか土の色調などの違いに注意しながら地面を削ります。（遺跡が見つかる面で行う。）
- ③ 探した住居の跡などを当時の姿（埋まる前の姿）に



住居の跡を掘り下げているところ

なるように、掘り下げます。

- ④ 掘りあがったら、写真や図面などに記録を残します。
 ⑤ 他の遺構を同じように掘り、記録に残します。

☆☆弥生時代の住居

宮上遺跡に初めて人が住み着いたのは、弥生時代からと思われます。現在の体育館建設場所の発掘調査では、4棟の住居の跡が見つかりました。ちょうど邪馬台国の女王卑弥呼の活躍した頃と思われます。当時の住居は竪穴式住居といって、地面に穴を掘った楕円形のような住居で、炉といわれる煮炊きをする施設を持つものでした。(今回の調査を行った場所からは、4棟しか見つかりませんが、他の場所にはまだこの頃の住居の跡が埋まっている可能性があります。)しかし、その後の弥生時代の終わりの頃の住居が見つかっていませんので、集落はその後途絶えてしまったようです。人々はどこへ移り住んでしまったのでしょうか。

☆☆古墳時代

古墳時代の後期頃(聖徳太子が活躍した頃)、人々は再び戻ってきて竪穴式住居をつくって住み着きました。発掘調査をした場所の中では、この時期の住居が全部で15棟見つかりました。当時の住居の中には、カマドと呼ばれる煮炊きをする施設があり、カマドで使われた土器も見つかっています。見つかった土器の中には当時の鍋や碗にあたるものが多くありました。土器の種類では土師器や須恵器という焼き物が多く見つかっています。

☆☆奈良時代・平安時代

奈良や京都に都が築かれたこの時代、東国にあたる地方では、都の生活とははるかにかけ離れた生活が、送られていました。都では人々の住まいは竪穴の住居ではなく、平地の住居が出現していますが、宮上遺跡では相変わらず古墳時代の住居と同じで、カマドを持つ竪穴式住居でした。

宮上遺跡では、古墳時代からのムラが継続していたと考えて良いと思われます。この両時代では19棟の住居が見つかりました。その他として当時の倉庫として利用された掘立柱建物址と呼ばれる建物も数多く存在していました。

☆☆出土遺物

発掘調査の結果として、土器が多く見つかります。このことは、かなりの歳月を経ても土器は腐らないという特質の結果からです。逆に発掘調査では見つからないけれども、当時使われていたもの、当時の様子を語るもの

時 期	坂城町のできごと	
旧石器	後 期	保地遺跡に人が現れる。
	縄文	草創期 早期 前期 中期 後期 晩期
弥生	前期 後期	宮上遺跡に人が住み始める。 塚田遺跡にムラができる。
	古墳	前期 後期
奈良		
平安		土井ノ入窯跡で瓦が焼かれる。 込山に寺が造られる。(込山院寺) 北日名に経筒を埋納する。(北日名経塚)

は多くあったとされています。それらはすでに述べましたが、残念なことに長い歳月の間に腐ってしまうため、通常の発掘調査では見つからないことが多いのです。例えば腐ってしまうものとして、竪穴住居の柱や屋根、当時の食べ物、衣服などがあげられ、多くの種類や量があったはずですが。

発掘調査の結果、見つかった土器をよく見ると、文様やかたちなどが違っているのがわかると思います。これらの違いなどから縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器などに分類されています。土師器とは弥生土器の系譜上にある素焼きの土器で、約800°Cの低温で焼かれたものといわれています。色調は赤褐色をしています。須恵器は古墳時代に大陸から伝わってきた窯を使って焼かれた焼き物で、約1,000°C以上の温度で焼かれているため、灰色をしているものが多いといえます。これらの特徴から判断して、宮上遺跡で見つかった土器は、弥生時代から平安時代のものであります。その中のほとんどは住居が多く造られた古墳時代から平安時代の頃のものといえます。

☆☆これってな～に？

珍しい形をした円筒形土製品と呼ばれるものが発掘調査によって見つかりました。この土製品は、竪穴式住居のカマドから多く見つかることから、カマドを造るために使われたものと思われる。しかし、この土製品は、初めからカマド用に造られたのか、何か別の物として使われていたものを再利用したものなのか、まだよくわかりません。坂城町内では宮上遺跡を中心とした中之条遺跡群内からいくつか出土していますが、長野県内を見てもどの遺跡からでも見つかるものではなく、長野市、更埴市の遺跡から少し見つかっているくらいで、非常に珍しいものなのです。県外を見ても山梨県や東京都、栃木県などからも見つかり、遠くは青森県でも見つかっています。当時、このような地域とどのような関係（交流関係など）があったのかよくわからないのですが、今後の研究が楽しみな土製品といえます。

☆☆石製紡錘車

当時の生活を語るものとして石で造られた紡錘車があります。これは糸を紡ぐための道具です。P229という小さい柱穴から出土したものは蛇紋岩と思われる石を加工して造ってあります。重さは129.9グラムです。



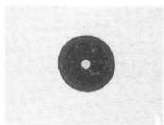
古墳時代の土器



奈良・平安時代の土器



宮上遺跡出土の円筒形土製品



石製紡錘車

序

坂城町教育委員会教育長 大橋 幸文

宮上遺跡は、坂城中学校の所在地である。坂城中学校は、平成3年(1991)から平成10年(1998)にかけて全面改築された。本書は改築に先立って実施された宮上遺跡発掘調査の報告書である。

発掘調査は、森嶋稔先生を調査団長に開始された。森嶋先生は、平成8年(1996)6月に急逝されたが、宮上遺跡の最初の調査報告書である「中之条遺跡群宮上遺跡Ⅱ」は、森嶋先生の指導のもとに平成5年(1993)3月に刊行された。報告書のあとがきで、森嶋先生は、「宮上遺跡は、かつて未調査のまま中学校が建築されてしまった。時代が文化財に対する認識を欠いていたからである。今日はせめてもの処置として緊急発掘調査による記録保存が義務づけられている。その結果、坂城中学校敷地内である宮上遺跡は、古墳時代末期から奈良・平安時代に及ぶ集落遺跡であることが判明した。坂城町の中学生はその古代の集落遺跡の上で、毎日勉強しているのである。その歴史の重みを、人々の足音と共に肌で感じてほしいと願わずにはおれない。」と述べている。

この森嶋先生のあつい思いをこれからも坂城中学校に学ぶすべての生徒に伝えたいと思う。この報告書がその一助となるべく、中学生にも理解され、考古学への関心を深めてもらうために「序章～過去からのメッセージ見つけたよ!!～」がおかれた。

序章で明らかなように宮上遺跡は、弥生・古墳・奈良・平安時代に及ぶ集落遺跡であり、その規模からして坂城の中心とも考えられそうな重要な遺跡である。それにもかかわらず、発掘調査は、数回にわたって実施されたが、いずれも工事着工までの短期間に余儀なくされた。しかし調査にあられた皆様の熱意と努力によって報告書にみるような成果を上げてもらうことができた。改めてその労苦に感謝申し上げたい。

宮上遺跡の上に立地している坂城中学校は、昭和35年(1960)旧中之条・坂城・村上の三中学校を統合し開校された。30余年の歳月を経て全面改築された今の坂城中学校は、38億円余の巨費が投ぜられている。平成13年(2001)3月の卒業式までの卒業生は、10,667人ですでに1万人を越えた。

この報告書は、坂城中学校の足下の大地に埋もれている先人の営みを語り、悠久の歴史の重みに思いを寄せるよすがとなってくれるものと思う。

平成13年3月

例 言

1 本書は、長野県埴科郡坂城町における坂城町立坂城中学校改築事業に伴って実施された埋蔵文化財発掘調査の報告書である。発掘調査は下記の4年次において実施され、本書が最終的な本報告となる。

2 発掘調査は、坂城町教育委員会が実施した。

3 発掘調査所在地

長野県埴科郡坂城町大字中之条921-1他

4 発掘調査期間と調査面積

宮上遺跡Ⅰ	現地調査	平成3年8月20日～8月31日	952㎡	
宮上遺跡Ⅱ	現地調査	平成4年6月2日～9月4日	2,460㎡	
宮上遺跡Ⅲ	現地調査	平成7年6月19日～12月15日	2,597㎡	
宮上遺跡Ⅳ	現地調査	平成9年4月21日～7月2日	706㎡	
	現地調査	平成9年9月25日～10月2日	69㎡	合計6,784㎡

整理作業は、他遺跡の発掘調査等の諸事情により、断続的に実施した。

5 本書の執筆・編集は、塩入秀敏調査指導者の指導の下、助川が行い萩野がこれを補助した。

6 本書の作成にあたり助川のほか齋藤、萩野、天田、塚田が主な作業を行った。

7 本書及び調査に関する資料は、坂城町教育委員会の責任下において保管されている。

8 本調査及び本書作成にあたって、下記の方や機関からご配慮を得た。記して感謝の意を表したい。(敬称略、50音順)

青木一男、青木正洋、赤松 茂、今福利恵、飯島哲也、上原 学、白田武正、尾見智志、川上 元、
児玉卓文、小林真寿、小山岳夫、坂本美夫、佐藤信之、坂井美嗣、新谷和孝、須藤隆司、瀬田正明、
竹原 学、堤 隆、直井雅尚、西山克己、羽毛田卓也、林 幸彦、福島邦男、三石宗一、翠川泰弘、
宮下健司、欠口忠良、矢島宏雄、和根崎 剛、(社)更埴地域シルバー人材センター、長野市埋蔵文化財
センター、松本市教育委員会、山梨県立考古学博物館、山梨県埋蔵文化財センター

なお、坂城中学校からは、埋蔵文化財の重要性についてご理解いただき、格段のご配慮をいただいた。

凡 例

- 1 遺構の略号は、下記のとおりである。

H→竪穴住居址 D→土坑址 F→掘立柱建物址 P→ピット M→溝状遺構

- 2 遺構名は時代別ではなく、発掘調査時における命名順である。

- 3 挿図の縮尺は、下記を基本としたが、縮尺の異なるものもあるため、各図ごとに縮尺を明記した。

竪穴住居址・掘立柱建物址・土坑址・溝状遺構→1/80 カマド→1/40

遺構配置図→1/800 土器→1/4

- 4 挿図中におけるスクリーントーンは、下記を示す。

1) 遺構

遺構構築土  カマド  焼土  炭化物 

2) 遺物

須恵器土器断面  土師器黒色処理  弥生赤色塗彩  緑附着 

- 5 遺物の挿図中での表記のしかたは、第1図1は、簡易的に1-1とした。

- 6 土層及び土器の胎土の色調は、『新版 標準土色帖』の表記に基づいて記載した。

- 7 土器の観察表は本文の後に掲載し、法量は、口径・底径・器高の順に記載し、一は不明、()が残存値、< >が推定値、()がない場合は、完存値を示している。単位はcmである。

目 次

序章・序・例言・凡例

第1章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至る動機と経緯	1
第2節 調査の構成	2
第3節 調査日誌	3
第II章 遺跡の立地と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 坂城町の歴史的環境	4
第3節 周辺遺跡の概要	8
第III章 調査の概要	12
第1節 調査の方法	12
第2節 基本層序	12
第IV章 調査の結果	14
第1節 弥生時代の遺構・遺物	14
1 竪穴住居址	14
2 その他の遺物	19
第2節 古墳時代後期の遺構・遺物	19
1 竪穴住居址	19
2 土坑址	44
3 溝状遺構	46
第3節 奈良・平安時代の遺構・遺物	48
1 竪穴住居址	48
第4節 掘立柱建物址	74
第5節 土坑址	85
第6節 溝状遺構	89
第7節 ビット及び遺構外等の出土遺物	91
第8節 試掘調査出土遺物	91
第V章 総括	95
第1節 宮上遺跡の出土土器と遺構について	95
第2節 円筒形土製品から見えること	97
第3節 媒の付着した須恵器高台付坏について	101
出土遺物観察表	
写真図版	
あとがき	
報告書抄録	

第I章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る動機と経緯

中之条遺跡群は、坂城町中之条に所在し、標高408～458mを測る御堂川によって形成された扇状地の扇状部に位置する。平成元年度に作成された『坂城町遺跡分布図』によると、縄文～平安時代の複合遺跡とされている。隣接する北浦遺跡では昭和48年の学校給食センター建設工事に伴って、竪穴住居址が2棟検出され、集落址であることが判明しており、周辺に該期の集落址が展開していることは十分予想されていた。

平成3年度、坂城町教育委員会学校教育課が行う坂城中学校改築事業が計画され、遺跡の破壊が余儀なくされることとなり、長野県教育委員会文化課、地元研究者の森嶋稔氏、坂城町教育委員会学校教育課、社会教育課の4者による保護協議が行われた。対象地はかつての中学校建設によって、削平を受けていた事もあり、遺跡がどのような状況か不明であったため、遺跡状況を把握するための試掘調査が必要であると判断され、同年7月に試掘調査が行われた。調査の結果、建設予定地は一部破壊を受けてはいたけれども、集落址であることが判明した。再度の保護協議の結果、校舎建設に係る事前発掘調査が必要になった。計画では建設のための工事着手が迫っていたため、急遽緊急に発掘調査を行うこととなった。調査体制は、平成6年度の発掘調査までは森嶋稔氏を調査団長とする調査団組織で行っていたが、平成7年度から調査の主体は坂城町教育委員会直営となった。

本遺跡は遺跡分布図では中之条遺跡群と総称されていたが、平成3年度の調査結果から遺跡名を新しく宮上遺跡と命名した。なお建設工事は、平成3・4・8・10年度に着手する計画であったため、発掘調査も平成3・4・7・9年度といった4年次にわたって実施された。遺跡については平成3年度に実施された部分を宮上遺跡Ⅰとし、4年度実施が宮上遺跡Ⅱ、7年度実施が宮上遺跡Ⅲ、9年度実施が宮上遺跡Ⅳとした。整理作業については他の遺跡の発掘調査が優先されたため、他遺跡の発掘調査の間をぬいながらの断続的なものであった。



第1図 宮上遺跡位置図 (1:25,000)

第2節 調査の構成

発掘調査体制

- 団長（指導者） 森嶋 稔（日本考古学協会会員、千曲川水系古代文化研究所主幹、平成8年6月16日逝去）
- 調査指導者 塩入 秀敏（上田女子短期大学教授、日本考古学協会会員、平成9年4月～）
- 担当者 助川 朋広（坂城町教育委員会学芸員）
- 調査補助員 小平 光一（坂城町教育委員会学芸員、平成4年～9年）
- 調査協力者 郡山雅友、小宮山愛子、春原かずい、寺沢政枝、中村久子、萩野れい子、菱田よしえ、宮尾美代子（以上、町臨時職員）
- 青木 清、浅井重登、朝倉三郎、阿野道生、五十嵐信男、飯島みね子、石井和美、伊藤 篤、池田輝昭、池田てる子、上野かず江、窪田盛次、栗林初恵、小林さよ子、小林久寛、小宮山昭吾、塩入孝次、烏谷 久、清水よ志、諏訪孝雄、高橋幸世、竹内清志、竹内 達、竹鼻茂、竹前夏代、遠家みきえ、田中 勲、玉井三夫、塚田智子、塚田良子、高山儀昭、中島勘三、中島金子、中島千津子、中村さつき、中村正成、中村光栄、中村容民、西沢茂五郎、西沢光代、西沢善人、日向正義、古畑真一、松本よし子、山崎貞子、山城嘉雄、柳沢勲夫、柳沢良子、横江豊子、矢島岩太郎（以上、更埴地域シルバー人材センター）
- 長谷川和幸、渡辺照夫（以上、当時高校生）

整理調査体制

- 調査指導者 塩入 秀敏（前出）
- 調査担当者 助川 朋広（前出）
- 調査主任 齋藤 達也（坂城町教育委員会学芸員）
- 調査補助員 朝倉妙子、天田澄子、大谷恵子、片桐はまよ、久保田和江、小宮山秀子、西東千佳子、坂巻ケン子、佐藤昭子、塩野入早苗、鈴木洋子、春原かずい、関 亨、塚田さゆり、中村久子、中村優子、萩野れい子、宮尾美代子、宮川千栄子、宮島珠子（以上、町臨時職員）
- 調査協力者 朝倉美栄子、石井和美、伊藤篤、上野かず江、白井かね、大柴はつひ、小島光子、小林さよ子、小林澄江、小林 巴、遠家みきえ、塚田智子、中島千津子、羽毛田とし子、丸橋智子、三井重子、山崎貞子、山辺ケサエ、宮入梅子（以上、更埴地域シルバー人材センター）

（事務局）

- 教 育 長 島田 雅男（平成5年6月退任）、西沢 民雄（平成5年7月～平成9年6月）
大橋 幸文（平成9年7月～）
- 教育次長 宮原 健一（平成11年7月～、生涯学習課長兼務）
- 社会教育課長 塩野入 猛（平成3年～平成9年3月）
- 生涯学習課長 赤池 利博（平成9年4月～平成11年6月）
- 社会教育係長 宮下 和久（平成3年～平成4年3月31日）
- 文化財係長 山崎 政弘（平成4年4月～平成7年3月）、小宮山久春（平成7年4月～平成8年3月）
青木 昌也（平成8年4月～平成9年3月）、池田美智康（平成9年4月～平成12年3月）

池田 弥惣 (平成12年4月～)
 社会教育係 竹内 剛、竹内 禎夫、助川 朋広、北沢 明 (平成3年)
 文化財係 助川 朋広 (平成4年4月～)、小平 光一 (平成4年4月～平成9年)
 齋藤 達也 (平成11年4月～)

第3節 調査日誌

(平成3年度 現地調査)

8月20日	G・H地区の表土剥ぎを開始する。	8月26日	G地区の自然流路検出を開始する。
8月24日	H地区の遺構検出を開始する。	8月27日	G地区の自然流路掘り下げを実施する。
8月25日	H地区D1・2の調査を開始する。	8月30日	本日をもって、現地調査を終了する。

(平成4年度 現地調査)

6月2日	A地区の表土剥ぎを行う。	7月31日	A区埋め戻し開始する。
6月9日	調査開始式を行う。	8月10日	H8・9号住居址の掘り下げ作業を実施する。
6月15日	大まかな遺構の検出作業を実施する。	8月18日	H12・13号住居址の掘り下げ作業を実施する。
6月26日	住居址の検出作業を実施する。	8月28日	H16号住居址の調査を開始する。
7月17日	H1号住居址の掘り下げを開始する。	9月4日	本日をもって、現地調査を終了する。

9月25・26日に行われた坂城中学校文化祭(大峰祭)に出土遺物の展示を行い、生徒及び職員、保護者への公開をした。

(平成7年度 現地調査)

6月19日	C地区の表土剥ぎを開始する。	8月30日	協力者を加え検出作業を開始する。
6月22日	C地区の検出作業を開始する。	9月1日	弥生時代の住居址があることが判明する。
6月29日	H18号住居址調査を開始する。	9月27日	ほぼ遺構の検出が終了する。
7月11日	H17・18・19号住居址調査。	9月29日	H23・25・27号住居址掘り下げを実施する。
8月10日	C地区航空写真の撮影行う。	10月4日	F4号掘立柱建物址の調査を開始する。
8月11日	C地区の調査を終了する。	10月13日	Y1号住居址の掘り下げを開始する。
8月17日	D地区の表土剥ぎを開始する。	11月7日	H27・29号住居址の掘り下げを開始する。
8月23日	検出面が深く土量が多いため、重機の台数を増し表土剥ぎを継続する。	12月15日	本日D地区の航空写真撮影を行う。機材搬出し、本日をもって現地調査を終了する。

11月12日に現地説明会を行い、発掘調査の成果を公開した。

(平成9年度 現地調査)

4月21日	E地区の表土剥ぎを開始する。	9月24日	F地区の表土剥ぎを開始する。
4月28日	E地区の遺構調査開始する。	9月25日	F地区の調査を開始する。
6月30日	E地区の調査を終了する。	10月2日	本日をもって、現地調査を終了する。

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

坂城町は、北信濃と東信濃の接触点にあたり、善光寺平を構成する更埴地方の最南端に位置している。坂城町は、県の東部から北流する千曲川によって右岸地域と左岸地域とに分断されている。この千曲川は、坂城広谷と呼ばれる沖積地を形成し、町の中央部を流れ、戸倉町、上山田町の沖積地へと続いている。

坂城町の地形を見ると、南では、両岩鼻が千曲川断層面の岩壁となり、東では、太郎山、鏡台山などの山稜が、上田市、真田町、更埴市の市町村界となっている。北では五里ヶ峰から葛尾山、横吹きと自在山の岩壁がネック状となり、屏風のように連なっている。西では、大林山を主峰とする山稜が連続し、上田、上山田との市町村界となって、一地域を構成している。

地理的構造は、右岸地域と左岸地域では様相が異なり、左岸地域の村上地区は千曲川断層面の切り立った岩壁と小さな沢や岩盤による小複合扇状地と千曲川沿いの沖積地に構成されている。千曲川右岸に位置する坂城・中之条・南条地区は摺り鉢状の盆地地形をなす千曲川の独立した空間で、広谷状をなし、西南する広い斜面と、いくつかの小河川や沢によって形成された複合扇状地と千曲川沿いの沖積地となっている。また、坂城町は隣接する上田市域と同様に、中央高原型の内陸盆地性の気候で、年間を通じて降水量が最も少ない地域でもある。

官上遺跡は、坂城町の千曲川右岸に位置する中之条地区に所在し、御堂川によって形成された標高440mを測る扇状地の扇状部付近の堆積斜面に位置している。遺跡の西側には、近世の官道であった北国街道によって形成・発達した集落域が存在している。この地域は現在でも宅地化が進んでいる地域である。

第2節 坂城町の歴史的環境

坂城町の自然堤防や小河川によって形成された複合扇状地には、いくつもの遺跡が存在し、遺跡の性格も多種多様である。ここでは、坂城町の歴史的環境を時代ごとに概観することにした。

縄文時代の遺跡では、発掘調査例が少なく詳細に欠けることが多い。『坂城町誌』では込山B遺跡(30-1)から採集された押型文や諸磯系の土器が掲載されている。込山C遺跡(30-3、註1)からは、諸磯系の土器が出土し、当町で初めて該期の住居址が検出された。この込山C遺跡は、晩期の遮光器土偶の採集された込山D遺跡に隣接しており、これを統括する込山遺跡群は、今後の調査に期待される遺跡である。

南条地区の保地遺跡では、縄文時代の後期～晩期の土器が出土しており、晩期前半の一括遺物の出土によって注目を集めた遺跡である。(註2)この保地遺跡の隣接地で行われた発掘調査では、後期に所属すると思われる土器が検出され、多数の頭蓋骨の二次埋葬が行われたことが看取された(註3)。また、一次調査同様に多量の晩期の土器の出土等重要な所見が得られている。

縄文時代同様に弥生時代の遺跡も発掘調査例が少ないわけであるが、坂城地区の込山B・C遺跡から、中期の粟林式に所属する甕形土器が出土し(註4)、今後の調査に期待されている。後期後半の集落としては、南条地区の塚田遺跡Ⅱ(1-5)があげられ、北陸系土器や樽式土器の出土もあった。また、多数の石包丁の出土があって、周辺に該期の水田址の存在が予想される遺跡でもある。遺跡の立地は、千曲川の中洲あるいは自然堤防上の集落



第2図 坂城町遺跡分布図

図面番号	遺跡名	種別	時代
1	南条遺跡群 東原遺跡	集落址	弥生~平安
-1	南条遺跡群 東原遺跡	集落址	弥生~平安
-2	南条遺跡群 野田山遺跡 (山頂)	集落址	弥生~平安
-3	南条遺跡群 野田山遺跡 (山頂)	集落址	弥生~平安
-4	南条遺跡群 中野遺跡 (峠道)	集落址	弥生~平安
-5	南条遺跡群 中野遺跡	集落址	弥生~平安
-6	南条遺跡群 野田山遺跡	集落址	弥生~平安
-7	南条遺跡群 野田山遺跡 (山頂)	集落址	弥生~平安
-8	南条遺跡群 野田山遺跡	水田址、貯蔵庫	弥生~平安
2	金井原遺跡群 金井原遺跡	集落址	縄文~平安
-1	金井原遺跡群 金井原遺跡	集落址	縄文~平安
-2	金井原遺跡群 野田山遺跡 (金井原)	集落址	縄文~平安
-3	金井原遺跡群 野田山遺跡	集落址	縄文~平安
3	金井原遺跡群 野田山遺跡	集落址	縄文~平安
-1	金井原遺跡群 野田山遺跡	集落址	縄文~平安
-2	金井原遺跡群 野田山遺跡	集落址	縄文~平安
-3	金井原遺跡群 野田山遺跡 (福原小学校敷地)	集落址	縄文~平安
-4	金井原遺跡群 野田山遺跡	集落址	縄文~平安
4	野田山遺跡群 野田山遺跡	集落址	縄文~平安
5	針葉杉群	庭園	平安
6	阿波尾遺跡群	集落址	縄文~平安
7	北谷遺跡	古墳	古墳 (後期)
8	中之島遺跡群 野田山遺跡	集落址	縄文~平安
-1	中之島遺跡群 野田山遺跡	集落址	縄文~平安
-2	中之島遺跡群 野田山遺跡	集落址	縄文~平安
-3	中之島遺跡群 野田山遺跡	集落址	縄文~平安
-4	中之島遺跡群 野田山遺跡	集落址	縄文~平安
-5	中之島遺跡群 野田山遺跡	集落址	縄文~平安
-6	中之島遺跡群 野田山遺跡	集落址	縄文~平安
9	福原山遺跡群 福原山遺跡	古墳	古墳 (後期)
10	福原山遺跡群 福原山遺跡	古墳	古墳 (後期)
-1	福原山遺跡群 福原山遺跡	古墳	古墳 (後期)
-2	福原山遺跡群 福原山遺跡	古墳	古墳 (後期)
11	入原山遺跡群	集落址	平安
12	野田山遺跡群 野田山遺跡	古墳	古墳 (後期)
13	新原遺跡群	集落址	平安~近世
14	御堂川古遺跡群 山崎支群	古墳	古墳 (後期)
15	山崎遺跡	集落址	縄文
16	御堂川古遺跡群 山崎支群	古墳	古墳 (後期)
17	御堂川古遺跡群 山崎支群	古墳	古墳 (後期)
-1	御堂川古遺跡群 山崎支群	古墳	古墳 (後期)
-2	御堂川古遺跡群 山崎支群	古墳	古墳 (後期)
-3	御堂川古遺跡群 山崎支群	古墳	古墳 (後期)
-4	御堂川古遺跡群 山崎支群	古墳	古墳 (後期)
-5	御堂川古遺跡群 山崎支群	古墳	古墳 (後期)
-6	御堂川古遺跡群 山崎支群	古墳	古墳 (後期)
-7	御堂川古遺跡群 山崎支群	古墳	古墳 (後期)
-8	御堂川古遺跡群 山崎支群	古墳	古墳 (後期)
-9	御堂川古遺跡群 山崎支群	古墳	古墳 (後期)
-10	御堂川古遺跡群 山崎支群	古墳	古墳 (後期)
-11	御堂川古遺跡群 山崎支群	古墳	古墳 (後期)
-12	御堂川古遺跡群 山崎支群	古墳	古墳 (後期)
-13	御堂川古遺跡群 山崎支群	古墳	古墳 (後期)
18	御堂川古遺跡群 野田山支群 二塚古墳	古墳	古墳 (後期)
19	御堂川古遺跡群 山崎支群	古墳	古墳 (後期)
20	野田山遺跡群 野田山遺跡 (山頂)	集落址	縄文~弥生
21	野田山遺跡群 野田山遺跡 (山頂)	集落址	弥生~平安
22	人塚古墳	古墳	古墳 (後期)
23	野田山遺跡群	集落址	縄文~平安
24	野田山遺跡群	集落址	古墳~平安
25	入原山遺跡群	集落址	平安~平安
26	野田山遺跡群 (御堂川支群)	古墳	古墳 (後期)
27	金井原山遺跡群	集落址	縄文~平安
28	野田山遺跡群	集落址	平安
29	野田山遺跡群	集落址	平安
30	山崎遺跡群	集落址	縄文~平安
-1	山崎遺跡群 山崎支群 (北上)	集落址	縄文~平安
-2	山崎遺跡群 山崎支群 (北谷)	集落址	縄文~平安
-3	山崎遺跡群 山崎支群 (山崎)	集落址	縄文~平安
-4	山崎遺跡群 山崎支群 (福原)	集落址	縄文~平安
-5	山崎遺跡群 山崎支群 (山崎)	集落址	縄文~平安
31	日名沢遺跡群 日名沢遺跡	集落址	弥生~平安
-1	日名沢遺跡群 日名沢遺跡	集落址	弥生~平安
-2	日名沢遺跡群 山崎支群	集落址	弥生~平安
32	土井ノ入遺跡群	集落址	弥生~平安
33	平野遺跡	集落址	縄文

図面番号	遺跡名	種別	時代
34	境川遺跡群	集落址	平安
35	平沢遺跡群	集落址	縄文
36	野田山遺跡群	集落址、貯蔵庫	縄文~平安
-1	野田山遺跡群 野田山遺跡	集落址	縄文~平安
-2	野田山遺跡群 野田山遺跡	貯蔵庫	弥生
-3	野田山遺跡群 野田山遺跡	貯蔵庫	平安
37	野田山遺跡群	古墳	古墳 (後期)
38	野田山遺跡群	集落址	平安
39	野田山遺跡群	集落址	縄文
40	日名名遺跡群	集落址	平安
-1	日名名遺跡群 日名名遺跡	集落址	古墳 (後期)
-2	日名名遺跡群 日名名遺跡	集落址	古墳 (後期)
41	野田山遺跡群	集落址	縄文
42	野田山遺跡群	集落址	縄文
43	野田山遺跡群	集落址	平安
44	野田山遺跡群	集落址	平安
45	山崎川遺跡群 山崎支群1号墳	古墳	古墳 (後期)
-1	山崎川遺跡群 山崎支群1号墳	古墳	古墳 (後期)
-2	山崎川遺跡群 山崎支群2号墳	古墳	古墳 (後期)
-3	山崎川遺跡群 山崎支群4号墳	古墳	古墳 (後期)
-4	山崎川遺跡群 山崎支群5号墳	古墳	古墳 (後期)
-5	山崎川遺跡群 山崎支群6号墳	古墳	古墳 (後期)
-6	山崎川遺跡群 山崎支群7号墳	古墳	古墳 (後期)
-7	山崎川遺跡群 山崎支群8号墳	古墳	古墳 (後期)
46	山崎川遺跡群	集落址	弥生~平安
47	山崎川遺跡群	集落址	古墳 (後期)
-1	山崎川遺跡群 山崎支群1号墳 (福原社古墳)	古墳	古墳 (後期)
-2	山崎川遺跡群 山崎支群2号墳	古墳	古墳 (後期)
-3	山崎川遺跡群 山崎支群3号墳	古墳	古墳 (後期)
-4	山崎川遺跡群 山崎支群4号墳	古墳	古墳 (後期)
-5	山崎川遺跡群 山崎支群5号墳	古墳	古墳 (後期)
48	山崎川遺跡群	集落址	平安
49	山崎川遺跡群 山崎支群4号墳	古墳	古墳 (後期)
50	山崎川遺跡群	集落址	平安
51	山崎川遺跡群	集落址	平安
52	山崎川遺跡群	集落址	平安
53	山崎川遺跡群	集落址	平安
54	山崎川遺跡群	集落址	平安
55	山崎川遺跡群	集落址	平安
56	山崎川遺跡群	集落址	平安
57	山崎川遺跡群	集落址	平安
58	山崎川遺跡群	集落址	平安
59	山崎川遺跡群	集落址	平安
60	山崎川遺跡群	集落址	平安
61	山崎川遺跡群	集落址	平安
62	山崎川遺跡群	集落址	平安
63	山崎川遺跡群	集落址	平安
64	山崎川遺跡群	集落址	平安
65	山崎川遺跡群	集落址	平安
66	山崎川遺跡群	集落址	平安
67	山崎川遺跡群	集落址	平安
68	山崎川遺跡群	集落址	平安
69	山崎川遺跡群	集落址	平安
70	山崎川遺跡群	集落址	平安
71	山崎川遺跡群	集落址	平安
72	山崎川遺跡群	集落址	平安
73	山崎川遺跡群	集落址	平安
74	山崎川遺跡群	集落址	平安
75	山崎川遺跡群	集落址	平安
76	山崎川遺跡群	集落址	平安
77	山崎川遺跡群	集落址	平安
78	山崎川遺跡群	集落址	平安
79	山崎川遺跡群	集落址	平安
80	山崎川遺跡群	集落址	平安
81	山崎川遺跡群	集落址	平安
82	山崎川遺跡群	集落址	平安
83	山崎川遺跡群	集落址	平安
-1	山崎川遺跡群 山崎支群1号墳	古墳	古墳 (後期)
-2	山崎川遺跡群 山崎支群2号墳	古墳	古墳 (後期)
-3	山崎川遺跡群 山崎支群3号墳	古墳	古墳 (後期)
84	山崎川遺跡群	集落址	平安
85	山崎川遺跡群	集落址	平安
86	山崎川遺跡群	集落址	平安
87	山崎川遺跡群	集落址	平安
88	山崎川遺跡群	集落址	平安
89	山崎川遺跡群	集落址	平安
90	山崎川遺跡群	集落址	平安

址といえる。

古墳時代の遺跡としては、近年の発掘調査によって古墳や集落址等が徐々に明らかになりつつある。古墳としては、当町では後期古墳が大半を占めるわけではあるが、近年の発掘調査結果から中期に位置づけられるものとして中之条地区の仮称東平1・2号墳が目目されている(註5)。多数を占める後期古墳の中では、中之条地区の御堂川古墳群前山文群(17)、南条地区の谷川古墳群(10)、村上地区の出浦沢古墳群(45)福沢古墳群などがあげられる。福沢古墳群に統括される御野社古墳(47-1)は、石室の規模が千曲川流域で最大といわれている。これらの古墳分布は、「坂城町遺跡分布図」から河川沿いに立地していること、坂城地区には古墳が少ないことなどが看取される。

集落址では、本遺跡を総括する中之条遺跡群内に多数検出されていることが、近年の発掘調査の結果判明してきている。(註6)他地域では南条地区で、東裏遺跡(1-1)に集落址が検出されている。この東裏遺跡と隣接する青木下遺跡(1-8)は、祭祀的な性格の遺跡であって、環状に配列された土器群の検出は全国に例を見ない遺構として、注目された遺跡である。(註7)

奈良時代の集落址としてはあまり例がないが、本遺跡や周辺の遺跡内での検出がある。中之条地区の上町遺跡Ⅳ(8-2)からは、奈良二彩(三彩)の葉巻の蓋が出土しており、注目されるものである。(註8)生産遺跡としては、坂城地区の土井ノ入窯跡(32)があげられ、南面する斜面や西南する斜面において須恵器生産が、操業されていたと考えられている。

平安時代の遺跡では、9世紀初頭の寺院址と考えられている坂城地区の込山庵寺(54)、土井ノ入窯跡(32)の瓦窯があげられる。土井ノ入窯跡で生産された瓦は、先述の込山庵寺、上田市の信濃国分寺・尼寺や更埴市の正法庵寺の補修用の差し瓦として使用されたことが明らかとなっている。他に宗教的な遺跡として、11世紀末に位置づけられる坂城地区の北日名経塚(40)があり、銅鑄製の経筒、和鏡、白磁輪花小皿などが出土している。現在これらの遺物は、東京国立博物館に保管されている。集落址としては、南条地区の東裏遺跡(1-1)や、本遺跡、上町遺跡、寺浦遺跡などの周辺遺跡に散見される。

中世では、嘉保1(1094)年信濃国更級郡に配流された源盛清が始祖と考えられている。村上氏が国人領主として成長し、戦国時代には武将村上義清が活躍している。この村上義清は唯一武田信玄を二度打ち破った武将といわれている。その村上氏の居城が葛尾山頂に位置する葛尾城跡(44)で、その下方に位置する現在満泉寺の所在する一帯が、村上氏館跡(38)である。葛尾城は、天文22(1553)年に武田信玄の攻略により落城したと伝えられ、現存していない。満泉寺は、天正10(1582)年村上義清の子である景国により、村上氏の先祖代々の菩提寺として建立されたと伝えられている。

昭和52・53年に発掘調査された中之条地区の開畝製鉄遺跡(53)は、長野県内最初の製鉄遺跡の学術調査と学術づけられるものであった。発掘調査の結果、製鉄炉址2基が検出され、炉内の木炭の放射性炭素年代測定結果及び出土遺物を参考にした結果、16世紀頃の戦国時代末期と位置づけられた。戦国時代末期の風潮として、鉄の自給生産の必要性が認められ、この結果当時は、鉄生産が行われたのではないかと示唆されている。

近世では北国街道(90)の制定により、坂木宿が宿駅として発展した。元和8(1622)年坂木・中之条村は幕府の直轄地である天領となり、重要な場所と位置づけられた。当初は坂木陣屋が置かれていたが、宝暦9(1759)年に中野陣屋に移り、安永8(1779)年中之条に陣屋が設置されたとされている。現在中之条陣屋や坂木陣屋については、建物等が残存せず、中之条陣屋については井戸が現存しているのみである。これらの詳細については、発掘調査も実施されていない状況のため、不明なところが多い。

以上簡単ではあるが、中之条地区の遺跡と歴史についてふれたわけであるが、古墳時代以降本遺跡周辺は、集

落が展開し、重要な位置を占めてきた状況が見てとれる。

註

- 1 平成12年度発掘調査を実施。現在整理中。
- 2 1966 関 孝・『考古学雑誌』第51巻第3号「長野県埴科郡保地遺跡発掘調査概報」
- 3 平成11年度発掘調査を実施。現在整理中。
- 4 平成11年度込山B遺跡発掘調査を実施。現在整理中。平成12年度込山C遺跡Ⅱの調査で出土。
- 5 東平1・2号墳は、上信越自動車道路の建設に伴い、(財)長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われた。当時周知の御堂川古墳群東平支群1・2号墳と異なる可能性があったため、発掘調査報告書では、仮称東平1・2号墳として報告された。今後詳細な現地踏査を実施し、遺跡の名称を検討し、確定する必要がある。
- 6 第3節参照。
- 7 平成8年度発掘調査実施。現在整理中。
1997 助川 朋広『祭祀考古』第8号「長野県埴科郡坂城町青木下遺跡Ⅱの祭祀遺構」
- 8 平成11年度発掘調査を実施。現在未整理。

第3節 周辺遺跡の概要

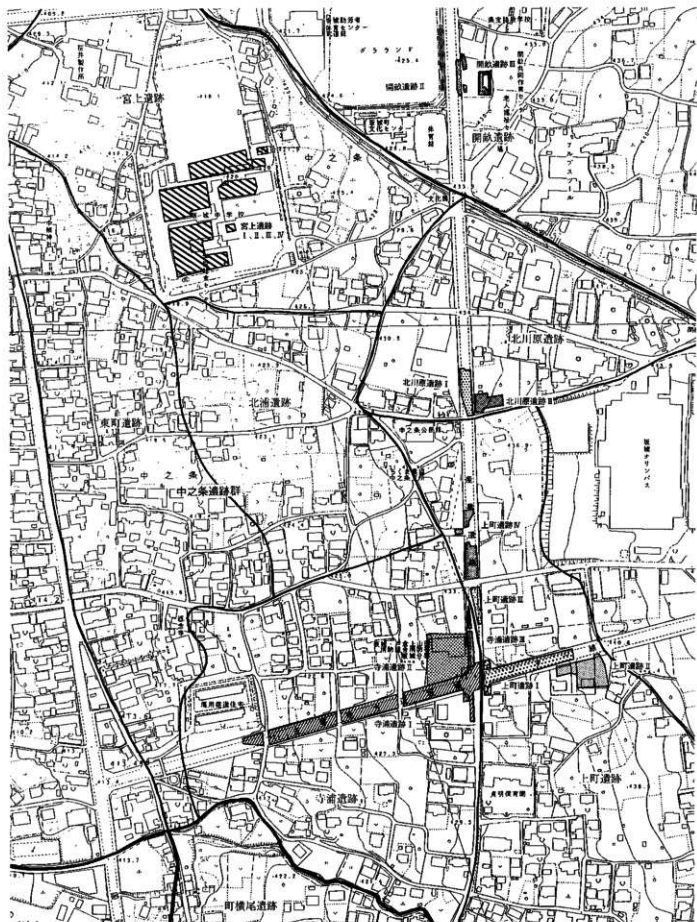
宮上遺跡は先述のとおり、千曲川右岸の中之条地区に位置する遺跡である。中之条地区は、北は砥沢が坂城地区との境界となり、南は沢地形（前沢）が南条との境界となっている。近年中之条地区においては、発掘調査が集中して実施されたこともあり、徐々に概要が判明してきた地域である。ここでは宮上遺跡を中心とした周辺の遺跡概要について、ふれることとしたい。

縄文時代では、御堂川扇状地の扇頂部付近の豊饒堂遺跡（20）が存在し、黒曜石製の石鏃や剥片などが採集されているが、遺構については、耕作等によって破壊されてしまっている可能性が高いのか現在検出されていない状況である。

弥生時代としては、寺浦遺跡（8-1）H12号住居址が後期の住居址とされている以外は、当遺跡で4棟検出されているにすぎない状況で、今後の発掘調査に委ねられている。

古墳としては上信越自動車道に伴って、平成4年に発掘調査された仮称東平1・2号墳（註1）と、平成5年度に調査された砥沢古墳（66）があげられる。これらの古墳は、坂城町において唯一中期に位置づけられる古墳である。東平2号墳は出土遺物に恵まれ、その結果5世紀第2四半期前半に位置づけられた。調査の結果、1号墳がやや遅れる5世紀第2四半期後半とされている。また、御堂川沿いには御堂川古墳群前山支群（17）が所在し、後期古墳と考えられている。集落址としては、宮上遺跡を統括する中之条遺跡群内には、寺浦遺跡（8-1）、上町遺跡（8-2）、東町遺跡（8-3）、北浦遺跡（8-4）北川原遺跡（8-6）が所在しており、古墳時代後期を主体とする集落址であることが明らかになっている。寺浦遺跡・寺浦遺跡Ⅱなどの発掘調査では、大型の掘立柱建物址を主体とする後期の集落址が検出された。また、本遺跡で出土している円筒形土製品の出土を見ると、本遺跡群内の北浦遺跡、寺浦遺跡Ⅱ、北川原遺跡Ⅱからも出土しており、同一の性格をもつ集落址とも考えられる。

奈良時代の集落址としては、寺浦・上町遺跡などがあげられる。これも本遺跡群内を中心として該期の遺跡が存在していることが確認されている。本時代の遺物で特筆できるものとして上町遺跡Ⅳから奈良二彩（三彩）の



第3図 周辺遺跡分布図 (1:4000)

葉壺の蓋が、住居址覆土から出土している（註2）。その他詳細は定かではないが、本遺跡や寺浦遺跡Ⅱの出土遺物の須恵器に生焼けや深んだものが散見されるため、周辺に須恵器の窯跡が存在している可能性も考えられる。

平安時代では、本遺跡や、寺浦遺跡Ⅰ・Ⅱ、上町遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅳなどから集落址が検出されており、同時代でも本遺跡群内に集落の展開が見られている。また、寺浦遺跡H8号住居址からは緑釉陶器の塚が出土している。

中世の遺跡としては、昭和52・53年発掘調査が実施された開畝製鉄遺跡がある。御堂川扇状地の山脚部である竜田山の山麓に立地している。調査の結果、製鉄炉址が2基検出され、竪形の炉であることが判明した。稼業年代は、出土木炭の放射性炭素年代測定を実施した結果、第1号製鉄炉址は16～17世紀頃、第2号製鉄炉址は19～20世紀頃といった結論が得られた。第2号製鉄炉址は擾乱を受けており、測定した木炭は混入したものである可能性が高く、出土遺物からの検討によって、第1・2号製鉄炉址共に、16世紀頃の中世末の所産と比定された。

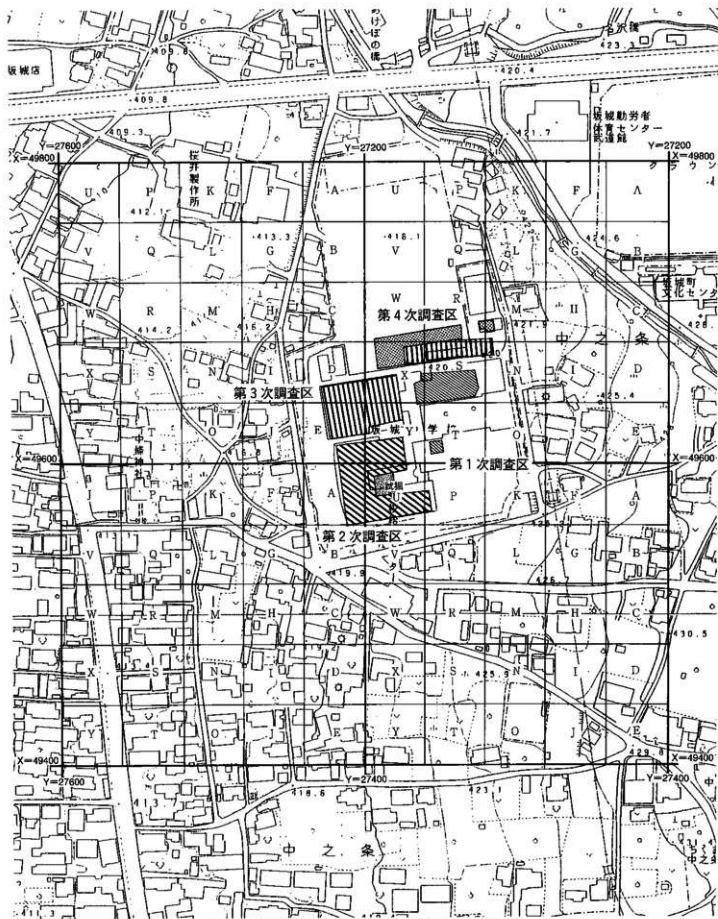
以上周辺で実施された発掘調査の概要から、中之条地区の遺跡の特徴を概観したわけであるが、中之条地区の遺跡は、古墳時代後期以降になってから爆発的に集落が形成されたことが窺取される。また、奈良二彩の出土などからも一般的な集落とは考えられない状況が確認できるなど、古代においても重要な地域であったといえる。

註

- 1 東平1・2号墳は、上信越自動車道路の建設に伴い、(財)長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われた。当時同知の御堂川古墳群東平文群1・2号墳と異なる可能性があったため、発掘調査報告書では、仮称東平1・2号墳として報告された。今後詳細な現地踏査を実施し、遺跡の名称を検討する必要がある。
- 2 未報告資料。都市計画街路事業によって、平成11年度発掘調査を実施。鑑定を行っていないため、二彩であるのか三彩であるのか不明な状態である。

引用・参考文献

- 岡 孝一 1966 「長野県埴科郡保地遺跡発掘調査概報」『考古学雑誌』第51巻第3号
- 坂城町教育委員会 1978 「開畝製鉄遺跡 一第1次調査報告一」
- 坂城町教育委員会 1979 「開畝製鉄遺跡 一第2次調査報告一」
- 森嶋 稔ほか 1981 「坂城町誌 中巻 歴史編 (一)」坂城町誌発行会
- 坂城町教育委員会 1993 「中之条遺跡群 宮上遺跡Ⅱ」概報
- 坂城町教育委員会 1995 「南条遺跡群 塚山遺跡Ⅱ」
- 坂城町教育委員会 1996 「豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡」
- 坂城町教育委員会 1996 「中之条遺跡群 寺浦遺跡Ⅱ」
- 助川 朋広 1997 「長野県埴科郡坂城町青木下遺跡Ⅱの祭祀遺構」『祭祀考古』第8号
- 若林 卓 1999 「第9章 東平古墳群」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書21』
- (財)長野県埋蔵文化財センター



第4図 宮上遺跡発掘調査区及びグリッド設定図 (1 : 2500)

第Ⅲ章 調査の概要

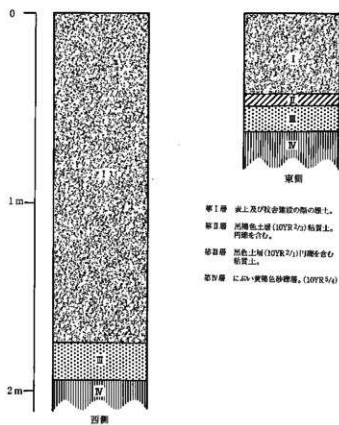
第1節 調査の方法

本遺跡の調査には、調査区の遺構・遺物の正確な位置を記録でき、なお周辺に存在する遺構・遺物の調査にも整合できるように、国系国家座標の座標軸を基にグリッドを組んだ。グリッドは、200m×200mの大グリッドを設け区画を行い、その中を40m×40mに25等分した中グリッドを設定(第4図)し、北東端より、「A・B・C・・・Y」区とアルファベットの大文字で命名した。本調査区では、M・N・R・S・T・W・X・Y、D・E、P・U、A区が相当する。また、その中グリッドを4m×4mのグリッドで100区画に分割し、南北列を北から算用数字で「1・2・3・・・10」、東西列を東から五十音順で「あ・い・う・・・こ」とした。各グリッドの北東交点を小グリッドとして、遺物の取り上げや遺構図の作成の基準とした。発掘調査における遺構の実測は、1/20を基本として簡易造り方実測及び、平板測量を行った。

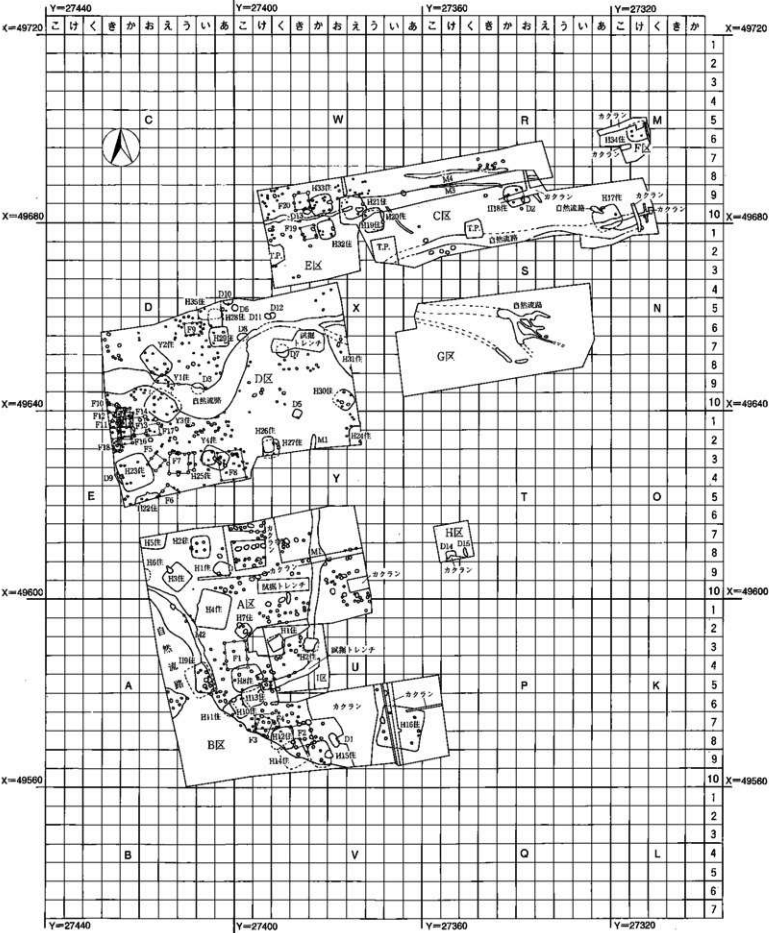
第2節 基本層序

宮上遺跡の調査区内は先述したわけであるが、昭和35年に当時の坂城中学校が建設された時に、削平や盛土などによって造成された経緯があって、今回の発掘調査区の基本土層は大きく2とおり観察された。坂城中学校の敷地内での状況を見ると、東から西への傾斜地であったため、東側は大きく削平され、西側については掘削よりも盛土が多くなされている状況であった。これらを具体的に示したのが基本層序模式図である。

第Ⅰ層は表土及び学校建設時の埋土である。第Ⅱ層は黒褐色を呈する土層、第Ⅲ層は黒色礫層である。第Ⅳ層は、にぶい黄褐色を呈する粘質土で、礫を多く含んでいた。先述のとおり、東側を深く削平した後、西側を盛土して整地を行ったため、西側調査区の検出面までが深く、東側が浅くなっていた。第Ⅰ層は東側では20~30cm、西側では1~3mという状況であった。第Ⅱ・Ⅲ層が遺物の包含層と考えられたが、発掘調査に当たり、期間的なことや遺物量も少なかったことなどを勘案して、遺構の検出はⅣ層上面で行った。



第5図 基本層序模式図



第6図 宮上遺跡遺構配置図 (1 : 800)

第IV章 調査の結果

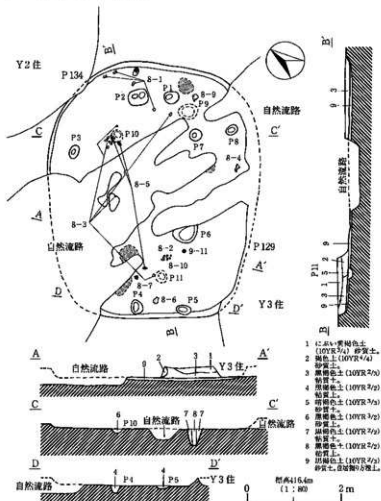
第1節 弥生時代の遺構・遺物

1 竪穴住居址

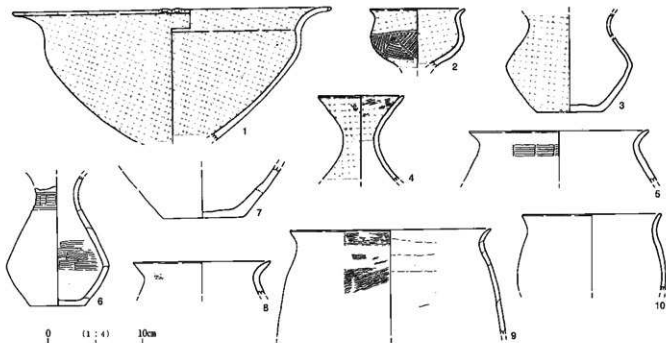
1) Y1号住居址

遺構 (第7図)

検出位置 Dえ8・9・10グリッド、Dお8・9・10グリッド。重複関係 Y2・3号住居址に切られる。自然流路とP134に切られ、中央部と北西壁の一部を破壊されている。平面形態 長軸5.2m、短軸4.1mの隅丸方形を呈する。主軸方位はN-51°-Eを指す。壁残高は0~15cmを測る。覆土 3層に分かれ、1層がぶい黄褐色土、2層が褐色土、3層が黒褐色土であった。床面の状態 平坦な床面であったが、あまり堅固ではなかった。炉 焼土が4箇所検出されたが、炉と捉えられなかった。ピット 11基検出された。自然流路によって中央付近が破壊されていたため定かでないが、P6・7・10が支柱穴と思われた。P1は楕円形で深さ22cm



第7図 Y1号住居址実測図



第8図 Y1号住居址出土土器実測図

を測る。P2は楕円形でテラスを有し、深さ23cmを測る。P3は楕円形で深さ10cmを測る。P4は楕円形で深さ15cmを測る。P5は楕円形で深さ11cmを測る。P6は楕円形で深さ10cmを測る。P7は円形で深さ33cmを測る。P8は楕円形で深さ12cmを測る。P9は楕円形で深さ7cmを測る。P10は楕円形で深さ12cmを測る。P11は楕円形で深さ10cmを測る。北壁下のP1・2、南壁下のP4・5が入口施設の可能性が高い。遺物の出土状況 覆土中から壺・壺・高坏などが出土した。

遺物 (第8・9図)

本住居址から出土した土器では壺・甕・高坏などを図化した。

1は大型の鐮状口縁の高坏、2は台付甕、3・4・6・7は壺である。4は内外面赤色塗彩が施された小型の壺、6は頸部に橋掛き糜状文の等間隔止めが施されている。5・8~10は甕で、摩耗が著しく調整等が不明なものが多い。11は磨製石鏃である。

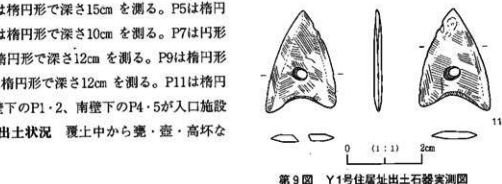
時期 本住居址の所

属時期は、出土土器から見ると古い様相の土器が含まれているため弥生時代中期末と思われる。

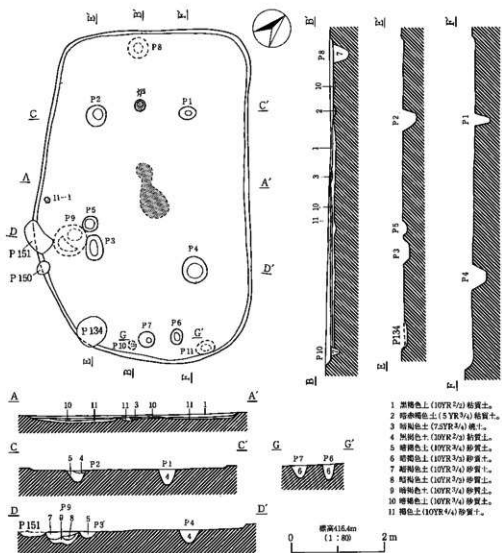
2) Y2号住居址

遺構 (第10図)

検出位置 Dえ7・8、Dお7・8、Dか7・8グリッド。重複関係 Y1号住居址に切られる。平面形態 長軸6.8m、短軸4.3mの不整な隅丸長方形を呈する。主軸方位はN-47°-Wを指す。壁残高は2~11cmを測る。覆土 黒褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦な床面を呈していたが、あまり堅固な床面ではなかった。



第9図 Y1号住居址出土土器実測図



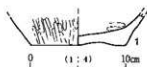
第10図 Y2号住居址実測図

炉 P1とP2の主柱穴間中央に位置し、長軸25cm、短軸23cmの楕円形の地床炉であった。ピット 11基検出され、P1～P4が主柱穴と思われた。P1は楕円形で深さ33cmを測る。P2は楕円形で深さ25cmを測る。P3は楕円形で深さ15cmを測る。P4は楕円形で深さ32cmを測る。P5は楕円形で深さ7cmを測る。P6は楕円形で深さ34cmを測る。P7は円形で深さ30cmを測る。P8は円形で深さ27cmを測る。P9は楕円形でテラスを有し、深さ15cmを測る。P10は楕円形で深さ12cmを測る。P11は楕円形で深さ23cmを測る。北壁下のP6・

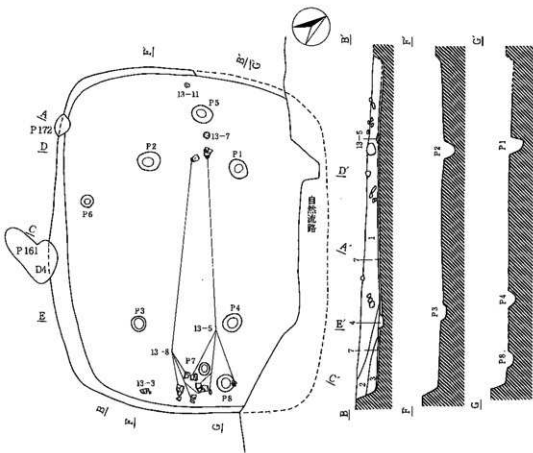
P7が入口施設と思われる。遺物の出土状況 覆土中から甕・壺などが少量出土した。

遺物(第11図) 本住居址で図化できたものは、外面縦方向のヘラミガキが施される壺の底部のみである。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物が少なく不明な要素が多いわけであるが、重複関係から考慮して弥生時代後期後半であろう。



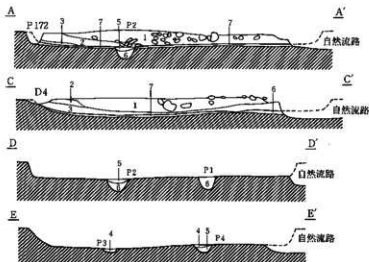
第11図 Y2号住居址出土器実測図



3) Y3号住居址

遺構 (第12図)

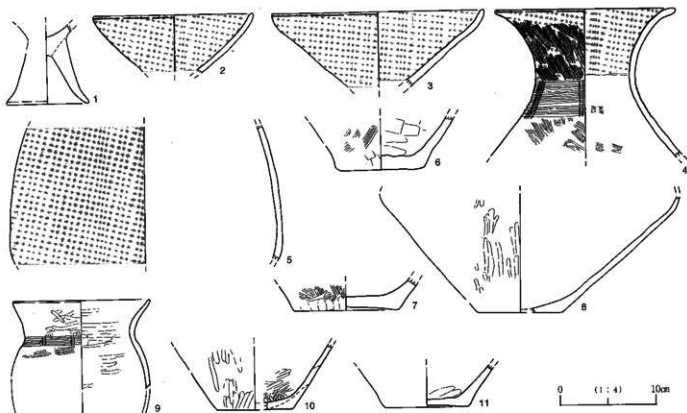
検出位置 Dえ7・8、Dお10、Eえ1、Eお1グリッド。重複関係 自然流路に切られ、北壁、南壁、東壁の一部を破壊されていた。Y1号住居址を切る。平面形態 長軸7m、短軸5.3?mの隅丸長方形を呈す



- 1 黒褐色土(10YR 3/2)砂質土。層(1-5m)多数含む。
- 2 暗褐色土(10YR 3/2)砂質土。層(1-2m)少量含む。
- 3 暗褐色土(10YR 3/2)砂質土。
- 4 暗褐色土(10YR 3/2)砂質土。
- 5 暗褐色土(10YR 3/2)砂質土。
- 6 暗褐色土(10YR 3/2)砂質土。
- 7 褐色土(10YR 4/2)粘質土。
- 8 暗褐色土(10YR 3/2)粘質土。(5層層り方層1。

0 標準45.7m (1:40) 2m

第12図 Y3号住居址実測図



第13図 Y3号住居址出土土器実測図

る。主軸方位はN-58°-Wを指す。壁残高は11~42cmを測る。覆土 黒褐色土、暗褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦な床面を呈し、南東部が堅固な床面であった。炉 検出されなかった。ピット 8基検出され、P1~P4が主柱穴と思われた。P11は楕円形で深さ28cmを測る。P2は楕円形で深さ33cmを測る。P3は楕円形で深さ8cmを測る。P4は楕円形で深さ19cmを測る。P5は楕円形で深さ36cmを測る。P6は円形で深さ8cmを測る。P7は楕円形で深さ12cmを測る。P8は円形で深さ12cmを測る。遺物の出土状況 覆土中から甕・壺などが多量に出土した。

遺物 (第13図)

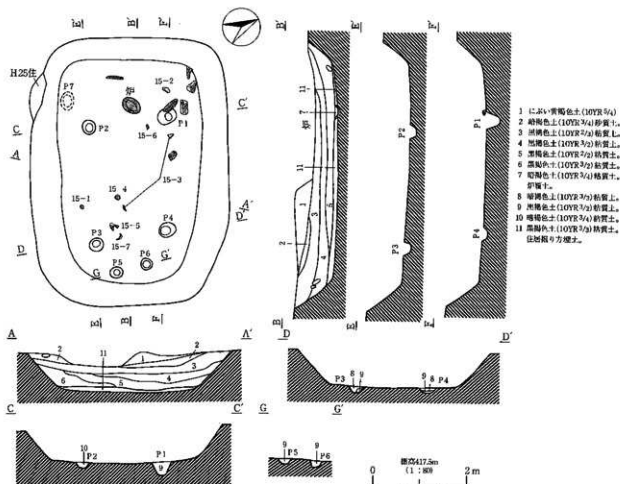
本住居址出土遺物は、1は小型の高坏、2・3は内外面赤色塗彩が施された鉢と思われる。4~8は壺で、4には頸部に髷描きT字文が施されている。9~11は甕で、9は頸部に髷描き麻状文が施されている。他の遺物として今回図化できなかったが、頸部に鋸齒文の施された壺も出土している。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から弥生時代後期後半と考えられる。

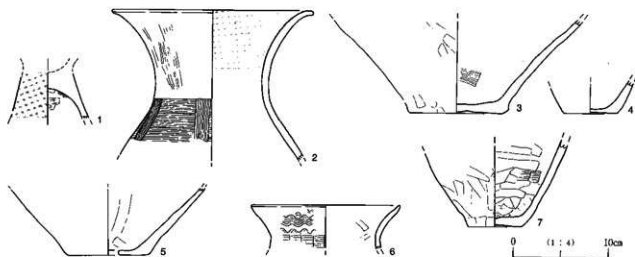
4) Y4号住居址

遺構 (第14図)

検出位置 Eあ2・3・4、Eい2・3・4グリッド。重複関係 H25号住居址に切られ、西壁、南壁の一部を破壊されていた。平面形態 長軸4.7m、短軸2.8mの隅丸長方形を呈する。主軸方位はN-67°-Wを指す。壁残高は48~77cmを測る。覆土 ぶい黄褐色土、黒褐色土、暗褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦な床面を呈し、やや堅固な床面であった。炉 西側主柱穴間や壁側に長軸42cm、短軸28cmの地床炉が検出された。ピット 7



第14図 Y4号住居址実測図



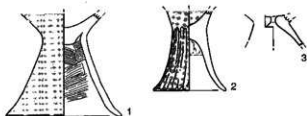
第15図 Y4号住居址出土土器実測図

基検出され、P1～P4が主柱穴と思われた。P1は楕円形で深さ28cmを測る。P2は楕円形で深さ14cmを測る。P3は円形で深さ16cmを測る。P4は楕円形で深さ11cmを測る。P5は円形で深さ10cm、P6は円形で深さ10cmを測る。共に壁下から検出され、入口の施設と思われる。P7は床面下より検出され、楕円形で深さ10cmを測る。遺物の出土状況 覆土中から甕・壺などが多量に出た。

遺物 (第15図)

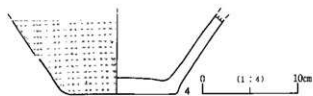
1は外面赤色塗彩の施された高坏の脚部、2～4が壺である。2は頸部に櫛描きT字文が施された壺の口縁から胴部である。5は大型の甌である。6は頸部に櫛描き波状文の施された甌、7は甌の底部である。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。



2 その他の遺物 (第16図)

遺構や遺構外の弥生時代の出土遺物をここで扱う。1はH2号住居址から出土した高坏の脚部で、外面赤色塗彩が施されている。2はH3号住居址から出土した高坏で内外面赤色塗彩が施されている。3は摩滅が多い高坏の坏部から脚部であるが、坏部内面からの穿孔がある。D3からの出土である。4は壺の底部で、外面に赤色塗彩が施されている。P7からの出土である。



第16図 その他の遺物実測図

第2節 古墳時代後期の遺構・遺物

1 竪穴住居址

1) H1号住居址

遺構 (第17図)

検出位置 Eあ9、Eい9グリッド。重複関係

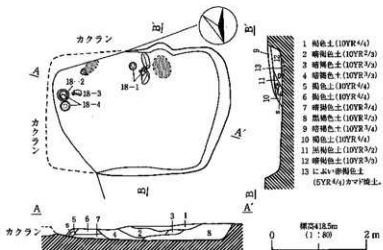
東壁、南・北壁の一部を攪乱される。平面形

態 短軸2.4mの隅丸長方形を呈するものと思

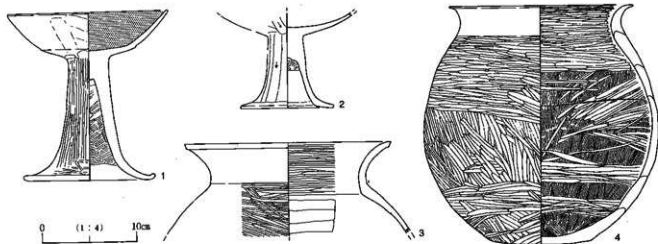
われる。主軸方位はN-18°-Eを指す。壁残

高は27~36cmを測る。覆土 褐色土、暗褐色

土に被覆されていた。床面の状態 平坦では



第17図 H1号住居址実測図



第18図 H1号住居址出土土器実測図

あるが、堅固な床面ではなかった。カマド 2基検出され、南壁やや西よりに位置するものが移築後のカマド、東壁やや南よりのカマドが移築前のカマドと思われた。南壁のカマドは、袖部構築に石を利用したものである。焼土の堆積状況から比較的使用度が少なかった状況が看取された。東カマドは、火床面のみが検出される遺存状態の悪いものであった。ピット 検出されなかった。遺物の出土状況 覆土中やカマド周辺から甕や坏が出土したが、量的には少なかった。カマドの東側、東壁付近の床面上から18-4の甕が出土した。

遺物 (第18図)

本住居址の出土遺物で図示できたものとして、土師器の高坏と甕がある。1は脚部に丁寧な縦位のヘラミガキが施され、2は擬位のヘラケズリが施されている高坏である。3は口縁から胴上半の球胴甕で、丁寧なヘラミガキが施されている。4は3同様丁寧なヘラミガキが施されている甕である。

時期 本住居址の所属時期は、古墳時代後期(7世紀後半)と思われる。

2) H2号住居址

遺構 (第19図)

検出位置 Eい7・8、

Eう7・8グリッド。

重複関係 なし。平

面形態 長軸4.3m、

短軸3.8mの隅丸方

形を呈する。主軸方

位はN-4°-Wを

指す。壁残高は27~

57cmを測る。覆土

褐色土、におい黄褐

色土、暗褐色土に被

覆されていた。床面

の状態 平坦ではあ

るが、堅固な床面で

はなかった。カマド

西壁中央付近と北

壁中央付近の2基

検出された。当初北

側にあったものが西

壁側に移築されたも

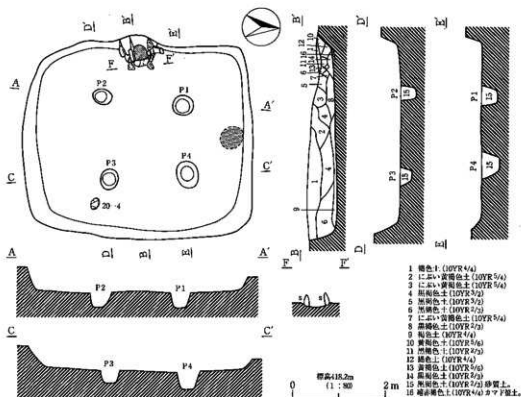
のと思われた。西カ

マドは袖部に石を構

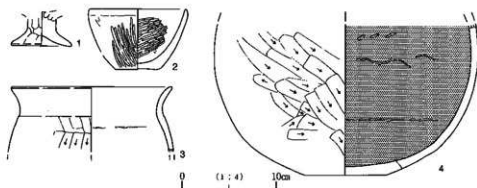
築材として利用し、

粘土で覆われた残り

の良いものであった。



第19図 H2号住居址実測図



第20図 H2号住居址出土土器実測図

北カマドは火床面のみで遺存状態は悪い状態であった。西壁カマドを軸とした主軸方位は、 $N-100^{\circ}-W$ を指す。ピット 4基検出され、P1~4が主柱穴と思われる。P1は円形で深さ30cmを測る。P2は楕円形で深さ32cmを測る。P3は楕円形で深さ26cmを測る。P4は楕円形で深さ37cmを測る。遺物の出土状況 覆土中から土師器の坏・甕などが出土しているが、量的には出土遺物は少なかった。

遺物 (第20図)

本住居址で図示できたのは土師器の鉢、甕、球胴甕がある。1は器台の脚部と思われ、脚部にヘラケズリが施されている。2は鉢で内外面に丁寧なヘラミガキが施されている。3は甕で、外面に縦位のヘラケズリが施されている。4は球胴甕で縦位のヘラケズリが施されている。

時期 本住居址の所属時期は、古墳時代後期後半(7世紀)と思われる。

3) H3号住居址

遺構 (第21図)

検出位置 Eう9・10、Eえ9・10

グリッド。重複関係 なし。平面

形態 長軸4.7m、短軸4.44mの方形

を呈する。主軸方位は $N-41^{\circ}$

- W を指す。壁残高は30~54cmを

測る。覆土 暗褐色土に被覆されて

いた。東南部分に暗褐色焼土層

の堆積が見られ、本址は焼失家屋

と思われた。床面の状態 平坦で

中央部が堅固な床面であった。カ

マド 西壁中央付近で検出され、

天井部は崩落していたが遺存状

況は良好であった。袖部の構築材

には石を配し、にぶい黄褐色粘土

で覆われていた。左右袖部の先端

には24-33、23-27の土師器の長

胴甕を補強材として使用し、その

中央に23-24の土師器甕が、立位

で出土した。24-34の土師質の円

筒形土製品が火床部の手前床面

上に横位で出土し、カマドの構築

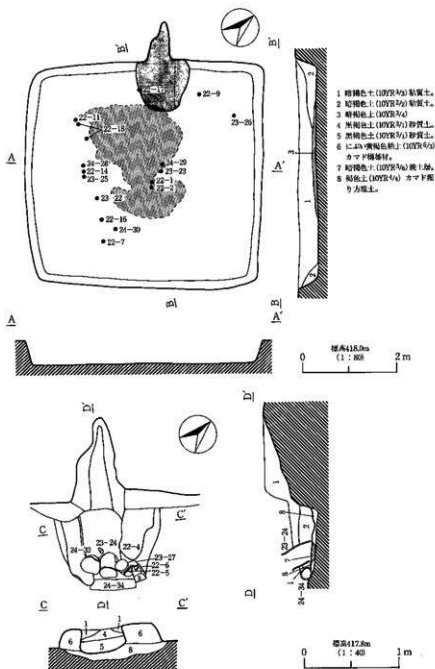
材として使用されていたものが、

カマド廃絶後に落下したのでは

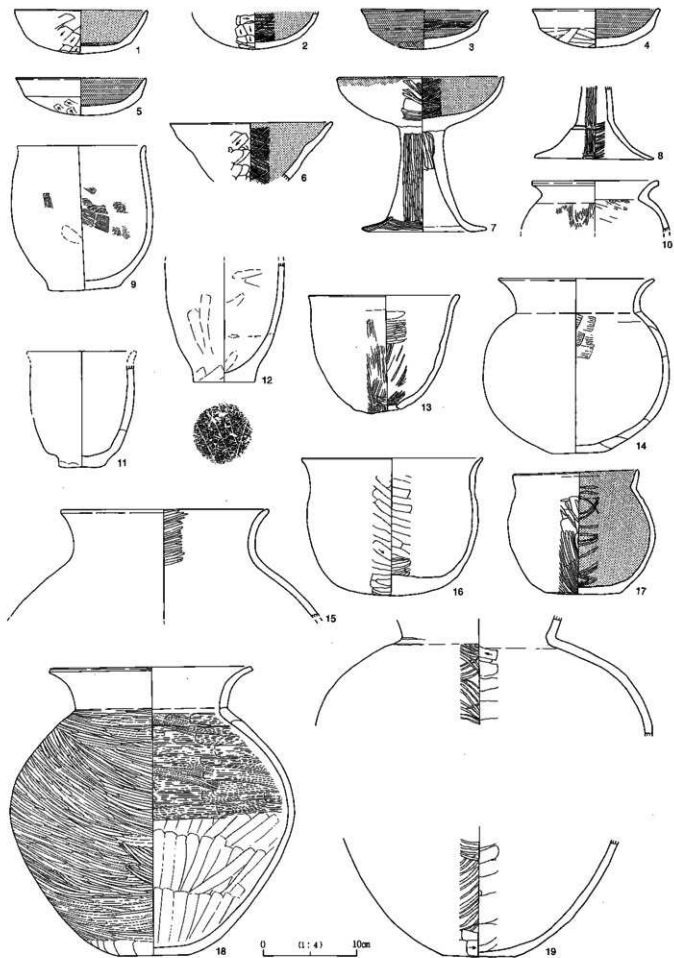
ないかと推察された。また、本カ

マドでは、支脚石が直立してい

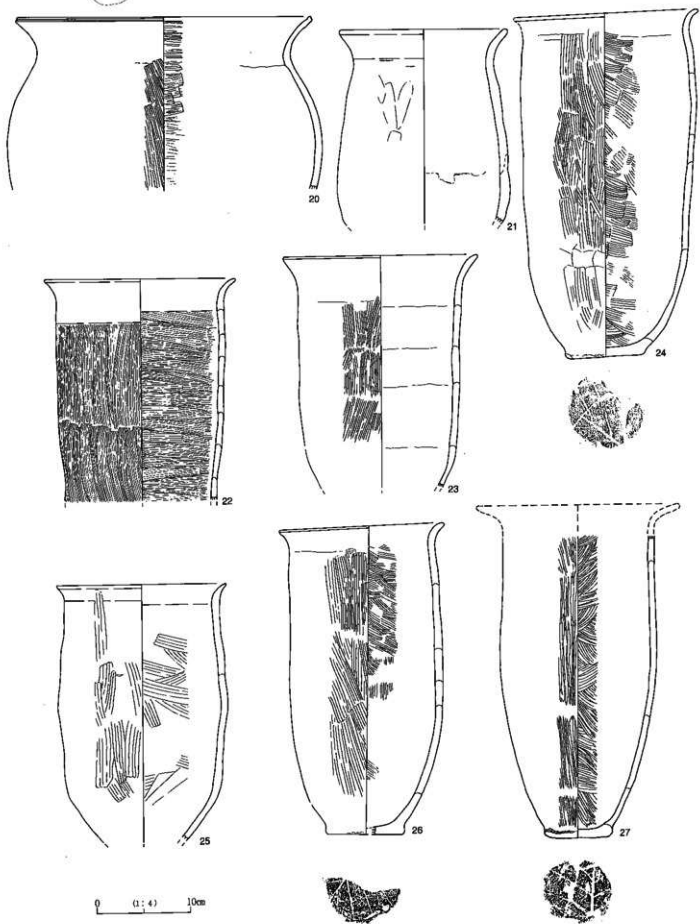
た。



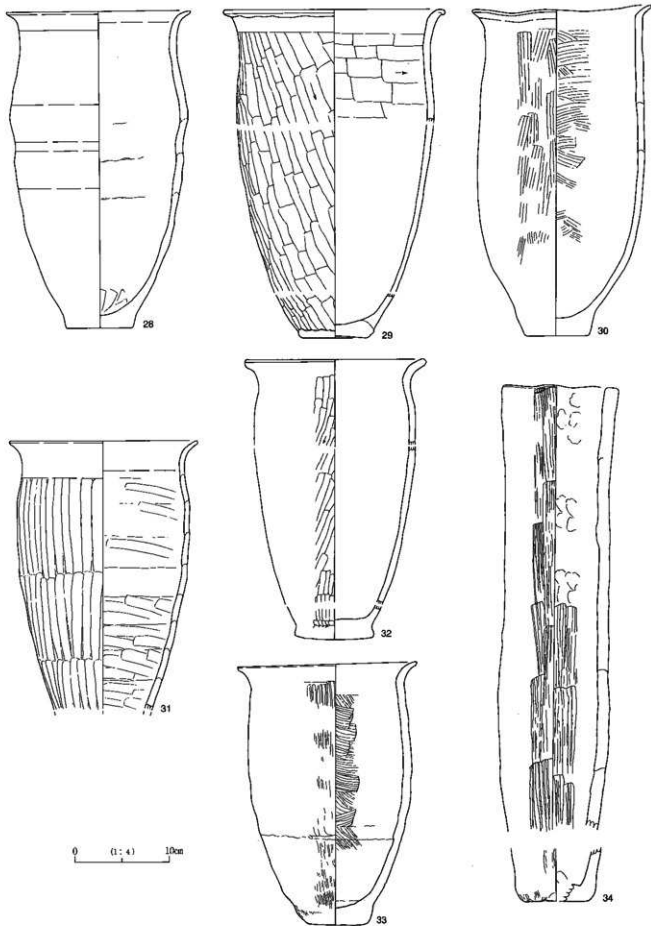
第21図 H3号住居址・カマド実測図



第22图 H3号住居址出土土器类测图



第23图 H3号住居址出土土器实测图



第24图 H3号住居址出土土器实测图

カマドを軸とした主軸方位は、N-47°-Wを指す。ピット 検出されなかった。遺物の出土状況 覆土中から多量の土師器の坏・甕などの出土、東南部付近の焼土層中や床面上、カマド内外から完形に近い土師器甕などがまとまって出土した。本址は、焼失住居址と見られ、使用状態で土器を含んでいると考えられた。本住居址の出土遺物は、本遺跡の中では出土量の多い状況であった。

遺物（第22・23・24図）

本住居址からは弥生土器、土師器、須恵器が出土した。弥生時代に所属すると思われる高坏については第16図に掲載した。本址の出土土器を見ると土師器の量が圧倒的に多く、なかでも甕が主体を占めている傾向が看取された。また、器種的にもバラエティが見られる。

1～6は半球形を呈する内面に黒色処理が施された土師器の坏である。1は内面の底部と胴部の境目に段が看取される。2は口縁部が欠損しているため正確な器形を知り得ないが、口縁部が内湾するものと思われる。4・5は須恵器の模倣坏で、胴部中位から外反する器形を呈している。外面にはヘラケズリが施されているが、内面は摩耗しているため、ヘラミガキが看取されない。6は底部が欠損しているため、正確な器形を知り得ないが、内面の胴部中位に弱い稜を有するものである。7・8は土師器の高坏で、坏部内面にはヘラミガキが施され、黒色処理が施されている。胴部外面には縦位のヘラミガキが施されている。8は他の土器と比べると白い胎土である。9・11・12は土師器の小型の甕である。13は小型の単孔の土師器の甕で、内外面にハケメ調整が施されている。径は2.5cmを測り、胎土に雲母粒子が含まれている。14は胴部が球状を呈する甕で、色調は浅黄色を呈している。16・17は土師器鉢である。16には外面ヘラケズリが施され、17には外面縦位にヘラミガキが施されている。15・18～20は土師器の大型で、胴部球形の器形を呈する甕である。18は外面に丁寧なヘラミガキが施され、内面上位に横位のハケメ調整、その下方には縦位のヘラナデが施されている。19は外面にヘラミガキ、内面にヘラケズリ調整が施されている。20は外面にハケメ調整が施され、頸部以下の内面には横位のハケメ調整が施される。21～33は土師器の長胴甕である。22～27、30・33は外面に縦位のハケメ調整が施されるものである。22・24・25・26・27・30は内面にもハケメ調整が施されている。29・31・32は外面にヘラケズリの施された土師器の甕である。また、24・26・27の底部には木葉痕が観察できる。28はナデ調整の施される土師器甕である。これらの長胴甕の胎土をみると、雲母粒子が多く含まれているのが特徴である。34はカマド火床面の手前から出土した土師質の円筒形土製品である。当遺跡内において多く出土し、本遺跡を特徴づける遺物といえる。形態的には円筒形を呈していることが本遺跡の特徴である。調整を見ると内外面に縦位のハケ調整が施されるもので、内面には指頭痕が観察される。本土製品は底部が確認できるものである。土師器と同様な焼き物であるが、土師器と比べると焼成は劣っている。

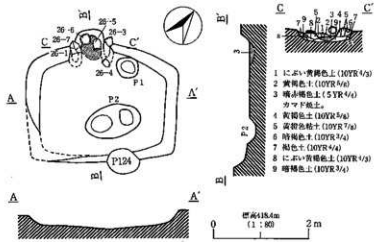
時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から古墳時代後期後半～古墳時代末（7世紀中葉～7世紀後半）と思われる。

4) H7号住居址

遺構 (第25図)

検出位置 Uこ2、Uこ3グリッド。重複関係

P124に切れ、住居址の床面の一部を破壊される。平面形態 長軸2.6m、短軸1.9mの不整形方形を呈する。主軸方位はN-53°-Eを指す。壁残高は18~28cmを測る。覆土 暗褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦であったが、あまり堅固な状態ではなかった。カマド 北壁中央付近で検出され、左右両袖部を粘土で構築するカマドで、比較的遺存状態は良好であった。カマドを軸とした主軸方位は、N-29°-Wを指す。ピット 2基検出され、P1は楕円形で深さ10cmを測る。P2は楕円形でテラスを有し、深さ15cmを測る。遺物の出土状況 遺物量は少なかったが、カマド内およびその周辺からの出土があった。

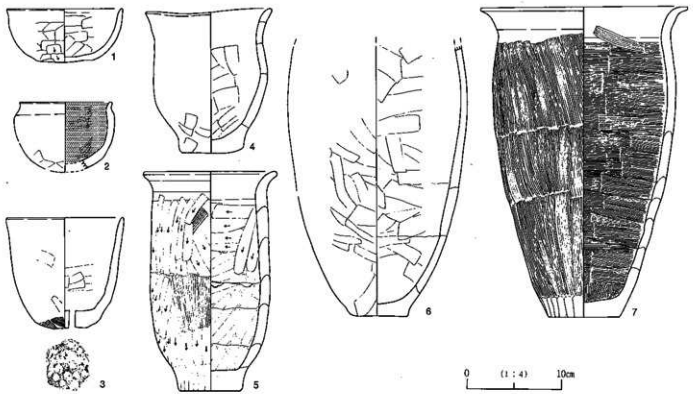


第25図 H7号住居址実測図

遺物 (第26図)

本住居址で図示できたものは土師器のみで、坏・壺・瓶などがある。1は完形の土師器坏で、外面ヘラケズリが施されている。2は外面ヘラナアの施された短頸壺である。3は中型の多孔の土師器瓶である。4は小型の壺である。5は外面ヘラケズリ、ハケメ調整が施される壺である。6・7は長胴壺である。6は内外面はヘラケズリ調整が施されている。7は内外面ハケメ調整が施されている。

時期 本住居址の所属時期は、古墳時代後後半~奈良時代初頭(7世紀末~8世紀初頭)と思われる。

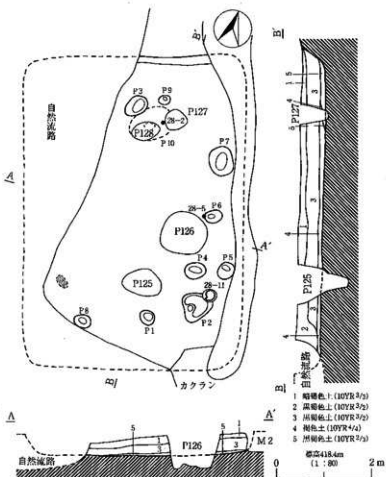


第26図 H7号住居址出土土器実測図

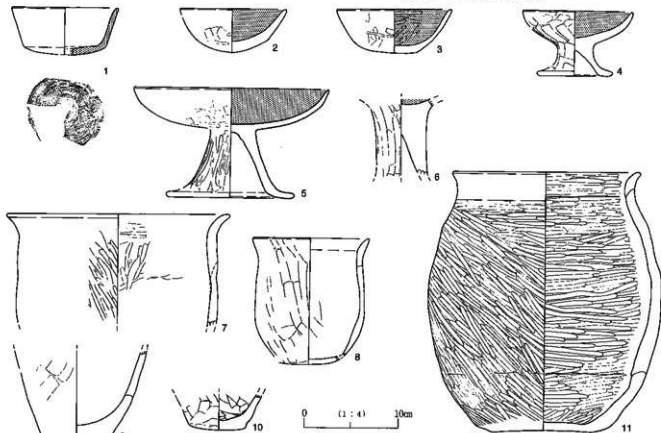
5) H9号住居址

遺構 (第27図)

検出位置 Aあ5、Av4・5グリッド。重複関係 M2、自然流路に切られ、北壁・南壁の一部、西壁が破壊されていた。平面形態 不明。壁残高は32cmを測る。覆土 暗褐色土、黒褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあったがあまり堅固な床面ではなかった。カマド 住居址の北壁中央部付近や西壁にカマドが存在した可能性があるが、重複関係により破壊されてしまったと思われる。ピット 10基検出されたが、支柱穴は捉えられなかった。形態についてはP2が不整形であるが、それ以外は楕円形を呈していた。深さはP1が12cm、P2が16cm、P3は26cm、P4は37cm、P5は25cm、P6は15cm、P7は27cm、P8は13cm、P9は14cmを測る。P10は床下から検出されたピットである。遺物の出土状況 覆土中から土師器や須恵器の坏・壺などが出土している。



第27図 H9号住居址実測図

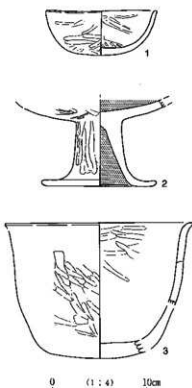


第28図 H9号住居址出土土器実測図

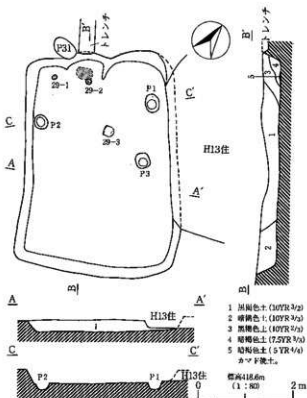
遺物 (第28図)

1は須恵器坏、2・3は土師器の坏で内面黒色処理が施されている。4～6は土師器の高坏である。7～11は土師器甕で、7は長胴甕の口縁から胴部である。8は小型の甕で、外面ヘラケズリが施されている。11は内外面ヘラミガキの施された甕である。

時期 本住居址の所属時期は、古墳時代後半～奈良時代初頭（7世紀後半～8世紀初頭）と思われる。



第29図 H10号住居址出土土器実測図



第30図 H10号住居址実測図

6) H10号住居址

遺構 (第30図)

検出位置 Uあ6、Uこ6・7グリッド。重複関係 H13号住居址に切られるため、東壁の一部を破壊されていた。H11号住居址を切る。平面形態 長軸4.15m、短軸2.85mの不整形を呈する。主軸方位はN-37°-Eを指す。壁残高は17～46cmを測る。覆土 黒褐色土、暗褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦であったが、あまり堅固な状態ではなかった。カマド 北壁中央付近で検出され、遺存状態は悪い。カマドを軸とした主軸方位は、N-31°-Wを指す。ピット 3基検出され、すべて楕円形を呈する。P1は深さ9cm、P2は深さ14cm、P3は深さ12cmを測る。遺物の出土状況 覆土中からの出土で、遺物量は多くはなかった。

遺物 (第29図)

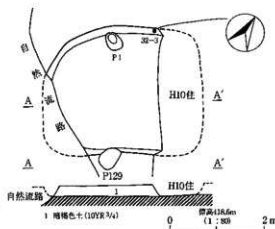
本住居址で図示できたものは3点で、1は土師器坏、2は内面黒色処理の施された土師器高坏、3は内外面にヘラミガキの施された大型の鉢である。

時期 本住居址の所属時期は、古墳時代後期後半～奈良時代初頭（7世紀末～8世紀初頭）と思われる。

7) H11号住居址

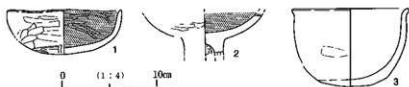
遺構 (第31図)

検出位置 Aあ6・7、Uこ6・7グリッド。重複関係 H10号住居址、自然流路に切られる。平面形態 隅丸方形を呈するものと思われる。壁残高は13～38cmを測る。覆土 暗褐色土に被覆されてい



第31図 H11号住居址実測図

た。床面の状態 平坦ではあったがあまり堅固な床面ではなかった。カマド不明。ピット 1基検出され、楕円形で深さ21cmを測る。遺物の出土状況 覆土中から土師器の坏・甕などが出土しているが、遺物量は極めて少なかった。

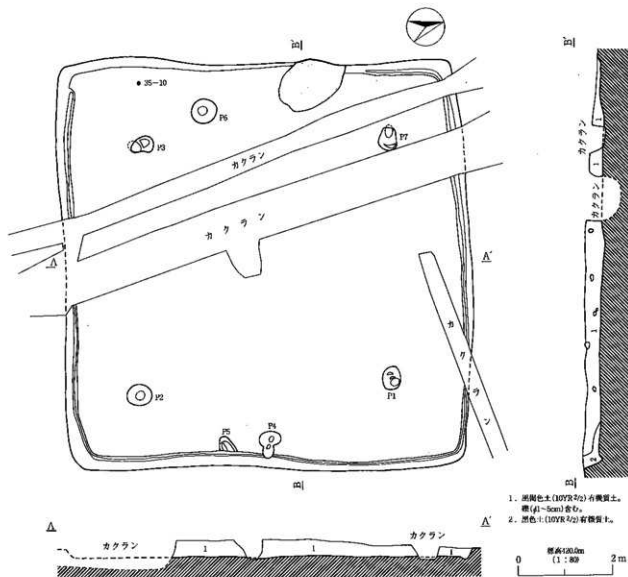


第32図 H11号住居址出土土器実測図

遺物 (第32図)

本住居址からは3点図示した。1は内面黒色処理が施される土師器坏、2は坏部内面黒色処理の施された土師器高坏、3は小型の甕である。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物が極めて少ないわけであるが、出土遺物や重複関係から古墳時代後期(7世紀後半)と位置づけたい。



第33図 H16号住居址実測図

8) H16号住居址

遺構 (第33・34図)

検出位置 Uあ6・7・

8・9、Uい6・7・8・9、

Uう6・7・8・9グリッド。

重複関係 なし。

旧校舎によって攪乱さ

れていたため、北・南

壁の一部及び床面の

部を破壊されていた。

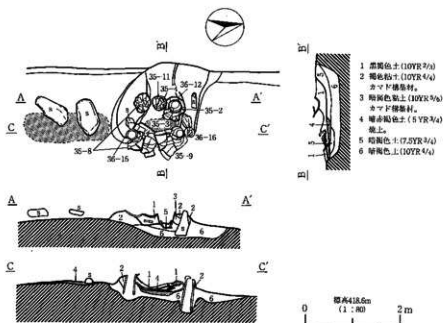
平面形態 長軸8.74m、

短軸8.6mの方形を呈

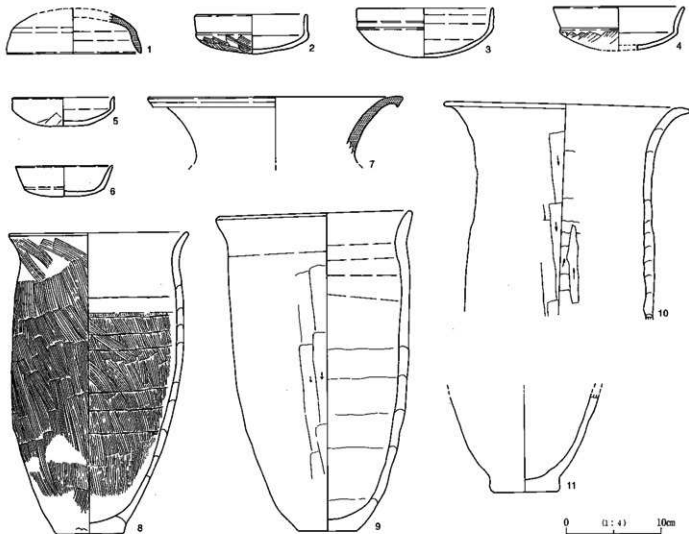
する大型の住居址であ

る。主軸方位はN-

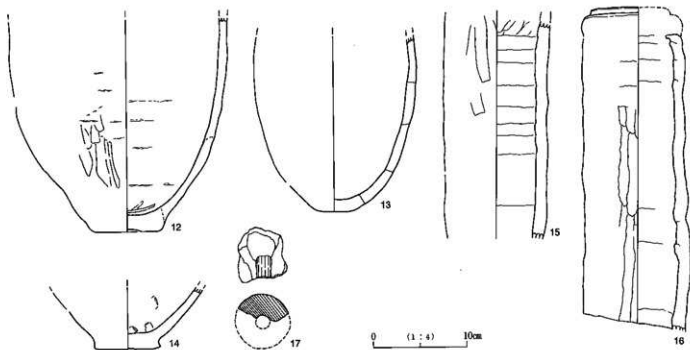
81°-Wを指す。壁残高



第34図 H16号住居址カマド実測図



第35図 H16号住居址出土土器実測図



第36図 H16号住居址出土遺物実測図

は10~28cmを測る。覆土 黒褐色土、黒色土に被覆されていた。床面の状態 平坦であったが、堅固な状態ではなかった。カマド南側の壁面下以外に周溝が検出された。溝幅7~18cm、深さ2~5cmを測り、断面U字状を呈していた。カマド 西壁中央付近で検出され、左右両袖部には礫を使用し、粘土で覆う手法であった。また、両袖の先端には円筒形土製品(36-15・16)が立位に芯材として使用されていた。右袖では36-16が逆位に埋設されていた。また、カマド内からは、土師器の甕や坏などが多く出土した。本カマドの遺存状態は非常に良好であった。カマドを軸とした主軸方位は、N-76°-Wを指す。ピット 7基検出され、P1~P3、P7が支柱穴と思われる。P1は楕円形でテラスを有し、深さ45cmを測る。P2は楕円形でテラスを有し、深さ43cmを測る。P3は楕円形でテラスを有し、下場がオーバーハングする。深さ47cmを測る。P4は不整形で2基のピットが連結されたような形態で、深さ17cmを測る。P5は不整形で深さ5cmを測る。P4・5が東壁下床面で並んで検出されているため、入口等の施設を想定できるかも知れない。P6は円形で深さ47cmを測る。P7は楕円形でテラスを有し、下場がオーバーハングする。深さ26cmを測る。遺物の出土状況 比較的出土遺物の少ない住居址ではあったが、カマド内部や周辺からの出土量が多かった。36-17の破口や鉄滓の細片がカマドの北東から出土した。

遺物(第35・36図)

本住居址出土遺物で図示できたものは、土師器の坏・甕、円筒形土製品、須恵器の蓋などである。1は須恵器の蓋である。2~5は灰白色を呈する土師器の坏である。3は有段口縁の須恵器坏蓋の模倣坏である。6は土師器坏である。7は須恵器の甕の口縁部である。8~14は土師器の甕で、8は内外面縦位にハケ目調整の施された長胴甕、9・10は外面縦位にヘラケズリの施された長胴甕である。15・16は土師質の焼成の悪い円筒形土製品で、カマド構築材として使用されたものである。外面に縦位のヘラケズリと内面に巻き上げ痕が残っている。16については底部とも思われる。17は土師質の甕の破口である。

時期 本住居址の所属時期は、古墳時代後期前半~後期後半(6世紀末~7世紀前半)と思われる。

9) H17号住居址

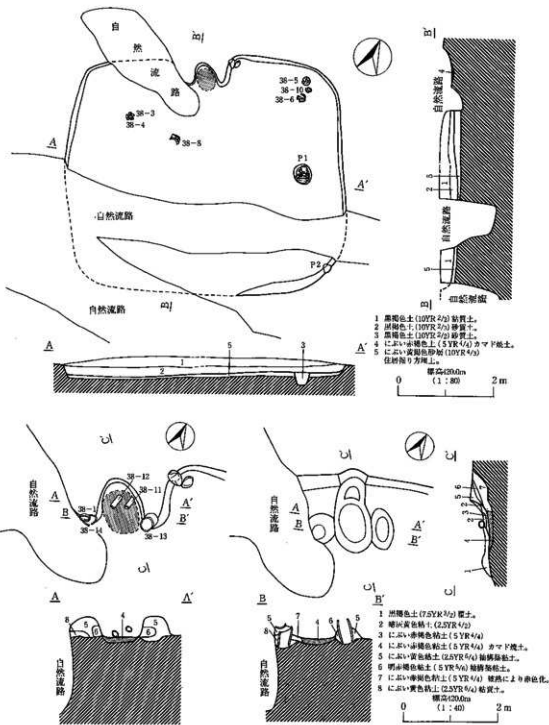
遺構 (第37図)

検出位置 Mこ10、
Nこ1、Rあ10、Rい
10、Sあ1グリッド。
重複関係 自然流路
によって切られる。
平面形態 長軸5.6
m、短軸4.6mの隅丸
方形を呈するものと
思われる。主軸方位
はN-63°-Eを指
す。壁残高は10~35
cmを測る。覆土 黒
褐色土、にぶい黄褐
色土に被覆されてい
た。床面の状態 平
坦で軟弱な床面であ
った。カマド 北
壁中央付近で検出さ
れ、円筒形土製品を
左右両袖先端部に芯
材として使用し、粘
土で覆うといった構
築方法であった。火
床面上から、カマド
の支脚として使用さ
れたと考えられる38
-11・12が横位で出
土した。出土状況か
ら考慮して2進式
のカマドを想定で
きるかもしれない。

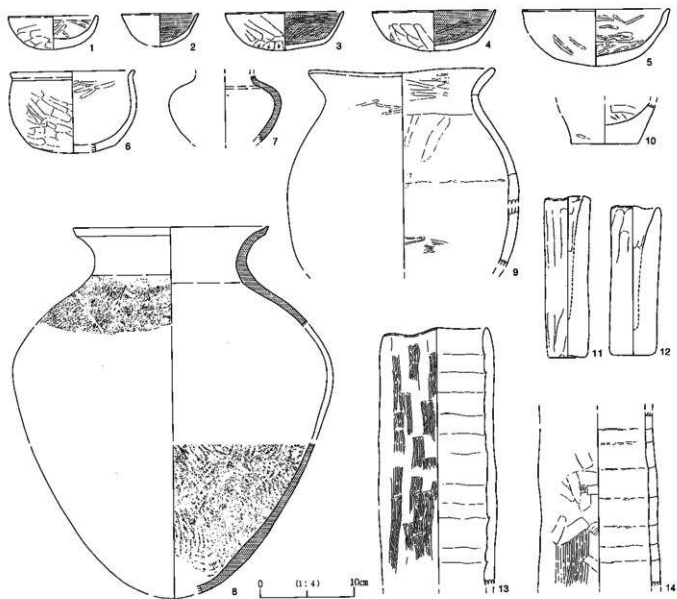
カマドの遺存状態は良好であった。カマドを軸とした主軸方位は、N-63°-Eを指す。ピット 2基検出され、P1は礫を伴うもので、楕円形で深さ19cmを測る。P2は住居址の南東隅に見られたピットである。遺物の出土状況 土師器甕・坏や須恵器坏・甕などがあり、覆土中やカマド周辺からの出土が多かった。

遺物 (第38図)

本住居址出土遺物で図示できたものは、土師器の坏・甕、円筒形土製品、須恵器の甕などである。1~5は土



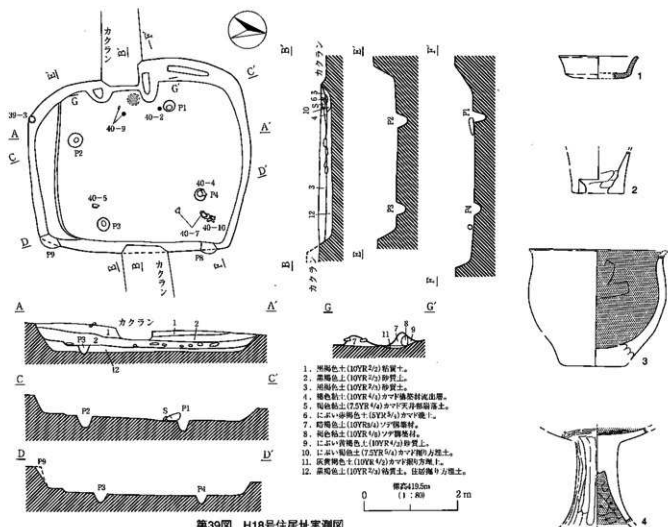
第37図 H17号住居址カマド実測図



第38図 H17号住居址出土土器実測図

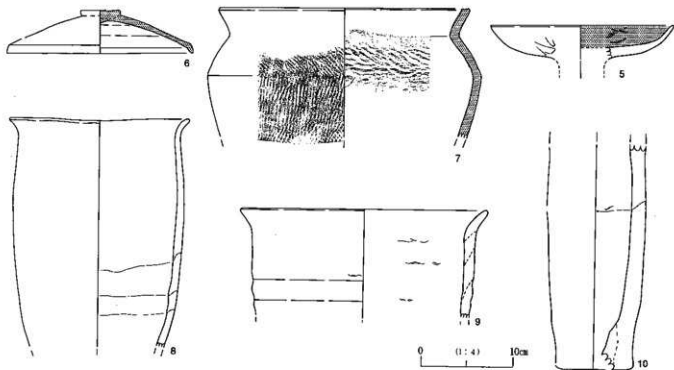
師器坏で、内面ヘラミガキ、外面ヘラケズリが施されている。2～4の内面には黒色処理が施されている。6は外面ヘラケズリの施された鉢、7は須恵器の小型壺の胴部から底部と思われる。8は須恵器甕で外面にはタタキ目調整が施され、内面には当て具痕が観察される。本遺物は、混入遺物と考えられる。9は土師器の球胴甕である。11・12はカマド焼土上から出土した土師質の土製支脚である。胎土には石英粒子が多く混入している。13・14はカマド袖部構築材として使用された土師質の円筒形土製品である。外面にハケメ調整が施されて、内面に輪積み痕が観察される。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から古墳時代後期後半～後期末（7世紀前半～7世紀後半）と思われる。



1. 黒褐色土 (LOYR 2a) 粘質土。
2. 黒褐色土 (LOYR 2a) 砂質土。
3. 黒褐色土 (LOYR 2a) 粘質土。
4. 褐色粘土 (LOYR 4a) カマド遺跡跡地底層。
5. 褐色粘土 (LOYR 4a) カマド遺跡跡地底層。
6. 灰白黄褐色土 (LOYR 5a) カマド遺跡上。
7. 暗褐色土 (LOYR 5a) ソウ製煉材。
8. 褐色粘土 (LOYR 4b) ソウ製煉材。
9. 灰白黄褐色土 (LOYR 5a) 砂質土。
10. 灰白黄褐色土 (LOYR 5a) カマド跡跡地底層上。
11. 灰黄褐色土 (LOYR 4a) カマド跡跡地底層上。
12. 黒褐色土 (LOYR 2a) 粘質土。住居跡跡地底層上。

第39図 H18号住居址実測図



第40図 H18号住居址出土土器実測図

10) H18号住居址

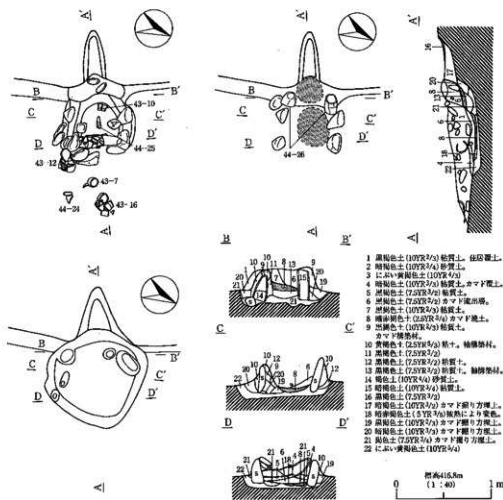
遺構 (第39図)

検出位置 Rお9・10、Rか9・10グリッド。重複関係 P8・9に切られる。D2号土坑址を切る。平面形態 長軸4.3m、短軸3.2mの隅丸方形を呈する。主軸方位はN-12°-Wを指す。壁残高は16~53cmを測る。覆土 黒褐色土に被覆されていた。西壁にはテラス状の平坦面が見られた。床面の状態 平坦ではあるが軟弱な床面であった。カマド 西壁中央付近で検出されたが、煙道部が攪乱されているため良好な遺存状態とは言い得ない。左右両袖は粘土で構築され、火床部が残っていた。カマドを軸とした主軸方位は、N-106°-Wを指す。ピット 4基検出された。住居址の主軸方位とズレが生じるわけではあるが、P1~P4が主柱穴と思われる。P1は楕円形で深さ29cmを測る。P2は円形で深さ16cmを測る。P3は楕円形で深さ15cmを測る。P4は楕円形で深さ14cmを測る。遺物の出土状況 覆土中や床面上から出土遺物があったが、あまり多い状態ではなかった。土師器甕・坏や須恵器坏・蓋などの出土があった。

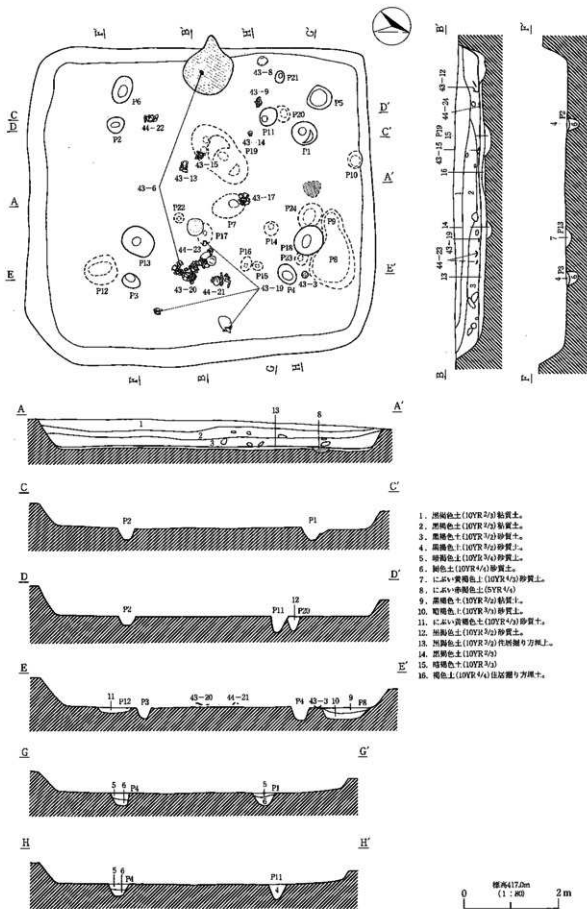
遺物 (第40図)

本住居址出土遺物で図示できたものは20点である。1は須恵器の小型の坏である。2は土師質の土製品で、底部に穿孔がある。円筒形土製品より細く精巧なつくりである。3は口縁の端部が欠損している土師器の甕である。4・5は土師器の高坏である。外面ヘラケズリが施され、坏部内面には黒色処理が施される。6は須恵器の甕で、現状のつまみがつき、外面天井部には回転ヘラケズリが施されている。焼成はあまり良いとはいえない。7は外面平行タキ目の残る須恵器甕である。8・9は土師器長胴甕で、ナデ調整が施されている。10は土師質の円筒形土製品と思われるが、当遺跡で多く出土しているものと比較すると形態は細く、造り自体も良いものといえる。

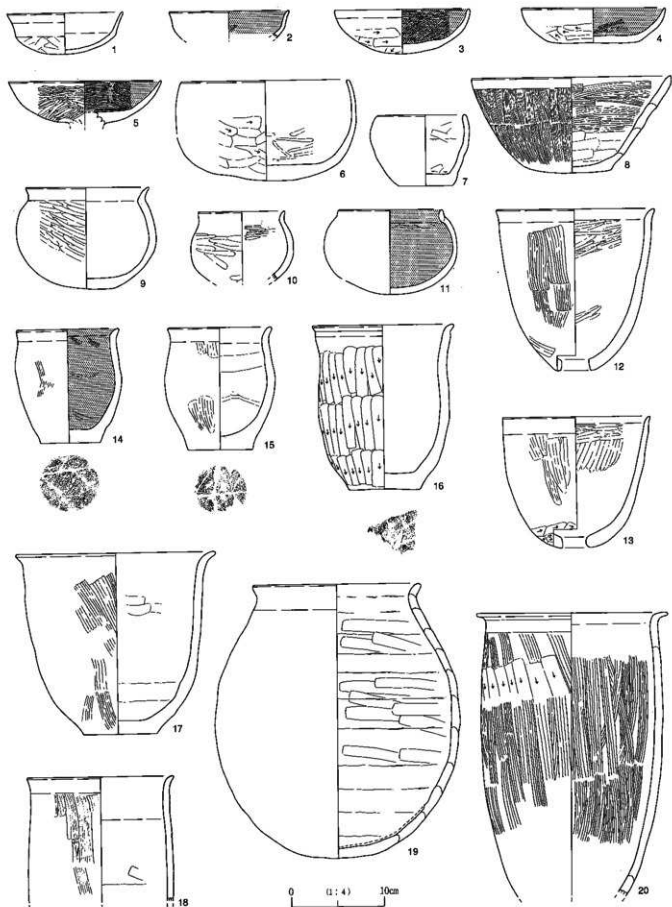
時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から古墳時代後期後半~奈良時代の前半(7世紀前半~8世紀前半)と思われる。



第41図 H23号住居址カマド実測図



第42圖 H23号住居址実測図



第43图 H23号住居址出土土器实测图

11) H23号住居址

遺構 (第41・42図)

検出位置 Eお3・4・5、Eか3・4・5、Eき3・4・5グリッド。重複関係 D10号土坑址を切る。平面形態 長軸6.6m、短軸5.93mの隅丸方形を呈する。主軸方位はN-24°-Wを指す。壁残高は17~61cmを測る。覆土 黒褐色土に被覆されていた。床面付近には焼土層が検出され、覆土にも焼土が混入しており、焼失を受けた住居址とも考えられる。床面の状態 平坦ではあるが軟弱な床面であった。カマド 西壁中央付近で検出され、礫と円筒形土製品を左右両袖に芯材として使用し、粘土で覆うといった構築方法であった。焚き口付近では、カマド天井部に使用されていたと思われる円筒形土製品が、崩落したと考えられる状態で出土した。カマドは先述のとおり遺存状態は良好であったといえる。カマドを軸とした主軸方位は、N-114°-Wを指す。ピット 22基検出され、P2~P4、P11が主柱穴と思われ、P6・13・18・21についても主柱穴のようにも見えるため、改築等が行われた結果とも考えられようか。P1は円形でテラスを有し、深さ12cmを測る。P2は楕円形で深さ20cmを測る。P3は楕円形で深さ23cmを測り、下場がオーバーハングする。P4は楕円形で深さ29cmを測る。P5は住居址の北西隅に見られ、楕円形を呈し深さ17cmを測る。P6は楕円形を呈し深さ30cmを測る。P7は楕円形を呈し、深さ15cmを測る。P8は楕円形を呈し、深さ8cmを測る。P9は楕円形を呈し、深さ9cmを測る。P10は北壁下にて検出され、楕円形を呈し深さ7cmを測る。P11は楕円形を呈し深さ20cmを測る。P12は楕円形を呈し深さ11cmを測る。P13は楕円形を呈し深さ20cmを測る。P14は楕円形を呈し深さ6cmを測る。P15は楕円形を呈し、深さ8cmを測る。P16は楕円形を呈し、深さ12cmを測る。P17は楕円形を呈し深さ26cmを測る。P18は楕円形を呈し深さ25cmを測る。P19は楕円形でテラスを有し、深さ34cmを測る。P20は楕円形を呈し深さ24cmを測る。P21は楕円形を呈し、深さ14cmを測る。P22は楕円形を呈し、深さ11cmを測る。P23は楕円形を呈し、深さ8cmを測る。

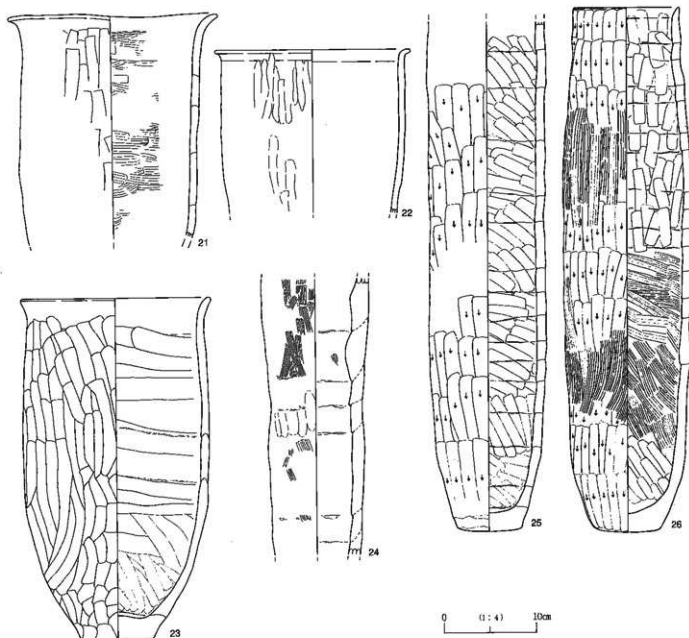
遺物の出土状況 本住居址からは覆土中や床面上から多量に土器が出土した。混入遺物と見られる赤色塗彩された弥生時代の高坏脚部、土師器甕・坏や須恵器坏・蓋などの出土も見られた。カマド周辺からも多くの出土遺物が確認された。

遺物 (第43・44図)

本住居址出土遺物で図示できたものは、土師器の坏・甕、円筒形土製品などで、種別的に見てもバラエティが見られる。

1~4は土師器坏で1は須恵器蓋の模倣坏と思われる。2~4は内面黒色処理の施された坏である。5は土師器高坏の坏部である。内外面には丁寧なヘラミガキが施され、内面には黒色処理が施されている。6~8は土師器の鉢である。6は大型で口縁部が内弯し、7は焼成が悪く、8は内外面ハケメ調整の施された鉢である。9~11は土師器の短頸壺である。11のみ内面に黒色処理が施される。12・13は土師器の飯で、外面ハケメ調整が施され、内面にはヘラミガキが施される。共に単孔である。14~17は小型の土師器甕である。14~16の底部には木葉痕が残っている。18~23は土師器の甕である。18は縦位にハケメ調整の施された甕、19は胴部球状の甕である。20~23は土師器の長胴甕である。ハケメ調整のされる20とナデあるいはヘラケズリ調整の施される21~23がある。24~26はカマドから出土した土師質の円筒形土製品である。25は口縁部が欠損しているが26には口縁部が残存している。底部には木葉痕が観察されない。外面ハケメ調整の施される24と外面ヘラケズリの施される25、ヘラケズリとハケメ調整の施される26がある。すべての円筒形土製品に共通していることは内面に輪積み痕が看取されることである。26はカマドの左右両袖の構築材として使用されていたものが接合したものである。このことから完形の円筒形土製品を半割にしてカマドの構築材として使用したことがわかる。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から古墳時代後期後半~後期末(7世紀前半~7世紀後半)と思われる。

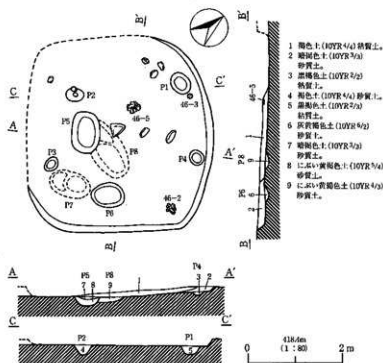


第44図 H23号住居址出土土器実測図

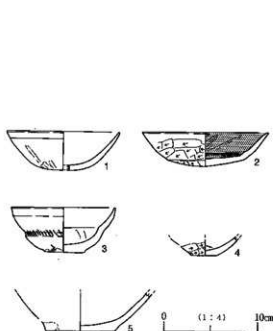
12) H30号住居址

遺構 (第45図)

検出位置 Xえ10、Xお9・10、Yお1グリッド。重複関係 なし。平面形態 長軸3.98m、短軸3.77mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-50°-Wを指す。西壁と南壁の一部は壁面が確認できなかった。壁残高は0~15cmを測る。覆土 褐色土、暗褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあるが軟弱な床面であった。カマド 検出されなかった。ピット 8基検出された。P1は楕円形で深さ16cmを測る。P2は楕円形で深さ20cmを測る。P3は楕円形で深さ15cmを測る。P4は楕円形で深さ8cmを測る。P5は楕円形を呈し深さ20cmを測る。P6は楕円形を呈し深さ11cmを測る。P7は楕円形でテラスを有し、深さ17cmを測る。P8は楕円形でテラスを有し、深さ14cmを測る。P7・8は住居址掘り方より検出されたピットである。**遺物の出土状況** 本住居址からの出土遺物は少なく、遺物も非常に散漫な状態であった。本住居址はカマドが検出されず、明確な床面が確認されなかったこと、主柱穴がはっきりしない点などを考慮すると、住居として造られている途中で何かの原因により、建設



第45図 H30号住居址実測図



第46図 H30号住居址出土土器実測図

が中止されてしまったか、あるいはもともと住居址という使われかたではなく、他の施設として利用された可能性も高いが、今回は住居址として扱った。

遺物 (第46図)

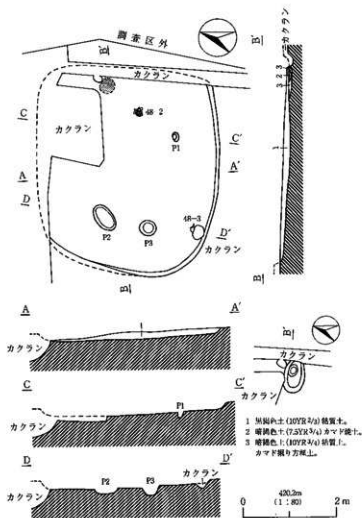
本住居址出土遺物で図示できたものは、土師器の坏・甕のみであった。1は土師器の坏である。2は内面に黒色処理の施された土師器坏、3は外面中位にヘラ状工具による刻みが見られる小型の鉢であり、器形的な面から見た場合、古墳時代前期の小型鉢に類似している。しかし、非常に胎土が粗く、焼成も悪いことから粗製の土器と見られ、該期の坏の形態変化の一つではないかと思われるものである。4は土師器の小型の甕の底部と思われる。5は大型の甕の底部である。

時期 本住居址は先述したとおり住居址というには疑問があるが、住居址として扱った。所属時期は、明確に伴う出土遺物が少ないわけであるが、これらから考慮した結果、古墳時代後期～後期末(7世紀前半～7世紀後半)と考えたい。

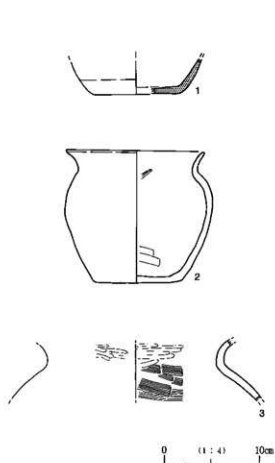
13) H34号住居址

遺構 (第47図)

検出位置 Mけ5・6、Mこ5・6グリッド。重複関係 なし。平面形態 北壁と東壁、西壁の一部が攪乱されているため不明であるが、隅丸方形を呈するものと思われる。壁残高は4～8cmを測る。覆土 本址は調査区内最東部に所在し、発掘調査前はプールがあった場所にあたり、プール建設時に削平されてしまっていた。遺構検出を行った際には、すでに覆土が浅い状態となっていた。住居址の覆土は暗褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあるが軟弱な床面であった。カマド 遺存状態は極めて悪く住居址の東側付近から焼土が検出され、この焼土の検出をもって、東壁の中央やや北側よりに存在したカマドが、攪乱されてしまったのではないかと推察された。ピット 住居址の西側に並んだ状態で3基検出された。P1は楕円形で深さ14cmを測る。P2は楕円形で深



第47図 H34号住居址実測図



第48図 H34号住居址出土土器実測図

さ5cmを測る。P3は円形で深さ17cmを測る。遺物の出土状況 先述のとおり本住居址は削平を多く受けていた場所にあたるため、覆土の層厚は極めて薄く、出土遺物は非常に散漫な状態であった。

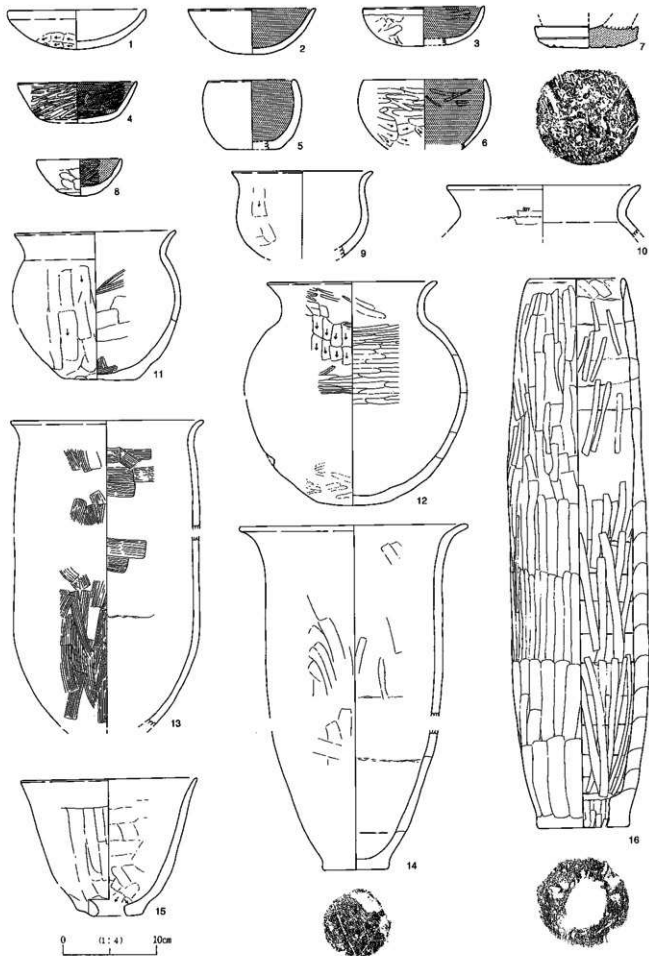
遺物（第48図）

本住居址出土遺物で図示できたものは、3点のみであった。1は底部切り離し後ナア調整の施された須恵器の坏、2はナア調整の施された焼成の悪い土師器甕、3は胴部が球形を呈するものと思われ、口縁部の外反度が強いと考えられる土師器の甕である。内面にはハケメ調整が観察される。

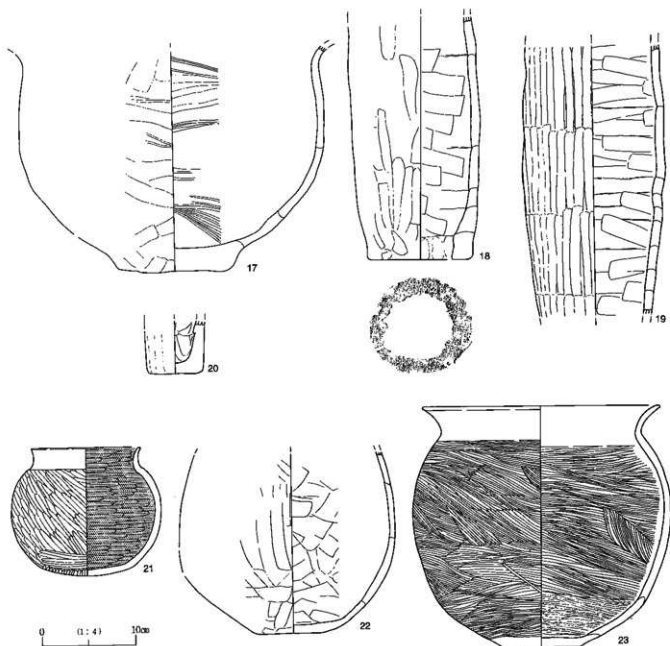
時期 本住居址の所属時期は、出土遺物が少ないわけではあるが、古墳時代後期～奈良時代初頭（7世紀前半～8世紀前半）と思われるようか。

14) 他の住居址出土遺物（第49・50図）

ここでは本書に掲載できなかった住居址出土の遺物を取り上げた。1～4は土師器坏である。1・2は体部が半球状を呈している坏で、1は特に浅い形状を呈する。2～4は内面黒色処理の施されたもので、2については摩耗がひどく調整が観察できない状態である。外面の調整は3がヘラケズリ調整、4はヘラミガキ調整が施され、内面にはヘラミガキ調整が施されている。5は内面黒色処理の施された土師器の鉢形の土器である。6は内面に黒色処理、外面にはヘラケズリの施された鉢である。7は須恵器の播り鉢の底部である。底部外面に棒状工具に



第49图 H4号住居址出土土器实测图



第50図 H4・6号住居址出土土器実測図

よる刺突が多く見られる。8は土師器環の小型品で、内面黒色処理が施されている。9は口縁端部が外反する鉢で、外面にはヘラケズリが施されている。10～12は土師器の甕である。10は口縁から頸部が残存する球胴甕と思われるものである。11は外面縦位にヘラケズリ、内面にはヘラケズリやハケメ調整の施される小型の甕、12は胴部が球状を呈している甕で、内面には横位のヘラミガキが施され、外面には縦位のヘラケズリが施されている。13・14は土師器長胴甕である。13は内外面にハケメ調整が施され、胴部下方に最大径がある器形を呈している。14には縦方向のヘラ状工具によるナデ調整が施され、底部外面に木葉痕が観察される。15は単孔の土師器の甌である。17は土師器の球胴甕で、色調はぶい黄褐色を呈している。外面には横位のヘラ状工具によるナデ調整が施されている。16・18・19はカマドから出土した土師質の円筒形土製品である。胎土に雲母や長石の粒子を含んでいる。外面には縦位のヘラケズリが施され、内面に輪積み痕が残っている。16・18は底部外面に木葉痕が観察されるが、焼成前に底部中央部を穿孔されているため底部が欠損された状態である。20は円筒形を呈する土師質の土製品であるが、16・18・19の円筒形土製品と比較して、大きさ、胎土、焼成等が異なっている。これらを考慮した結果、

カマドに使用された円筒形土製品と別に扱った方がよいと思われる。以上はH4号住居址からの出土遺物である。21は土師器の小型の壺で、内外面に丁寧なヘラミガキが施されている。外面は左から右へ、内面は横位のヘラミガキが観察できる。22は土師器の甕である。内外面にヘラ状工具によるナデ調整が施されている。焼成はあまり良い状態ではない。23は土師器の甕で、胴部が球状を呈している。内外面に丁寧なヘラミガキが左から右下がり

2 土坑址

1) D1号土坑址

遺構 (第51図)

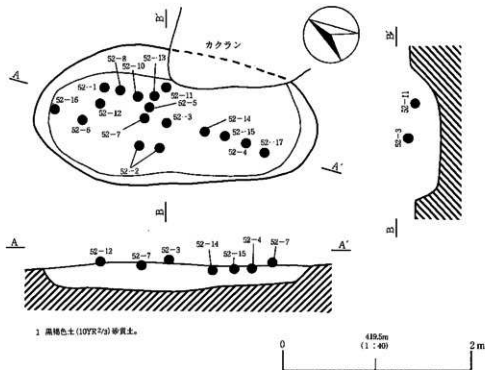
検出位置 Uお8、Uか8
グリッド。重複関係 なし。
平面形態 長軸3m、短軸
1.4mの長楕円形を呈する。
主軸方位はN-31°-Wを
指す。東壁の一部が攪乱さ
れ、壁残高は15~29cmを測
る。覆土 黒褐色土に被覆
されていた。底面の状態は、
概ね平坦であり、断面形態
は皿状を呈す。遺物の出土
状況 検出レベルにおい
て非常に多くの土器が重
なっており、通常の土坑址
からの出土状態とは異な

り、土坑埋没時に集中的に廃棄されたものと思われた。土器の出土状況は土坑址の上面に多く集積し、覆土中からの出土は少ないといった状態であった。

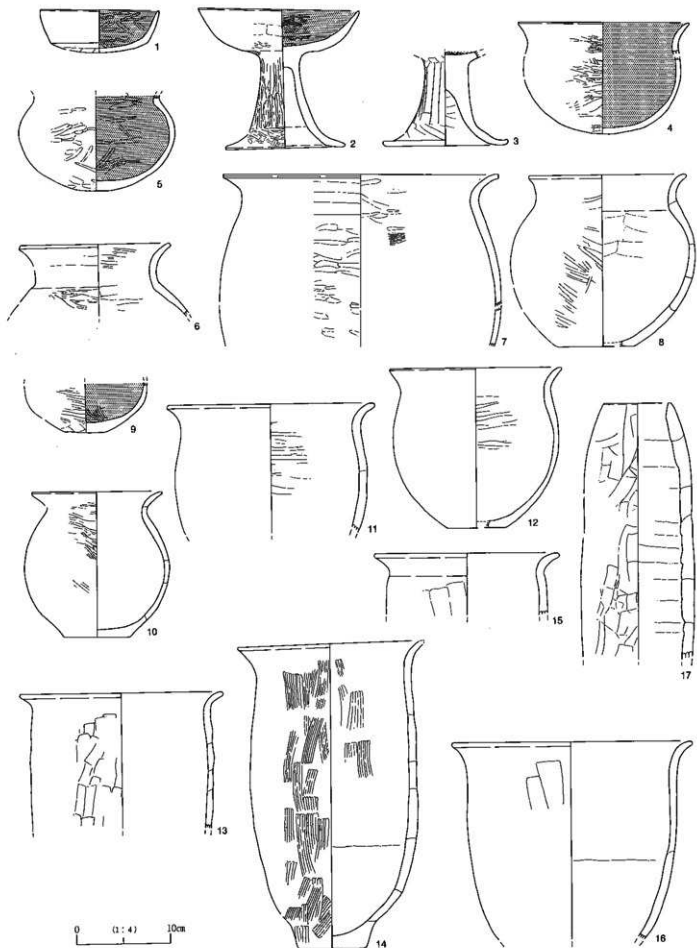
遺物 (第52図)

本土坑址の出土遺物は多く、図示できたものには土師器の坏、高坏、甕、円筒形土製品がある。1は外面底部に縦方向のヘラケズリ、内面にヘラミガキと黒色処理が施される土師器坏である。2・3は内面黒色処理の施される該期の典型的な土師器高坏である。2は脚部外面に丁寧な縦位のヘラミガキ調整が施され、3は縦位のヘラケズリが施される。4・5は小型の鉢と思われるものである。外面に横方向のヘラミガキが施され、内面には黒色処理が施されている。9も同様な器形を呈するものと思われる。6~8・10~12は土師器の甕である。7は大型の球脚甕で、横方向のヘラミガキが施されている。13~15は土師器の長胴甕である。13は外面ヘラケズリ調整、14は外面ハケメ調整が施され、15は外面ヘラケズリ調整が施されている。16は外面ヘラナデが施され、胴部がやや膨らんだ器形を呈している土師器甕である。17は土師質の円筒形土製品で、外面にヘラケズリ調整が施され、内面に輪積み痕が残るものである。焼成は悪い状態である。

時期 本土坑址の所属時期は、出土遺物から古墳時代後期~古墳時代末(7世紀前半~8世紀初頭)と思われる。



第51図 D1号土坑址実測図



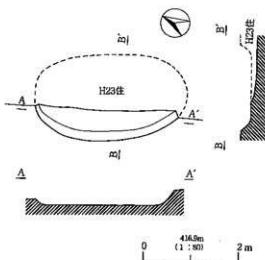
第52图 D1号土坑址出土土器实测图

2) D9号土坑址

遺構 (第53図)

検出位置 Eか4、Eき4グリッド。重複関係 H23号住居址に切られる。平面形態 重複関係により大部分を破壊されているため、長軸、短軸及び主軸方位を知り得ないが、長楕円形を呈するものと思われる。検出された中での深さは10~30cmを測る。覆土 黒褐色土に被覆されていた。底面の状態は、概ね平坦と思われる。断面形態は皿状を呈するものと思われる。遺物の出土状況 出土遺物は少なく、図示できるものはなかった。

時期 本土坑址の所属時期を断定できる出土遺物がないが、H23号住居址に切られることから古墳時代後期以前と考えられる。



第53図 D9号土坑址実測図

3 溝状遺構

1) M1号溝状遺構

遺構 (第117図)

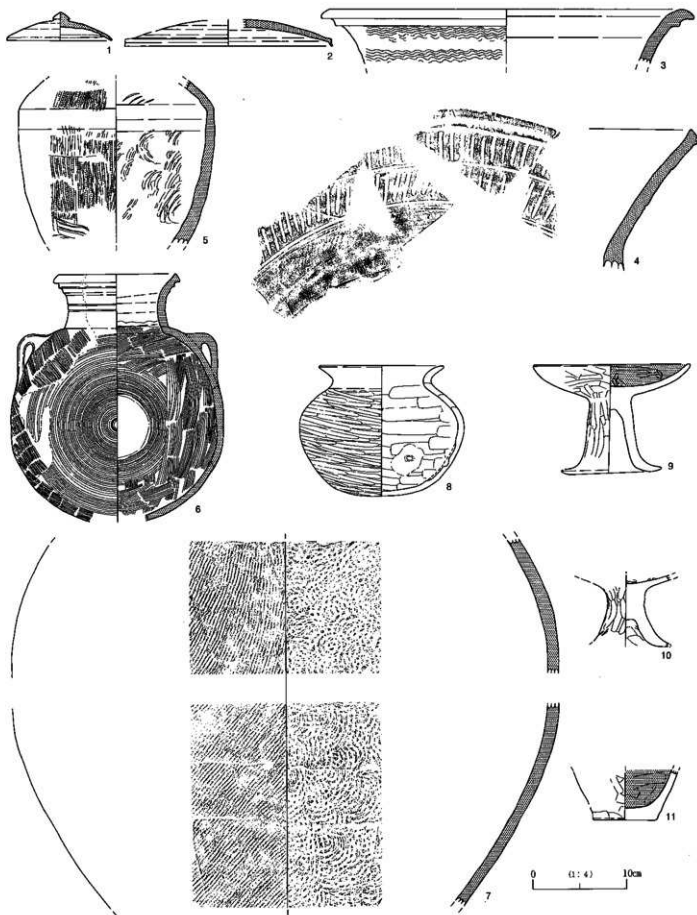
検出位置 Yか2・6・7・8・9・10、Yき7・8、Uか1・2グリッド。重複関係 試掘調査区 (I区) のH2号住居址に切られる。宮上遺跡Ⅱの調査区 (B区)、宮上遺跡Ⅲの調査区 (D区) において検出された。形状 宮上遺跡Ⅱの調査区 (A区) 内では24.6m、宮上遺跡Ⅲの調査区 (D区) では2.7mで、試掘調査区 (I区) では13.6m検出された。未調査区を含めて54.2mの長さを推定できる。しかしながら、宮上遺跡Ⅱの調査区であるB区では擾乱や昭和35年建設された当時の坂城中学校の工事等による削平を受けたことから溝状遺構の続きは検出されなかった。また、同様に宮上遺跡Ⅲの調査区 (D区) で途切れてしまった。

検出状況は、宮上遺跡Ⅲの調査区 (D区) において幅1.2~3.5m、深さ7~24cmを測る。覆土は黒褐色の粘質土であった。断面形状はU字状を呈していた。検出状況では北側が浅く南側が深い状態で検出されたが、底面レベルを見ると南側が高く、北側が若干低いいため北から南に流れていたことが予想できるが砂層の堆積は確認されなかった。

遺物 (第54図)

本址出土遺物で図示できたものには須恵器蓋、壺などや土師器の高坏などがある。1は焼成の良い小型の須恵器の蓋で、宝珠形つまみを有し、内面にかえりがあるものである。2は須恵器の壺でつまみ部が欠損している。3・4は大型の須恵器の壺の口縁部で、3の外表面には櫛状工具による波状文が施されている。4の口縁外表面にはヘラ状工具による2段の区画がなされ、その区画内を縦方向に平行沈線によって充填されている。5は須恵器の壺の胴部と思われる。外表面には平行タタキ目、内表面には円形の当て具痕が残っている。6は口頸部は太く直立しながら外反する器形を呈する提瓶と思われるものである。7は大型の須恵器の大甕の胴部で、外表面には平行タタキ目調整が施され、内表面には当て具痕が多く残っている。8は土師器の壺である。外表面にはヘラミガキが施され、内表面にはヘラ状工具による横方向のナデ調整が施されている。胴部上半に最大径がある器形を呈している。9・10は土師器の高坏である。9はほぼ完形で、坏部内面は黒色処理が施されている。外表面は、ヘラ状工具によるナデ調整、脚部は縦位のヘラケズリが施されている。10は脚部のみで外表面には、ヘラケズリが施されている。11は土師器の壺の底部である。外表面ヘラ状工具によるナデ調整が施されている。

時期 本址の所属時期は、出土遺物から古墳時代後期~古墳時代末 (7世紀前半~8世紀初頭) と思われる。



第54图 M1号溝状遺構出土土器実測図

第3節 奈良・平安時代の遺構・遺物

1 竪穴住居址

1) H5号住居址

遺構 (第55図)

検出位置 Eえ7・8、Eお7・8グリッド。

重複関係 なし。平面形態 調査区域外に南壁・東壁が続くため詳細は確かではないが、方形を呈するものと思われる。全容を知り得ないため、長軸、短軸及び主軸方位は不明である。検出された中の壁残高は68～77cmを測る。覆土 黒褐色土に被覆されていた。壁面の立ち上がりは緩やかに立ち上がる。床面の状態 平坦ではあったが軟弱な床面であった。カマド 調査区域外に位置するものと考えられるが、北壁か西壁側に位置するものと予想される。ピット 検出されなかった。遺物の出土状況

覆土中から多量に須恵器・瓦などが出土した。

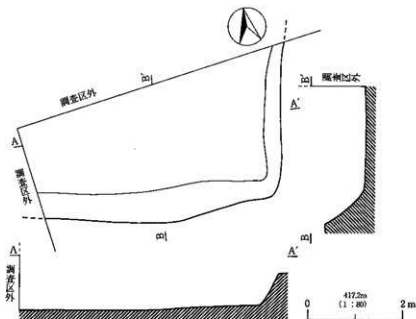
遺物 (第56図)

本住居址出土遺物で図示できたものには、圧倒的に須恵器が多いといえる。

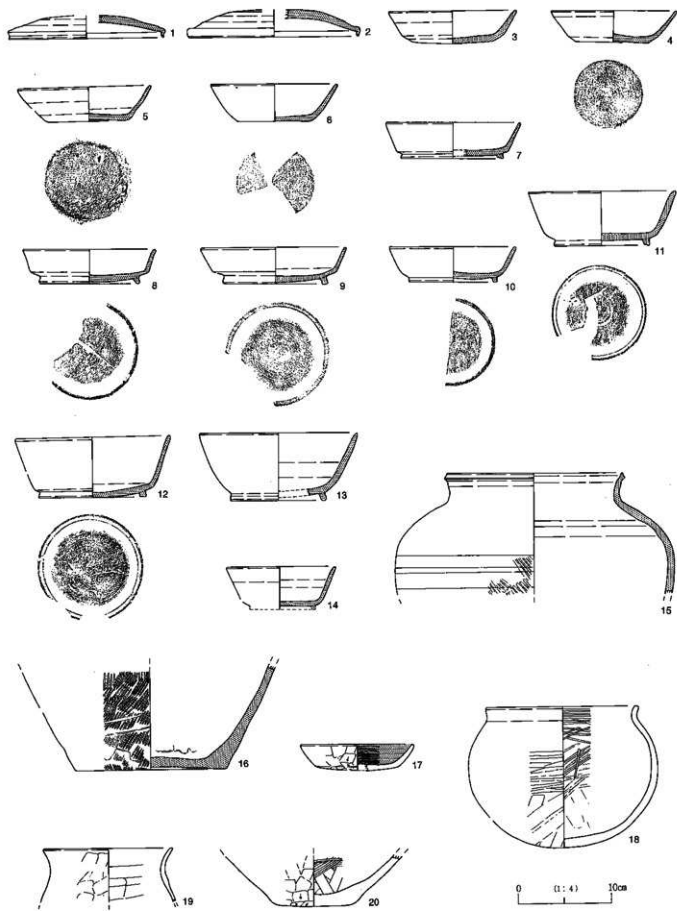
1・2は須恵器蓋で、共につまみ部分が欠損している。折り返し部は垂直で、天井部に回転ヘラケズリが全体的に施されている。3～6は須恵器坏である。3の底部には手持ちヘラケズリの痕跡がある。4～6の底部には回転糸切り痕が残っている。7～14は須恵器の高台付坏である。底部の切り離し技法は、回転ヘラケズリである。14については底部回転ヘラケズリがナゲ消された状態である。形態的に見て10のような箱形の浅いタイプと11～13のような深いタイプの2者に大まかに分類できる。

15は須恵器の甕で、胴部上位に最大径を持つ器形を呈し、外面には平行タタキ目調整が施されている。16は須恵器甕の底部で平底を呈し、外面に平行タタキ目調整が施されている。17は土師器坏で、内面に丁寧なヘラミガキと黒色処理が施され、外面にはヘラケズリ調整が施されている。18は土師器甕で、丸底の器形を呈し、内外面にはヘラミガキが施されている。19は土師器の甕で、外面はヘラケズリ調整、内面はヘラ状工具によるナゲ調整が施されている。20は土師器甕の底部である。外面ヘラケズリ調整が施され、内面にはハケメ調整とヘラ状工具によるナゲ調整が施されている。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から奈良時代前半～中葉（8世紀前半～中葉）と思われる。



第55図 H5号住居址実測図



第56图 H5号住居址出土土器夹测图

2) H8号住居址

遺構 (第57図)

検出位置 Aあ4・5、

Uけ4・5、Uこ4・5、

グリッド。重複関係

H13号住居址に切られ、

南壁の一部を破壊されている。

平面形態 長軸5.76m、

短軸5.24mの隅丸方形を呈する。

主軸方位はN-76°-Eを

指す。壁残高は34~

54cmを測る。覆土

4層に分けられ、4

層の黒褐色が壁体の

一次堆積土と思われるが、

その堆積後に

2・3層の黒褐色土が

レンズ状に堆積した

状況が確認された。

床面の状態 平坦では

あるが軟弱な床面であ

った。住居址の中央

付近に焼土の痕跡が

検出された。カマド

東壁中央付近で検出

され、左右両袖には

竪を芯材として立て

せて組み、それらを

粘土で覆うといった

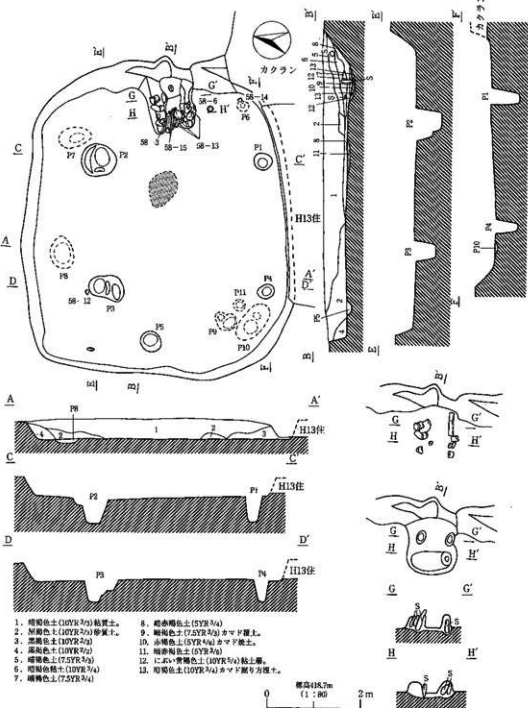
構築方法であ

った。焚き口付近からは

若干の出土遺物があ

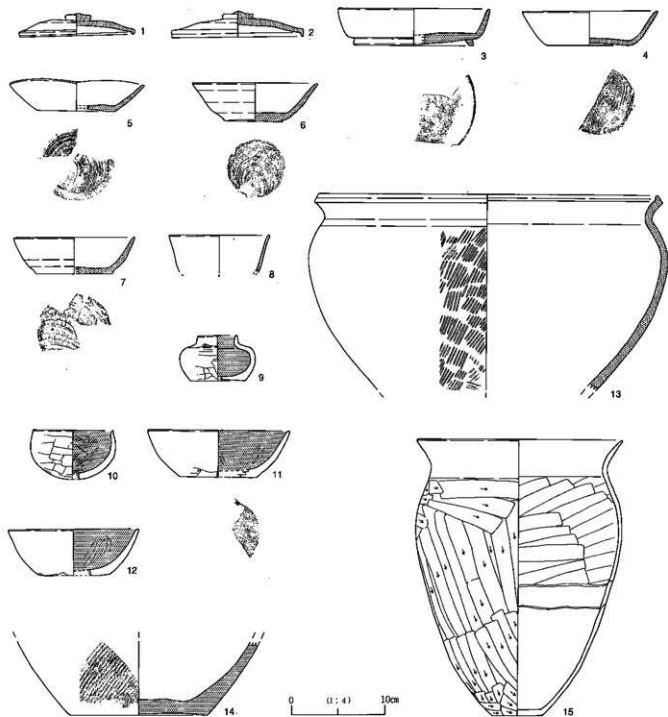
った。焚き口付近からは

若干の出土遺物があ



第57図 H8号住居址実測図

った。焚き口付近からは若干の出土遺物があった。カマドを軸とした主軸方位は、N-72°-Eを指す。ピット11基検出され、P1~P4が支柱穴と思われる。P1は南壁の下に位置し、円形で深さ59cmを測る。P2は楕円形でテラスを有し、深さ52cmを測る。P3は不整形でテラスを2段有し、深さ30cmを測る。P4はP1同様に南壁下に位置し、楕円形で深さ45cmを測る。P5は西壁の中央付近に位置し、楕円形で深さ11cmを測る。支柱穴の一部とも考えられようか。P6~P11は住居址の床面下において検出されたピットである。P6は小型のピットであり、深さ46cmを測る。P10は不整形でテラスを有し、深さ60cmを測る。遺物の出土状況 本住居址からは覆土中やカマド周



第58図 H8号住居址出土土器実測図

辺からやや多くの土器が出土した。土師器の甕・坏、須恵器の甕の坏などの出土であった。

遺物（第58図）

本住居址の出土遺物では、土師器の甕・甕、須恵器の甕、高台付坏などがあり、若干の時期差が出土遺物から観察されるが、これらは混入遺物として扱った。1・2は須恵器の甕で擬宝珠つまみをもち、折り返し部の形態が垂直である。3は箱形の須恵器高台付坏で、底部回転糸切り未調整である。4～8は須恵器の甕である。4・5・6は底部回転糸切り未調整である。7は静止糸切り未調整で、灰白色を呈している。9は土師器の小型甕で、

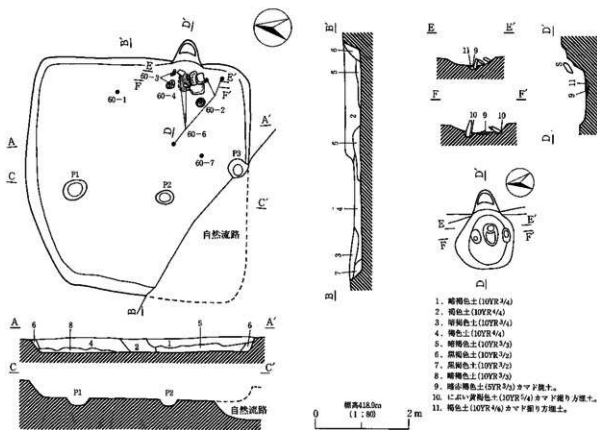
内面黒色処理の施されるものである。10は土師器の坏で内面黒色処理、外面ヘラケズリが施されている。これら2点は、流れ混みによる混入遺物と考えられる。11・12は土師器の黒色土器で、11は底部回転糸切り未調整である。13は外面に平行タタキ目調整の施された須恵器の広口の甕である。14は甕の底部で外面には平行タタキ目調整が施され、平底を呈している。突帯付四耳葺かと思われる。15は土師器甕で、いわゆる武藏型の甕である。口頭部の形態が「く」の字状を呈し、外面にはヘラ状工具によるヘラケズリが施されている。最大径は胴部の上位に見られる。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から奈良時代末～平安時代前半（8世紀後半～9世紀前半）と思われる。

3) H12号住居址

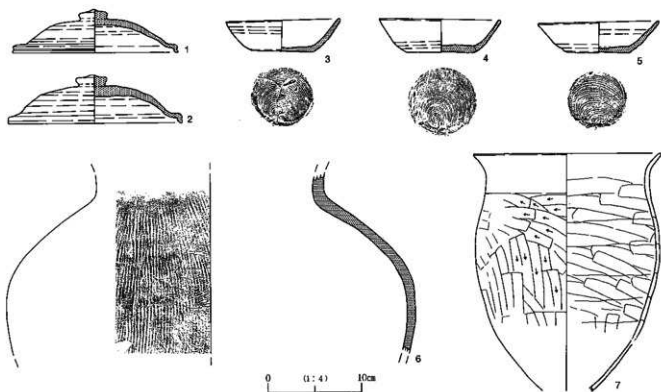
遺構 (第59図)

検出位置 Uき7・8、Uく7・8、Uけ7・8グリッド。重複関係 自然流路に切れ、住居址の南壁と西壁の一部を破壊されていた。平面形態 長軸4.6m、短軸4.35mの不整形は隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-85°-Eを指す。壁残高は26~41cmを測る。覆土 8層に分けられ、暗褐色土、褐色土、黒褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあるが堅固な床面ではなかった。カマド 東壁中央や南よりから検出された。カマドの構築には礫を袖石として使用されていた。遺存状態は、あまり良好ではなかった。ピット 3基検出された。P1は楕円形で深さ14cmを測る。P2は楕円形で深さ9cmを測る。P3は自然流路に一部破壊されてはいるが、楕円形で深さ10cmを測る。主柱穴はP1、P3とも考えられる。遺物の出土状況 本住居址の遺物はカマドやその周辺、覆土中や床面上から出土であった。



第59図 H12号住居址実測図

1. 暗褐色土 (10YR 4/4)
2. 褐色土 (10YR 4/4)
3. 暗褐色土 (10YR 3/4)
4. 褐色土 (10YR 4/4)
5. 暗褐色土 (10YR 3/2)
6. 黒褐色土 (10YR 3/2)
7. 黒褐色土 (10YR 3/2)
8. 暗褐色土 (10YR 3/2)
9. 暗褐色土 (10YR 3/2) カマド敷土。
10. 濃い黄褐色土 (10YR 4/4) カマド周り方壁土。
11. 褐色土 (10YR 4/4) カマド掘り方壁土。

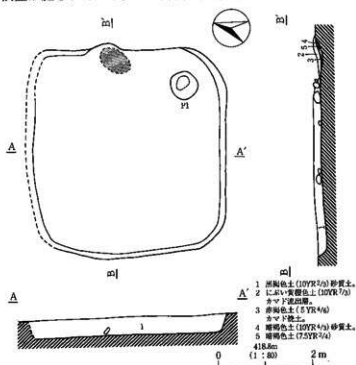


第60図 H12号住居址出土土器実測図

遺物 (第60図)

本住居址出土遺物で図示できたものは、須恵器の壺・坏・甕、土師器の甕のみであった。1・2は須恵器の甕で擬宝珠つまみを有し、外面天井部に回転ヘラケズリ調整が施されている。2の外面に火罨が観察され、折り返し部は垂直な形態を呈している。3～5は須恵器の坏である。底部の調整は回転糸切り未調整である。6は須恵器の大甕で、胴部中位で肩が張る器形を呈している。外面には平行タタキ目調整が施されている。7は土師器の甕で、いわゆる武蔵型の甕である。口頸部がゆるやかな「コ」の字状を呈し、胴部中位に最大径がある器形を呈している。調整を見ると、外面にはヘラケズリが施され、内面はヘラ状工具によるヘラナデ調整が施されている。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から奈良時代末～平安時代前半（8世紀末～9世紀前半）と思われる。



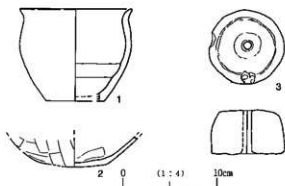
第61図 H13号住居址実測図

4) H13号住居址

遺構 (第61図)

検出位置 U45・6、U35・6グリッド。重複関係

H8・10号住居址を切る。平面形態 長軸4.17m、短軸3.93mの隅丸方形を呈し、主軸方位はN-73°-Eを指す。壁残高は0~40cmを測る。覆土 ぶい黄褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあるが堅固な状態ではなかった。カマド 東壁中央やや北よりから検出された。カマドの構築には礫を袖石として使用されていたが、遺存状態はあまり良好な状態ではなかった。ピット 1基検出されただけであるため、支柱穴については不明点が多い。P1は楕円形で深さ14cmを測る。遺物の出土状況 本住居址の遺物は非常に少なく、散漫な状態であった。



第62図 H13号住居址出土土器実測図

遺物 (第62図)

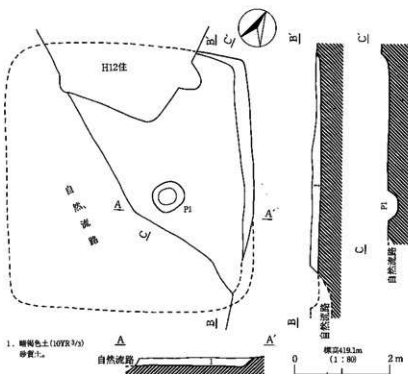
本住居址出土遺物で図示できたものは、土師器の甕、紡錘車である。1は土師器の小型の甕で、摩耗が著しい状態であるが、ロクロ整形されたものと思われる。2は土師器の甕の底部で、いわゆる武蔵型の甕である。外面にはヘラケズリ調整が施されている。3は土師質の大型の紡錘車で重量は325gを測る。表面はナデ調整が施される。時期 本住居址の所属時期は、出土遺物が少ないわけではあるが、重複関係を考慮した結果から平安時代前半(9世紀前半)以降と考えたい。

5) H14号住居址

遺構 (第63図)

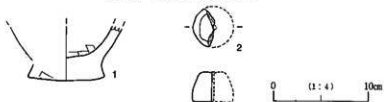
検出位置 Uき8・9、Uく8・9グリッド。

重複関係 H12号住居址と自然流路に切れ、住居址の北側、西側、南側の床面の一部と壁面が破壊されており、残存していたのは住居址の中央部から東側の一部分のみに過ぎなかった。平面形態 平面形態は、重複関係により破壊されているところが多いため、推定ではあるが隅丸方形を呈するものと思われる。壁残高は東壁で17~33cmを測る。同様に重複遺構に破壊されたため、長軸、短軸及び主軸方位が不明であった。覆土 暗褐色土に被覆されていた。床面の状態



第63図 H14号住居址実測図

平坦ではあるがあまり堅固な床面ではなかった。カマド 検出されなかった。重複関係を考慮した結果、北壁あるいは、西壁の中央付近に所在したものが破壊されてしまったため、検出されなかったと思われる。ピット 1基検出され、



第64図 H14号住居址出土土器実測図

主柱穴については不明である。P1は楕円形を呈し深さ20cmを測る。**遺物の出土状況** 本住居址はH12号住居址や自然流路に住居址の半分以上を破壊されているため、調査遺構の面積自体が少なく、出土遺物は少なかった。その中で出土したほとんどの土器は覆土中からの出土であった。

遺物（第64図）

本住居址の出土遺物で図示できたものは2点のみである。1は土師器の甕の底部である。内外面にヘラケズリが施されている。2は土師質の紡錘車である。色調は灰白色を呈し、約半分のみが残存ではあったが大筋の情報は知り得ることができた。他の土器は図示できなかったが、これらの土器について若干触れると、出土遺物において土師器の甕が占める比重が高いようであった。器種的には長胴甕や球胴甕が主体を占めていた。

時期 明確な本住居址の所属時期を知り得る遺物がなかったため、詳細は不明であったが、出土遺物や重複関係から奈良時代の初頭（8世紀初頭）と考えたい。

6) H15号住居址

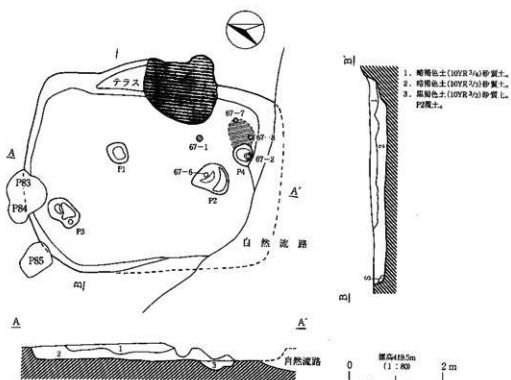
遺構（第65・66図）

検出位置 Uお8・9、Uか8・9、Uき8・9グリッド。重複関係 P83・84・85と自然流路に切られ、住居址の南壁の一部と西壁を破壊されていた。平面形態 短軸約3.5mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-19°-Wを指す。壁残高は0～52cmを測る。覆土 2層に分層され、色調は暗褐色土を呈していた。床面の状態 平坦ではあるがあまり堅固な床面ではなかった。カマド 東壁中央付近から検出された。カマドの構築には多数の礫を袖石として使用し、左右両袖に「ハ」の字状に配した後、褐色の粘土で覆うという手法をとっていた。火床面には礫が直立したままの状態で検出され、支脚として使用されたものと思われた。カマドを軸とした主軸方位はN-87°-Eを指す。遺存状態は、良好な状態であった。また、カマドの北側には焼土が検出され、粘土の残骸も見られたことから、当初のカマドは検出されたカマドの北側に存在し、何らかの理由により移設されたことも推察される。ピット 4基検出され、P1・2が主柱穴と思われる。P1は楕円形で深さ10cmを測る。P2は楕円形でテラスを有し、深さ22cmを測る。P3は楕円形でテラスを有し、深さ39cmを測る。P4は南壁下に位置し、深さ10cmを測る。本ピットの底面に第67図3の須臾器坏が正位に、第67図6の土師器の黒色土器が逆位に合わさった状態で出土した。**遺物の出土状況** 本住居址の出土遺物は南東コーナー付近やカマド周辺からの出土が多かった。

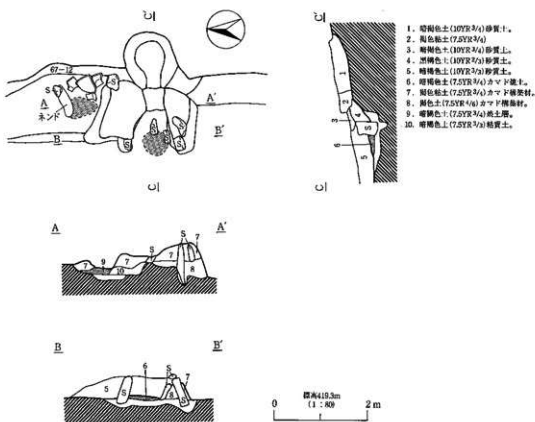
遺物（第67図）

本住居址出土遺物の須臾器の坏・甕、土師器の甕などを図示した。1～5は須臾器の坏である。底部の調整を見ると1は静止糸切り未調整、2～5は回転糸切り未調整である。6は土師器の黒色土器で、内面にはヘラミガキが施される。底部にはヘラ状工具によるナデ調整が施されている。7・8は須臾器高台付坏で回転糸切りの後、ヘラナデ調整が施されている。8はやや底径が大きいものである。9は土師器の小型甕で、外面には縦位のヘラケズリ調整が施されている。10は土師器の甕の口縁から胴部、11は土師器の甕の底部である。共にいわゆる武蔵型の甕で、10の外面には左方向へのヘラケズリが施され、11には右方向へのヘラケズリが施されている。12は須臾器の甕で、肩の張った広口の器形を呈し、外面には平行タキ目調整が施されている。

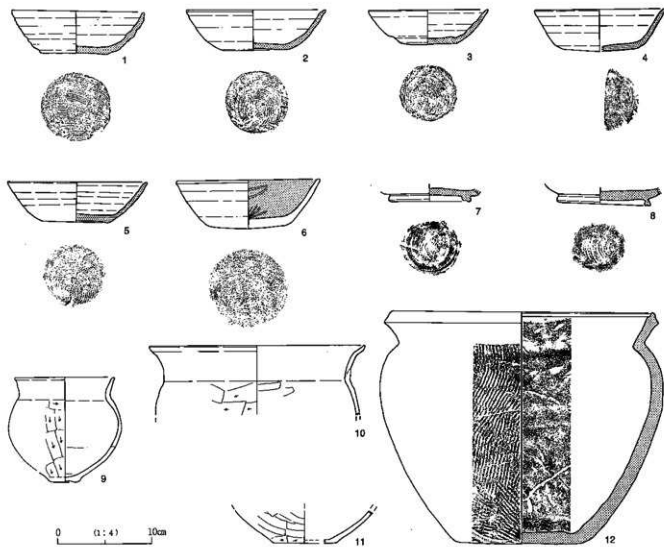
時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から奈良時代末（8世紀後半～末）と思われる。



第65図 H15号住居址実測図



第66図 H15号住居址カマド実測図



第67図 H15号住居址出土土器実測図

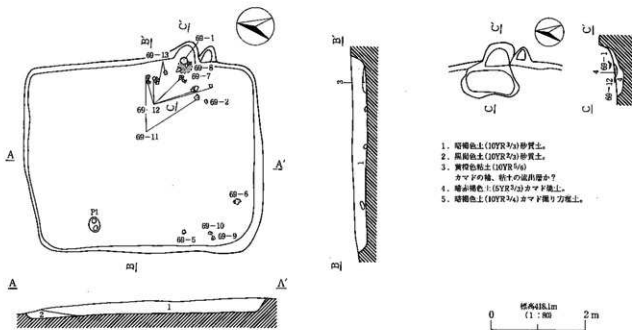
7) H19号住居址

遺構 (第68図)

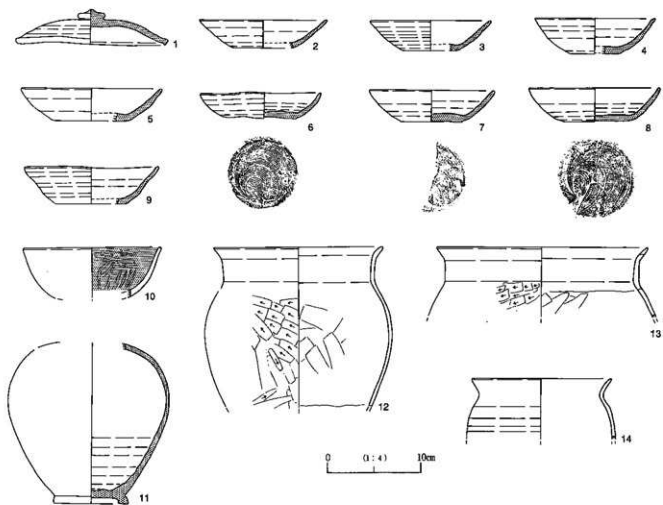
検出位置 Wう10、Wえ10、Xう1、Xえ1グリッド。重複関係 H20・21号住居址を切る。平面形態 長軸4.7m、短軸約3.8mの方形を呈する。主軸方位はN-11°-Wを指す。壁残高は2~41cmを測る。覆土 2層に分層され、暗褐色土と黒褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあるがあまり堅固な床面ではなかった。カマド 東壁中央やや南側から2基検出され、当初南側のカマドを使用していたと思われるが、何らかの理由により、北側に移設されたものと思われた。カマド周辺には礫が集中しており、カマド袖の構築に使用された可能性があるが詳細は不明である。本址のカマドは火床面が検出された以外は、遺存状態は悪い状態であった。北側に所在する移設されたと思われる新しいカマドを軸とした主軸方位は、N-104°-Eを指す。ピット 検出されなかった。
遺物の出土状況 本住居址の出土遺物は南東コーナー付近やカマド周辺からの出土が多かった。

遺物 (第69図)

本住居址の出土遺物では須恵器の蓋・坏・長頸壺、土師器の甕などを図示した。1は器形に歪みが観察された須恵器の蓋で、擬宝珠つまみを有し、天井部外面に回転ヘラケズリ調整が施されている。2~9は須恵器の坏で、すべての坏底部の調整は回転糸切り木調整である。10は土師器の黒色土器で、ロクロ成形され、内面にはヘラミガ

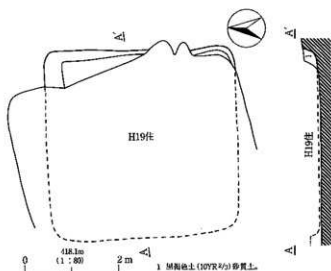


第68図 H19号住居址実測図



第69図 H19号住居址出土土器実測図

キが施される。11は須恵器の長頸壺の体部から底部である。一部体部に自然軸が付着している。12・13は土師器の甕で、いわゆる武蔵型の甕である。口頸部が「コ」の字状を呈し、胴部はヘラケズリが施されている。14はロクロ整形された土師器甕である。時期 本住居址の所属時期は、出土遺物や重複関係から平安時代前半（9世紀前半）と思われる。



第70図 H20号住居址実測図

8) H20号住居址

遺構 (第70図)

検出位置 W10、W9、X11、X9グリッド。

重複関係 H19号住居址に西壁、東壁・北壁・南壁

の一部を破壊される。平面形態 H19号住居址にほとんどの部分が破壊されているため、長軸、短軸、住居址の形態及び主軸方位は不明である。壁残高は住居址の東壁部分で0~28cmを測る。覆土 黒褐色土に被覆されていた。床面の状態 検出された部分の状況では、平坦ではあったが堅固な床面ではなかった。カマド H19号住居址に破壊されていると思われ、カマドは検出されなかった。重複関係を考慮すると、北壁あるいは西壁に位置していた可能性は高いといえる。ピット 検出されなかった。遺物の出土状況 本住居址は残存部が少ないため、出土遺物は僅かであった。出土遺物には須恵器の坏などが見られた。

時期 本住居址の所属時期は、明確に時期を確定できる出土遺物がないが、重複関係から奈良時代~平安時代前半と考えられる。

9) H21号住居址

遺構 (第71図)

検出位置 Wえ9・10、

Wお9・10グリッド。

重複関係 H19号住

居址に南壁の一部を

破壊されていた。平

面形態 長軸4.46m、

短軸約4.44mの隅丸

方形を呈するもの

と思われる。主軸方位

はN-23°-Eを指

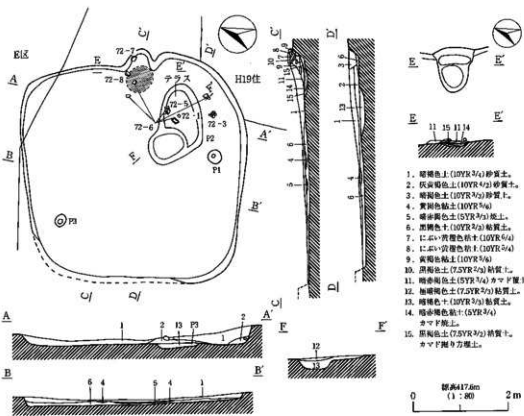
す。壁残高は6~25

cmを測る。覆土 2

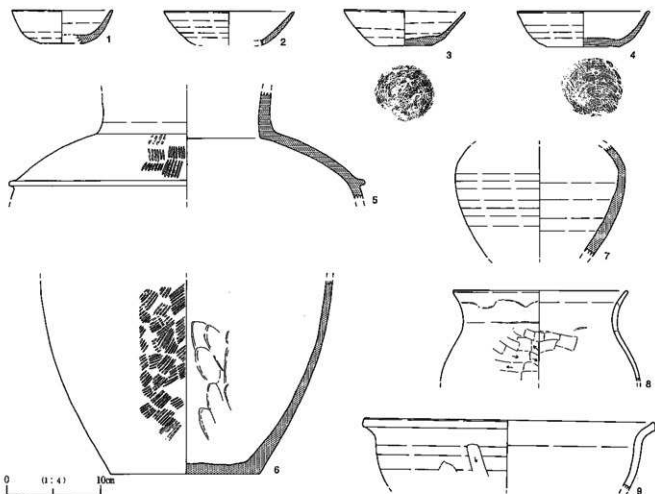
層に分層され、色調

は暗褐色土を呈して

いた。床面の状態



第71図 H21号住居址実測図



第72図 H21号住居址出土土器実測図

平埴ではあるがあまり堅固な床面ではなかった。カマド 東壁中央付近から検出された。火床面は検出されたが遺存状態は悪い状態であった。カマドを軸とした主軸方位はN-23°-Eを指す。ピット 3基検出され、主柱穴は明確に捉えられなかった。P1は円形で深さ13cmを測る。P2は楕円形で深さ9cmを測る。P3は大型で土坑といった方がよいかもしれないがピットとして扱った。不整形でテラスを有し、深さ24cmを測る。遺物の出土状況 本住居址の出土遺物はカマド周辺や覆土中からの出土が多かった。

遺物 (第72図)

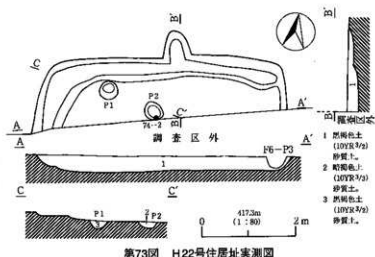
本住居址出土遺物では須恵器の坏、土師器の甕・鍋などを図示した。1~4は須恵器の坏である。1は口径が小さい坏である。3・4は底部回転糸切り未調整の坏である。5は須恵器壺で、肩が張る器形を呈し、突帯が巡らされていると考えられることから大型の突帯付の四耳壺とも思われる。外面は平行タタキ目調整が施され、内面には指頭痕が観察される。6は須恵器の壺の底部から胴部である。5と同一個体とも考えられる。外面には平行タタキ目調整が施されている。内面には、指頭痕が観察できる。7は須恵器の長頸壺の胴部である。8は土師器の甕で、いわゆる武蔵型の甕である。頸部の形態が緩やかな「コ」の字状を呈し、外面にはヘラケズリが施され、内面にはヘラ状工具によるヘラナデ調整が施されている。9は土師器の鍋である。胴部上半にヘラケズリが施されている。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物や重複関係から奈良時代末(8世紀末)と思われる。

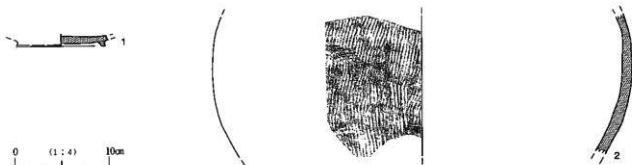
10) H22号住居址

遺構 (第73図)

検出位置 Eえ5、Eお5、Eか5グリッド。重複関係 F6号掘立柱建物址に切られる。平面形態 東壁、西壁が調査区域外に続いているため詳細は不明なところが多いが、方形を呈するものと思われる。壁残高は10~14cmを測る。覆土 黒褐色土に被覆されていた。北壁下と西壁下に3~20cmのテラスが検出された。床面の状態 概ね平坦ではあるが堅固な状態ではなかった。カマド 検出されなかったが、調査



第73図 H22号住居址実測図



第74図 H22号住居址出土土器実測図

区域外に存在する可能性が高く、西壁側か東壁側に存在することが予想される。

ピット 2基検出されたが、住居址の全容が把握できる状態でないため、主柱穴ははっきりしていない。P1は円形で深さ23cmを測る。P2は楕円形で深さ13cmを測る。遺物の出土状況 本住居址の出土遺物量は住居址の検出面積が少ないため、覆土中から少量出土したのみである。

遺物 (第74図)

本住居址出土遺物で図示できたのは、須恵器の甕と高台付坏の2点のみである。1は須恵器の高台付坏の底部のみである。底部調整は回転ヘラケズリ未調整である。2は須恵器の大甕の胴部である。外面には平行タタキ目調整が施され、内面には指頭痕が残っている。時期 本住居址の所属時期は、出土遺物が少ないため明確な時期は不明であるが、あえていうならば出土遺物から奈良時代と考えられよう。

11) H24号住居址

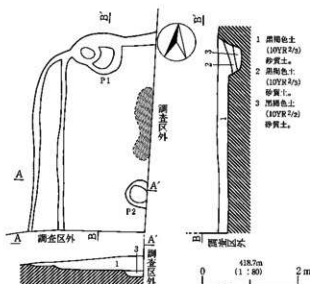
遺構 (第75図)

検出位置 Yえ1・2グリッド。重複関係 なし。平面形態 北壁・西壁の一部が調査区域外に続いている。また南壁が調査区域外のため、長軸、短軸、主軸方位が不明である。平面形態は、全容を知り得ないが隅丸方形を呈するものと思われる。壁残高は15~17cmを測る。覆土 黒褐色土に被覆されていた。西壁側に幅約40cmのテラス面を有する。床面の状態 平坦ではあるがあまり堅固な状態ではなかった。カマド 検出されなかったが、東側の住居址の床面上に焼土の検出が見られたことから東・北壁にカマドが所在するものと思われた。ピット 2基検出されたが、主柱穴は捉えられなかった。P1は楕円形でテラスを有し、深さ34cmを測る。P2は調査区域外に延

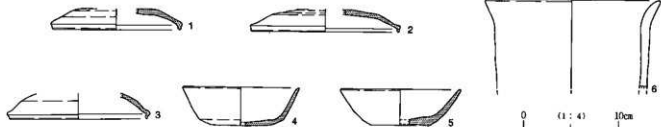
びるため詳細は不明であるが、楕円形を呈するものと思われる。深さは15cmを測る。遺物の出土状況 住居址は一部分のみの検出であること、カマドの検出もなかったため出土遺物が少なかった。これらの遺物の出土は、覆土中からの出土が多かった。

遺物 (第76図)

本住居址出土遺物では須恵器の坏、土師器の甕などを図示した。1～3は須恵器の蓋である。1・2は天井部は回転ヘラケズリ調整が施され、口縁端部の折り返し部がまっすぐなものである。3は天井部に回転ヘラケズリ調整が施され、折り返し部が内側に屈曲するものである。4・5は須恵器の坏である。4はヘラ状工具による底部切り離しが



第75図 H24号住居址実測図



第76図 H24号住居址出土土器実測図

なされたと思われる坏である。6は土師器の甕で、外面ナデ調整が施されたものと思われる。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から奈良時代前半～後半（8世紀前半～後半）と思われる。

12) H25号住居址

遺構 (第77・78図)

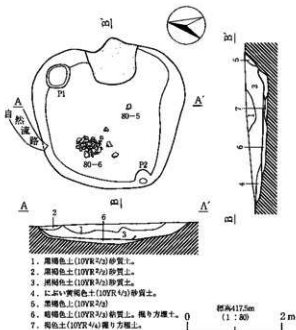
検出位置 Eあ3、Eい3グリッド。重複関係 Y4号住居址を切る。自然流路に切られ、北壁の一部を破壊されていた。平面形態 長軸2.5m、短軸2.4mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-78°-Eを指す。壁残高は10～34cmを測る。覆土 4層に分層され、黒褐色土、にぶい暗褐色土に被覆されていた。4層のにぶい暗褐色土は壁体の崩落土と思われる。床面の状態 平坦ではあるがあまり堅固な床面ではなかった。カマドは東壁中央付近に位置し、遺存状態は良好な状態であった。カマドの構築には、礫を左右両袖に構築材として使用し、粘質土で覆うといった手法を取っていた。カマドを軸とした主軸方位はN-72°-Eを指す。ピット 2基検出された。P1は北東コーナーに位置し、楕円形で深さ7cmを測る。P2は南西コーナーに位置し、楕円形で深さ9cmを測る。遺物の出土状況 本住居址の出土遺物は須恵器甕、土師器坏・鍋があり、ほとんどが覆土中からの出土であった。

遺物 (第79・80図)

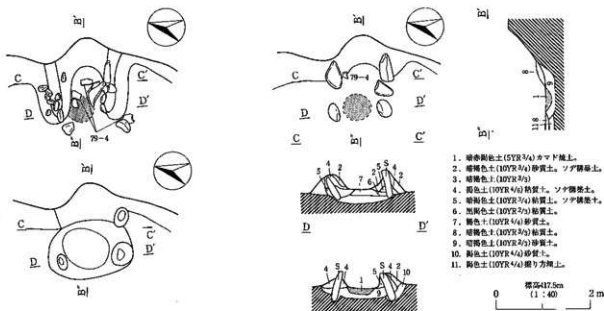
本住居址出土遺物のうち須恵器の坏・甕、土師器の坏などを図示した。1は須恵器の蓋である。天井部に回転ヘラケズリが施され、口縁端部の折り返し部が垂直な状態である。2は須恵器坏で口縁から体部にかけて直線の

な器形を呈している。3は土師器の黒色土器で、ロクロ成形され、内面に黒色処理が施されている。底部の調整は手持ちヘラケズリである。4は土師器の銅である。頸部が「く」の字状に外反し、底部は平底を呈する器形と思われる。外面には縦位のヘラケズリの後、横位へのヘラケズリ調整が施されている。5は須恵器甕の底部と思われる。平底を呈し、外面には平行タタキ目調整が施されている。6は須恵器の大型の甕である。有段の口縁がラッパ状に開き、肩が張る器形で、胴部上半に最大径を有する。外面は胴部には平行タタキ目調整が施され、内面には指頭痕が観察される。内外面の頸部にはハケメ調整が施されている。

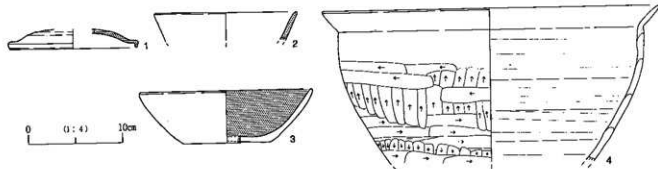
時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から平安時代前半（9世紀後半）と思われる。



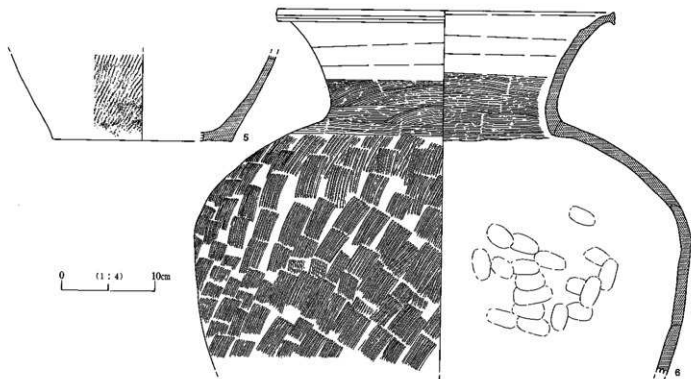
第77図 H25号住居址実測図



第78図 H25号住居址カマド実測図



第79図 H25号住居址出土土器実測図



第80図 H25号住居址出土土器実測図

13) H26号住居址

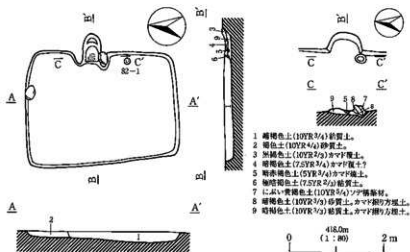
遺構 (第81図)

検出位置 Y<2・3、Y1<2・3グリッド。重複関係 H27号住居址を切る。平面形態 長軸3.08m、短軸2.24mの方形を呈する。主軸方位はN-7°-Wを指す。壁残高は4~16cmを測る。覆土 2層に分層され、暗褐色土と褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあるがあまり堅固な床面ではなかった。カマド 東壁中央付近から検出され、右袖部には礫と粘土で袖を構築していた。本址のカマドは火床面が検出された以外は、遺存状態は悪い状態であった。カマドを軸とした主軸方位はN-84°-Eを指す。ピット 検出されなかった。遺物の出土状況 本住居址の出土遺物は少なかった。出土遺物には土師器の甕等があり、覆土中から出土している。

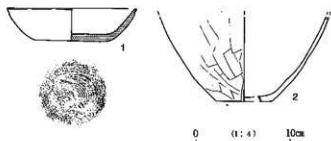
遺物 (第81図)

本住居址の出土遺物の中で、図示できたものは須恵器の坏と土師器の甕の2点のみである。1は須恵器の坏で、底部の調整は回転糸切り未調整である。2は土師器の甕で、いわゆる武蔵型の甕の底部から胴部である。外面にはハラケズリが施されている。

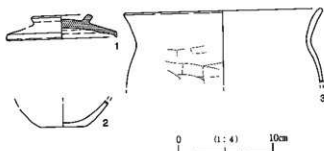
時期 本住居址の所属時期は、出土遺物が少ないため詳細を知り得ないが、重複関係もとにした結果、平安時代(9世紀前半以降)といえようか。



第81図 H26号住居址実測図



第82図 H26号住居址出土土器実測図



第83図 H27号住居址出土土器実測図

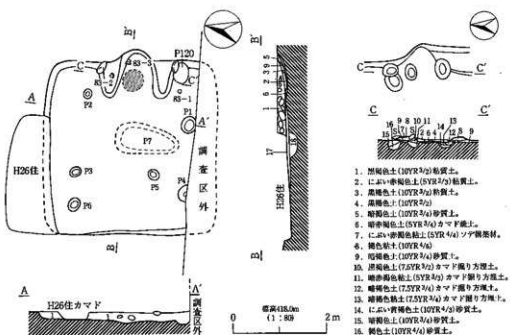
14) H27号住居址

遺構 (第84図)

検出位置 Yく2・3、Yけ2・3グリッド。重複関係 H26号住居址に切れ、北壁の一部が破壊されている。平面形態 南壁や東壁、西壁の一部が、調査区域外に続くため詳細は不明であるが、長軸3.4mの方形を呈する住居址と思われる。推定された主軸方位はN-80°-Wを指す。壁残高は13~20cmを測る。覆土 黒褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあるがあまり堅固な床面ではなかった。カマド 調査区域外に住居址が続くため詳細を欠くが、東壁中央付近に位置するものと思われる。袖部は粘土で構築されていた。火床面の西側に礫が集中していた。本址のカマドは概ね遺存状態は良いといえよう。カマドを軸とした主軸方位はN-84°-Eを指す。ピット 7基検出され、P1、P4、P6が主柱穴と思われる。他の1基はH26号住居址と重複関係があることから破壊されてしまった可能性が高いと思われる。P1は楕円形で深さ6cmを測る。P2はカマドの北側に位置し、楕円形で深さ9cmを測る。P3は楕円形で深さ4cmを測る。P4は一部調査区域外に続くため詳細は不明であるが、楕円形を呈するものと思われる。深さは6cmを測る。P5は楕円形で深さ6cmを測る。P6は楕円形で深さ8cmを測る。P7は住居址の床下から検出されたもので、長楕円形を呈している。遺物の出土状況 出土遺物は多くはなく、土器では土師器、須恵器坏等が覆土中から出土している。

遺物 (第83図)

本住居址の出土遺物では図示できたものは3点のみであった。1は須恵器の蓋で、大型の環状のつまみがつけられているものである。2は土師器の小型甕の底部で、いわゆる武蔵型の甕である。外面にはヘラケズリ調整が施されている。3は土師器の甕で、2と同様に武蔵型の甕の口縁~胴部である。頸部は「く」の



第84図 H27号住居址実測図

1. 黒褐色土 (10YR 3/2) 粘質土。
2. にいり赤褐色土 (5YR 2/2) 粘質土。
3. 黒褐色土 (10YR 3/2) 粘質土。
4. 黒褐色土 (10YR 3/2)。
5. 黒褐色土 (10YR 3/2) 砂質土。
6. 赤褐色土 (5YR 3/4) カマド袖部。
7. にいり赤褐色土 (5YR 4/4) ソラ焼灰材。
8. 褐色土 (10YR 4/4)。
9. 褐色土 (10YR 3/4) 砂質土。
10. 赤褐色土 (7.5YR 3/2) カマド隅り方柱土。
11. 赤褐色土 (5YR 3/2) カマド隅り方柱土。
12. 褐色土 (7.5YR 3/4) カマド隅り方柱土。
13. 赤褐色土 (7.5YR 3/4) カマド隅り方柱土。
14. にいり赤褐色土 (10YR 4/2) 粘質土。
15. 赤褐色土 (10YR 3/4) 砂質土。
16. 褐色土 (10YR 4/4) 砂質土。
17. にいり赤褐色土 (10YR 5/4) 柱隅り方柱土。
18. 褐色土 (10YR 3/4) 砂質土。

字状の器形を呈している。外面にはヘラケズリ調整が施されている。

時期 本住居の所属時期は、出土遺物が少なく明確にできないわけであるが、出土遺物や重複関係から平安時代前半（8世紀後半～9世紀前半）と思われる。

15) H28号住居址

遺構 (第85図)

検出位置 Dあ5・6、Dい5・6グリッド。重複関係 H29・35号住居址を切る。平面形態 北側のプランが重複関係により把握できなかったため、一部推定しているが、長軸3.62m、短軸約2.82mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-5°-Eを指す。壁残高は4～13cmを測る。本住居址は、上述したわけであるが、北壁側が切り合っていたこともあって、明確なプランを捉えられなかった。覆土 2層に分層され、暗褐色土と黒褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあるがあまり堅固な床面ではなかった。カマド 住居址北側に楕円形の焼土址が検出されたこと

より、位置的な面から本来カマドが存在していたであろうと推察した。よって、火床面のみが残存であると考えた。ピット 3基検出され、主柱穴については不明な点が多い。P1は長楕円形で深さ27cmを測る。P2は楕円形で深さ16cmを測る。P3は南西コーナーに位置し、楕円形で深さ6cmを測る。**遺物の出土状況** 本住居址の出土遺物は極めて少なく、須恵器の破片が数点出土したに過ぎない。

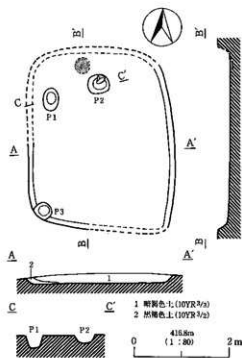
遺物 上述のとおり本住居址出土遺物は少なく、図示できる遺物はなかった。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物が少なく不明であるが、重複関係から平安時代前半（9世紀前半）以降と思われる。

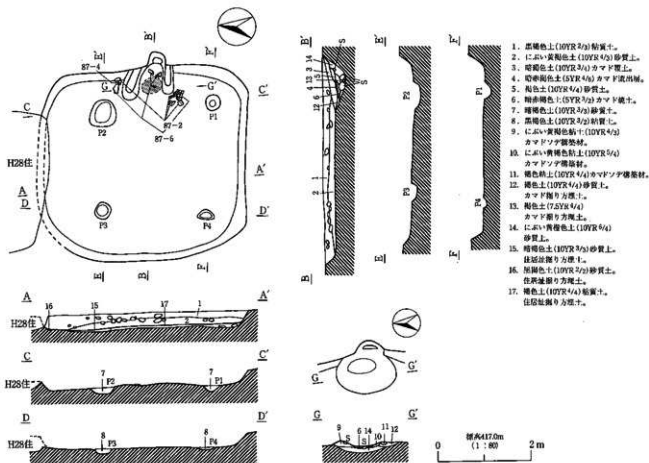
16) H29号住居址

遺構 (第86図)

検出位置 Dあ6・7、Dい6・7グリッド。重複関係 H28号住居址に切られ、北壁の一部を破壊されている。平面形態 北壁の一部が破壊されているため推定になるが、長軸4.07m、短軸3.66mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-5°-Wを指す。壁残高は14～34cmを測る。覆土 黒褐色土とにぶい黄褐色土に被覆され、覆土中には地山に包含される角重礫を多く含んでいた。床面の状態 平坦ではあるがあまり堅固な床面ではなかった。カマド 住居址東壁中央付近に位置し、袖部には礫と粘土を構築材として使用していた。本址のカマドは概ね遺存状態が良い状態であった。カマドを軸とした主軸方位はN-90°-Eを指す。ピット 4基検出され、P1～P4が配置から見ると主柱穴と思われた。P1は円形で深さ13cmを測る。P2は楕円形で深さ13cmを測る。P3は楕円形で深さ12cmを測る。P4は不整形を呈し、深さは5cmを測る。**遺物の出土状況** 本住居址の出土遺物量はあまり多くはなく、土師器壺・坏、須恵器坏・甕がカマドや覆土中から出土した。



第85図 H28号住居址実測図

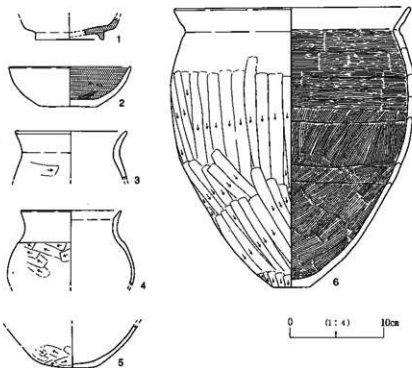


第86図 H29号住居址実測図

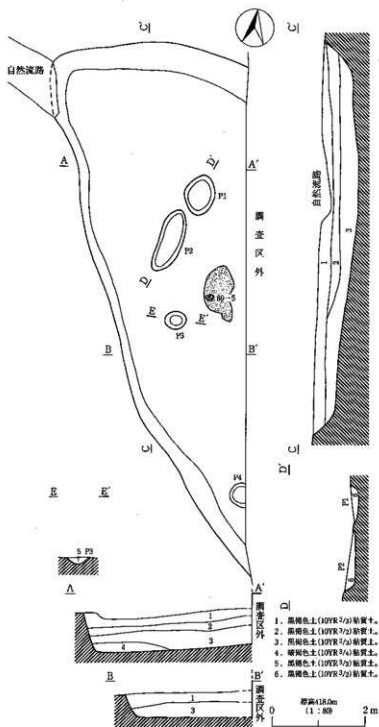
遺物 (第87図)

本住居址の出土遺物では図示できたものは須恵器高台付杯、土師器の黒色土器、甕である。1は須恵器高台付杯である。2は土師器黒色土器で、摩滅しており調整が観察できない状態である。3～5は土師器の甕である。3・4は小型の武蔵型の甕の口縁～胴部で、頸部の形態が「く」の字状を呈している。5は武蔵型の甕の底部である。共に外面にヘラケズリ調整が施されている。6は土師器の砲弾型の甕で、外面縦方向のヘラケズリ調整、内面にはハケメ調整が施されている。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物や重複関係から平安時代前半(8世紀後半～9世紀前半)と思われる。



第87図 H29号住居址出土土器実測図

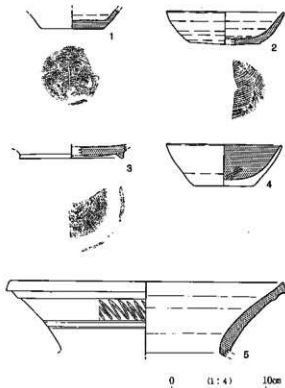


第88図 H31号住居址実測図

態ではなかった。カマド 検出されなかった。ピット 4基検出された。P1は楕円形で深さ19cmを測る。P2は長楕円形で深さ15cmを測る。P3は楕円形で深さ15cmを測る。P4は調査区域外に一部続いたため、形態は正確には知り得なかったが、楕円形を呈するものと思われる。遺物の出土状況 本住居址の出土遺物は少なかった。須恵器の壺片が覆土中から出土している。

遺物 (第89図)

出土遺物が少なかったため、図示できたのは5点のみである。1・2は須恵器坏で、底部調整が回転糸切未調



第89図 H31号住居址出土土器実測図

17) H31号住居址

遺構 (第88図)

検出位置 Xえ9、Xお6・7・8・9、Xか6・7グリッド。重複関係 自然流路に切られ、西壁の一部を破壊される。また、北壁等が調査区域外に続いている。平面形態 調査区域外に北壁や南壁が続いているため、長軸・短軸・主軸方位が不明である。壁残高は検出できたところで41~79cmを測る。本住居址は形態的にも住居址と異なる可能性が考えられるが、今回は住居址として扱った。覆土 4層に分層され、黒褐色土と暗褐色土に被覆されていた。床面の状態 緩やかな傾斜が見られ、北側や西側が窪む状況が看取された。堅固な状

整である。3は須恵器高台付坏で底部調整は、回転ヘラケズリ未調整である。覆土中からの出土である。4は土師器の黒色土器である。底部にヘラケズリが観察された。5は須恵器甕の口縁部である。外面ヘラ状工具による1条の波状文が施されている。

時期 本住居址の所属時期は明確な出土遺物がないといった状態ではあるが、平安時代（8世紀後半～9世紀後半）と思われる。

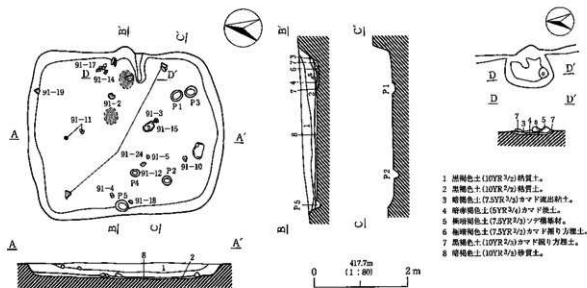
18) H32号住居址

遺構（第90図）

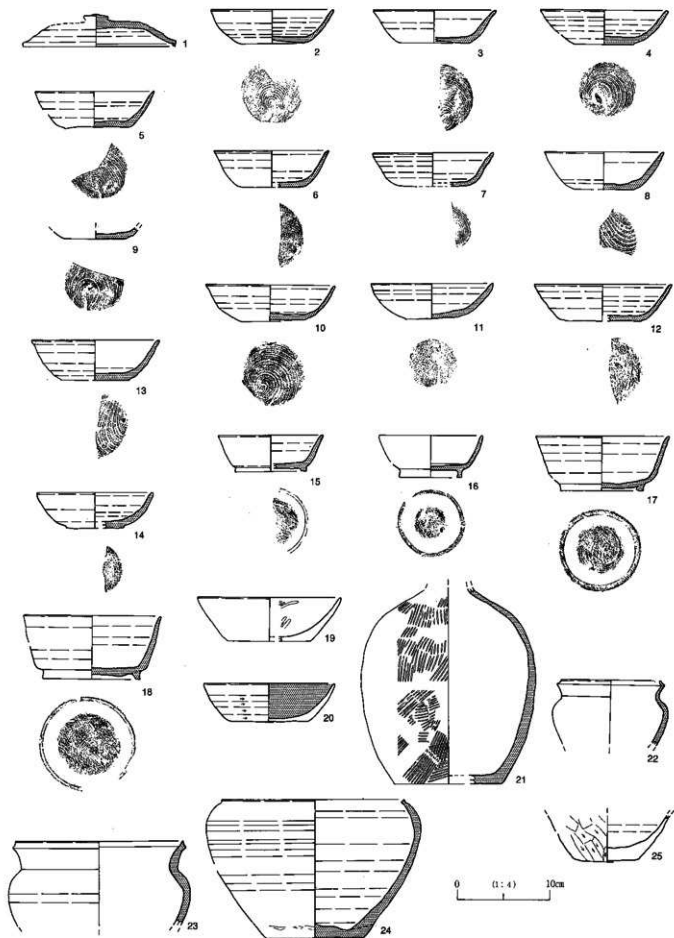
検出位置 Wお10、Wか10、Xお1、Xか1グリッド。重複関係 なし。平面形態 長軸3.84m、短軸3.12mの方形を呈する。主軸方位はN-12°-Wを指す。壁残高は10-35cmを測る。覆土 黒褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあるがあまり堅固な床面ではなかった。カマド 東壁中央付近に検出され、粘質土で左右両袖を構築されていた。概ね遺存状態は良いと思われた。カマドを軸とした主軸方位はN-80°-Eを指す。ピット 5基検出され、P1、P2が配置的に見て主柱穴の一部と思われたが、他に主柱穴を構成すると考えられるピットは検出されなかった。P1は楕円形で深さ5cmを測る。P2は円形で深さ9cmを測る。P3はP1の南側に隣接し、楕円形で深さ16cmを測る。P4は西壁側の中央に位置し、楕円形で深さ5cmを測る。P5は西壁中央下に位置し、楕円形で深さ10cmを測る。P4・5は住居址の入口に関係する施設とも考えられるが、詳細は不明である。遺物の出土状況 本住居址の出土遺物量は、本遺跡の他の住居址と比較した場合、非常に遺物量が豊富な住居址といえる。これらの出土土器では土師器・甕、須恵器・甕等があり、出土のあり方は主に覆土中やカマド、及びその周辺からの出土である。

遺物（第91図）

本住居址の出土遺物量が多いということは先に触れたことであるが、出土遺物の中で図示できたものを見ると須恵器坏が圧倒的に多いといえる。1は須恵器の蓋で、擬宝珠つまみを有し、天井部上面に回転ヘラケズリ調整が施されるものである。口縁端部の折り返し部は垂直状を呈している。2～14は須恵器坏で、底部の調整はすべて回転糸切り未調整である。15～18は須恵器高台付坏である。15・16は底部の切り離しが回転糸切りである。17・18はやや大型で箱形の高台付坏であり、底部の切り離しは回転糸切りである。19はロクロ整形された土師器坏で



第90図 H32号住居址実測図



第91图 H32号住居址出土土器实测图

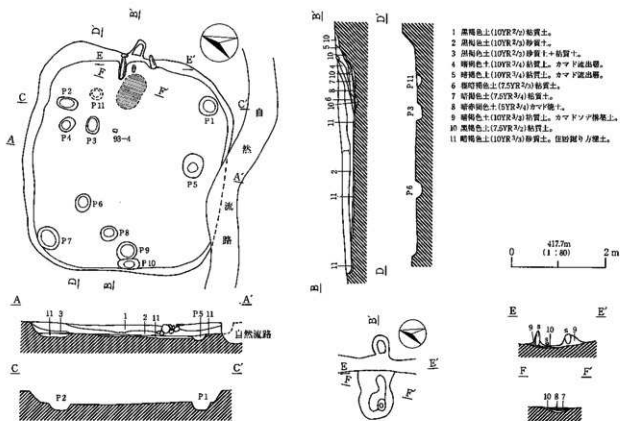
ある。20は土師器の黒色土器で、外面には回転ヘラケズリが施されている。21は口縁部と底部が欠損しているが、須恵器の甎と思われるものである。外面には平行タタキ目調整が施されている。22は須恵器の鉢で口縁端部が内湾している。23は胴部が底部から直線的に開き、頸部は緩やかに外反する広口の鉢形の土器である。24は大型の須恵器鉢で、口縁端部が急激に外反する器形を呈する。25は土師器甕で、外面にヘラケズリが施されている。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から平安時代前半（8世紀後半～9世紀前半）と思われる。

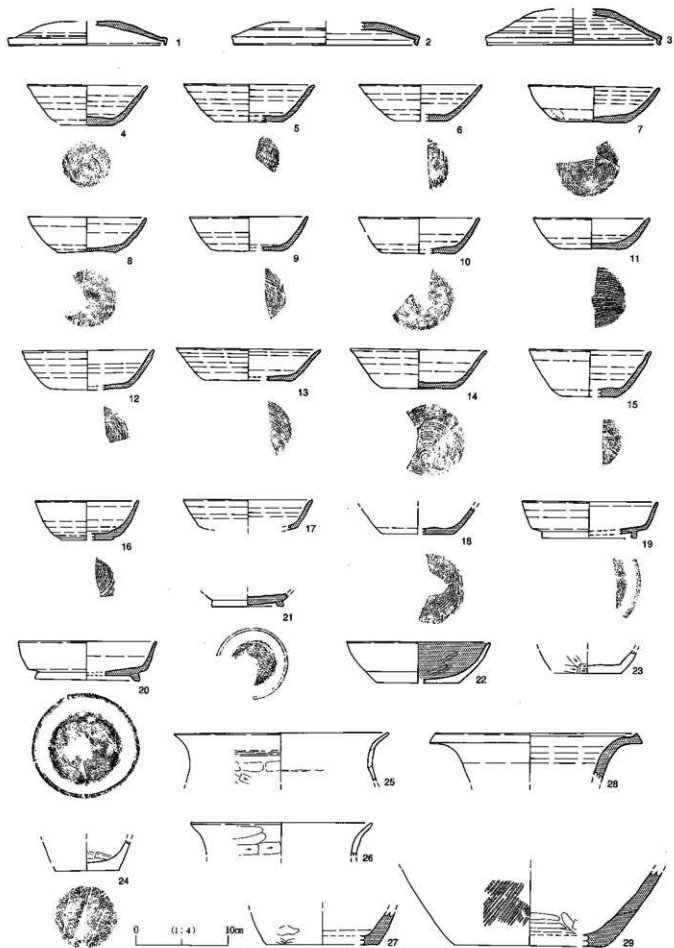
19) H33号住居址

遺構（第92図）

検出位置 Wお9・10、Wか9・10グリッド。重複関係 自然流路と重複関係にあり、南壁の一部が破壊されている。平面形態 長軸4.2m、短軸3.9mの隅丸方形を呈する。主軸方位はN-70°-Eを指す。壁残高は11~37cmを測る。覆土 黒褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあるがあまり堅固な床面ではなかった。カマド 東壁中央付近にて検出され、磔を左右両軸に一つ配し、粘質土で覆うといった手法のカマドであった。遺存状態は概ね良好であった。ピット 11基検出され、P1、P2が配置的に見て主柱穴の一部と思われたが、他のピットは配置に規則性が無く、主柱穴については明らかにできなかった。P1は円形で深さ20cmを測る。P2は楕円形で深さ13cmを測る。P3は楕円形で深さ10cmを測る。P4はP2の西側に位置し、楕円形で深さ13cmを測る。P5は南壁側の中央下に位置し、楕円形で深さ12cmを測る。P6は楕円形を呈し、深さ13cmを測る。P7は北西コーナーに位置し、楕円形で深さ21cmを測る。P8は住居址西壁側中央付近に位置し、楕円形で深さ10cmを測る。P9はP8同様に中央付近に位置し、P10と接していた。楕円形で深さ18cmを測る。P10は先述のとおりP9と接し、楕円形で深さ18cmを測る。P9・10は位置的な面から住居址の入口に関係する施設とも考えられたが、詳細は不明である。P11はP2



第92図 H33号住居址実測図



第93图 H33号住居址出土土器实测图

のカマド側に位置し、楕円形で深さ6cmを測る。遺物の出土状況 本住居址の出土遺物量は概ね多い方であった。土器では土師器坏や甕、須恵器坏や甕等があり、主に覆土中からの出土であった。

遺物 (第93図)

本住居址の出土遺物のうち図示できた土器では須恵器が多いといえる。1～3は須恵器の蓋である。1は口縁端部の折り返し部は垂直であり、2・3はやや内側に折れている。4～18は須恵器坏である。底部調整は9・11が静止糸切り未調整である。これらの底部調整については、回転糸切り未調整といえる。19～21は須恵器高台付坏である。19は底部外面に回転ヘラケズリが施されている。20については、底部回転糸切り後回転ヘラケズリ調整が施されている。また、底部内外面にはすす状のこびりつきが付着し、灯明具として使用された可能性が考えられる。詳細については第V章第3節で後述したい。21は底部回転ヘラキリ未調整で、中央部にヘラ記号と思われる痕跡が観察される。22は土師器の黒色土器である。23は土師器の坏で、外面ヘラケズリ調整が施されている。24～26は土師器甕である。24の底部外面には、木葉痕が観察できる。25・26はいわゆる武蔵型の甕で、25については頸部「コ」の字状を呈している。27～29は須恵器の甕である。28は口縁がラッパ状に開くものである。29は外面に平行タタキ目調整が施されている。また、今回細片のため図示できなかったが、土師器の砲弾甕も出土している。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から平安時代前半(8世紀後半～9世紀前半)と思われる。

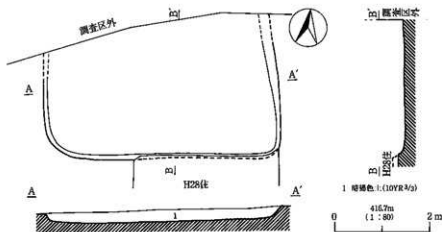
20) H35号住居址

遺構 (第94図)

検出位置 Dあ5・6、Dい5・6グリッド。重複関係 H28号住居址と切り合い、南壁の一部を破壊されていた。また、北側が調査区域外となるため、東壁、西壁が調査区域外に続いている。平面形態 先述のとおり調査区域外に続いているため、詳細は不明であるが、隅丸方形を呈するものとも思われる。検出された中で東西長は、6.25mを測る。推定された主軸方位はN-8°-Eを指す。壁残高は3～16cmを測る。覆土 黒褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあるがあまり堅固な床面ではなかった。カマド 検出されなかった。ピット 検出されなかった。遺物の出土状況 本住居址の出土遺物は非常に少ない状態で、それらはすべてが覆土中からの出土であった。

遺物 図示できる遺物は出土しなかった。土器には土師器の甕、坏や須恵器の坏、甕の出土遺物があった。

時期 本住居址の所属時期は、明確に断定できる出土遺物がないために不明な状態である。重複関係や若干の出土遺物を考慮した結果、奈良時代から平安時代前半(9世紀前半)といえよう。



第94図 H35号住居址実測図

第4節 掘立柱建物址

1) F1号掘立柱建物址

遺構 (第95図)

検出位置 Uこ3・4、

Aあ3・4グリッド。

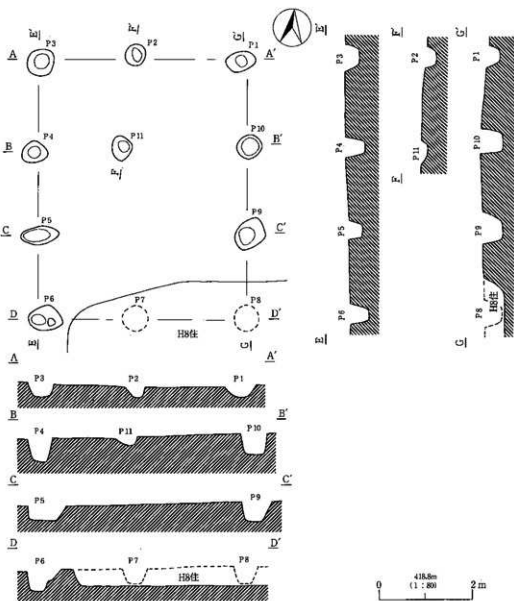
重複関係 H8号住居址と重複関係にあり、ピット2基は検出されなかったが、H8号住居址に破壊されたと考えられた。

平面形態 2間×3間の側柱式で規模は桁行5.56m、梁行4.28mの矩形のプランを呈する。主軸方位はN-5°-Wを指す。

覆土 粘質土に被覆されていた。ピットピットの掘り方は、楕円形を呈しているものが多い。P1は深さ32cm、P2は深さ24cm、P3は深さ31cm、P4は深さ50cm、P5は深さ30cm、P6はテラスを有し深さ41cm、P7は深さ42cm、P8は深さ44cm、P9は深さ16cmを測る。

遺物 遺物は出土しなかった。

時期 本建物址の所属時期は、出土遺物がないため明確にはできないが、H8号住居址との重複関係から奈良時代末～平安時代前半(8世紀後半～9世紀前半)以前と考えられる。



第95図 F1号掘立柱建物址実測図

2) F2号独立柱建物址

遺構 (第96図)

検出位置 Uか7・8、Uき7・8、

Uく7グリッド。重複関係

H12号住居址と重複関係にあり、

P3が破壊されている。平面形態

1間×2間の側柱式

で規模は桁行4.3m、梁行4m

の矩形のプランを呈する。主軸方位

はN-15°-Wを指す。

覆土 粘質土に被覆されていた。

ピット ピットの掘り方は楕円形を呈し、

大きさには大小があった。P1はテラスを

有し、深さ38cm、P2は深さ34

cm、P3は深さ14cm、P4は深さ

40cm、P5は深さ22cm、P6は深

さ31cmを測る。

遺物 土師器の甕・坏の細片

が出土しているが、図示でき

たものは無い。

時期 本建物址の所属時期はH12号住居址との重複

関係や出土遺物から、奈良時代末～平安時代前半

(8世紀末～9世紀前半) 以前と考えられる。

3) F3号独立柱建物址

遺構 (第97図)

検出位置 Uく7、Uけ7・8グリッド。重複関係

F4号住居址と重複関係にあるが、ピットの切り合いが確認され

なかったため、新旧関係は不明である。平面形態

1間×1間の側柱式で規模は桁行3.56~3.6m、梁行2.8mの

矩形のプランを呈する。主軸方位はN-24°-Eを指す。

覆土 粘質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り

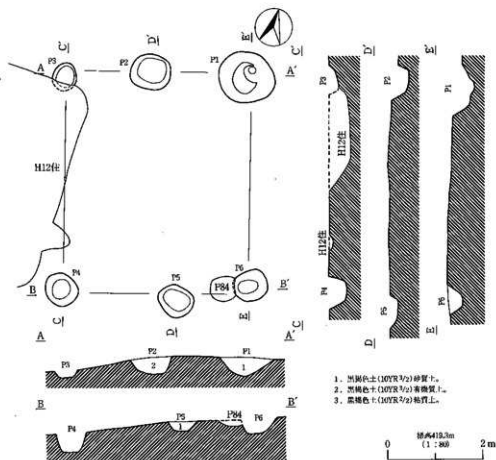
方は楕円形を呈していた。P1は深さ23cm、P2は深さ37

cm、P3は深さ32cm、P4は深さ33cmを測る。

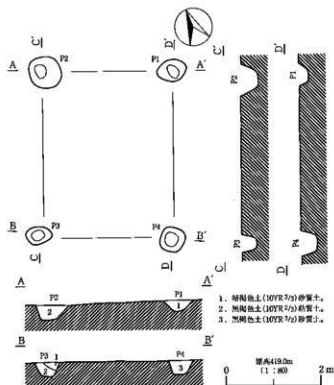
遺物 遺物は出土しなかった。

時期 本建物址の所属時期は切り合い及び出土遺物が

ないため不明である。



第96図 F2号独立柱建物址実測図



第97図 F3号独立柱建物址実測図

4) F4号掘立柱建物址

遺構 (第98図)

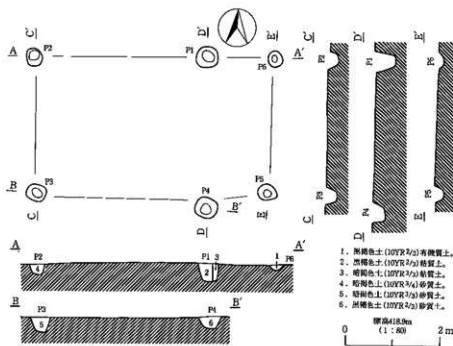
検出位置 U₆・7、U_け6・7グリッド。重複関係 F4号住居址と重複関係にあるが、ピットの切り合いが確認されなかったため、新旧関係は不明である。平面形態 1間×1間の側柱式でP5・6が底になると思われる。規模は桁行3.6m、梁行2.96~3.28mの矩形的プランを呈する。主軸方位はN-86°-Eを指す。覆土 黒褐色の粘質土、有機質土、砂質土に被覆されていた。

ピット ピットの掘り方は楕円形を呈する。P1は深さ42cm、

P2は深さ21cm、P3は深さ31cm、P4は深さ27cm、P5は深さ18cm、P6は深さ9cmを測る。

遺物 土師器の坏・壺の細片が出土しているが、図示できたものは無い。

時期 本建物址の所属時期は出土遺物及び切り合い関係がないため不明である。



第98図 F4号掘立柱建物址実測図

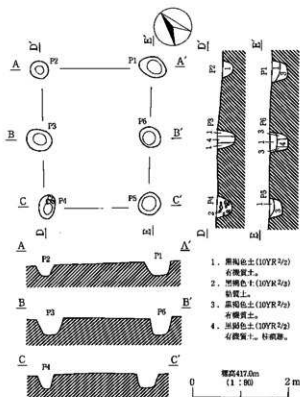
5) F5号掘立柱建物址

遺構 (第99図)

検出位置 E_え3・4、E_お3・4グリッド。重複関係 H23号住居址を切る。平面形態 1間×2間の側柱式で規模は桁行3m、梁行2.22~2.4mの矩形的プランを呈する。主軸方位はN-38°-Eを指す。覆土 黒褐色の粘質土や有機質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は楕円形を呈していた。P1は深さ27cm、P2は深さ23cm、P3は深さ33cm、P4は深さ30cmを測る。P5は深さ29cm、P6は深さ37cmを測る。

遺物 土師器の甕が出土しているが図示できる遺物はなかった。

時期 本建物址の所属時期は、重複関係から古墳時代後期後半以降と思われる。



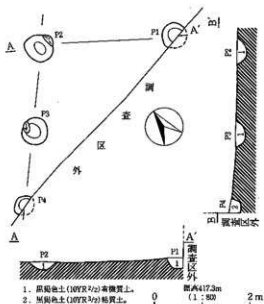
第99図 F5号掘立柱建物址実測図

6) F6号掘立柱建物址

遺構 (第100図)

検出位置 Eう5、Eえ4・5、Eお5グリッド。重複関係 H22号住居址を一部破壊する。平面形態 一部のみの検出であるため、詳細は不明であるが、1間×2間以上の側柱式と思われる。調査区内での規模は桁行3.4m、梁行2.88mの矩形のプランを呈する。主軸方位は不明である。覆土 黒褐色の粘質土や有機質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は楕円形を呈していた。P1は深さ22cm、P2は深さ12cm、P3は深さ18cm、P4は深さ15cmを測る。遺物 遺物は出土しなかった。

時期 本建物址の所属時期はH22号住居址より新しいと考えられるため、奈良時代以降と思われる。

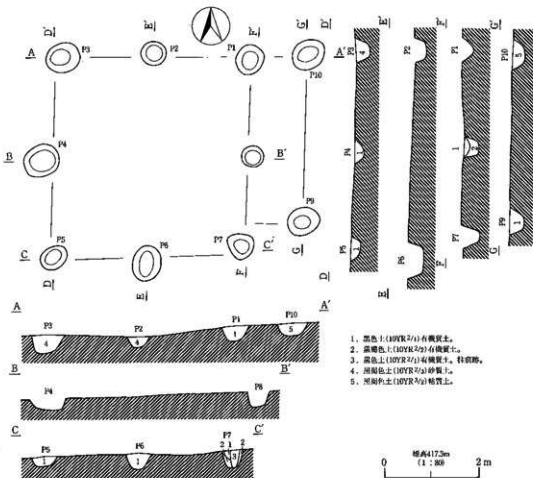


第100図 F6号掘立柱建物址実測図

7) F7号掘立柱建物址

遺構 (第101図)

検出位置 Eい3、Eう3・4、Eえ3・4グリッド。重複関係 なし。平面形態 2間×2間の側柱式でP9・10が庇になると思われる。規模は桁行4.2m、梁行4.1~4.2mの正方形のプランを呈する。主軸方位はN-2°-Eを指す。覆土 黒褐色の粘質土など被覆されていた。ピットピットの掘り方は楕円形を呈する。P1は深さ33cm、P2は深さ23cm、P3は深さ37cm、P4は深さ23cm、P5は深さ17cm、P6は深さ33cmを測る。P7は深さ37cm、P8は深さ32cm、P9は深さ32cm、P10は深さ27cmを測る。



第101図 F7号掘立柱建物址実測図

遺物 (第115図)

土師器の坏・甕や須恵器の坏が出土しており、須恵器の坏が図示できた。

時期 本建物址の所属時期は奈良時代以降と思われる。

8) F8号掘立柱建物址

遺構 (第102図)

検出位置 Yこ2・3・4, E

あ3・4グリッド。重複関係

Y4号住居址を切る。

平面形態 西列のピット

は検出されなかった

けれど、2間×2間の個

柱式を呈すものと思

われる。規模は桁行5.6~

5.88m、梁行4.84~5.06m

の矩形のプランを呈す

る。主軸方位はN-

10°-Wを測る。覆土

にぶい黄褐色、黒褐色、暗褐色の粘質土、砂質土に

被覆されていた。ピット

ピットの掘

り方は楕円形、円形を呈

していた。P1は深さ15cm、

P2は深さ17cm、P3は深さ

17cm、P4は深さ21cm、

P5は深さ18

cm、P6は深さ28cm、

P7は深さ13cm、P8

は深さ33cmを測る。

遺物 遺物は出土しな

かった。

時期 本建物址の所属

時期は出土遺物や重

複関係がないことから

不明である。

9) F9号掘立柱建物址

遺構 (第103図)

検出位置 Dい6・7、Dう6・7

グリッド。重複関係

なし。平面形態

1間×2間の側柱式を

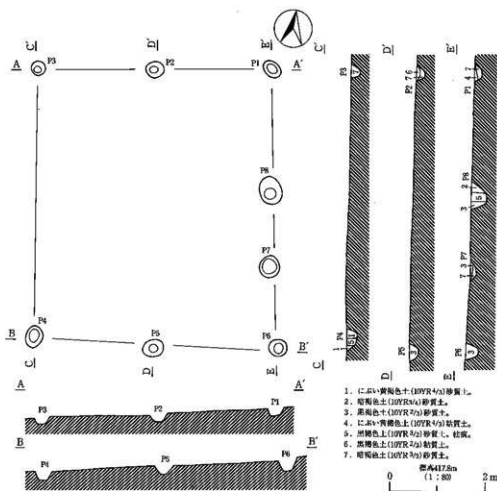
呈すものと思

われる。規模は桁行3.2~

3.4m、梁行

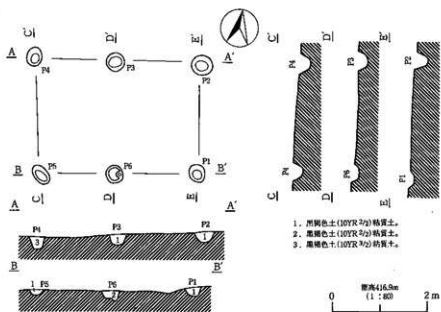
2.26~2.44mの矩形の

プランを呈す



第102図 F8号掘立柱建物址実測図

は深さ33cmを測る。覆土にぶい黄褐色、黒褐色、暗褐色の粘質土、砂質土に被覆されていた。ピットピットの掘り方は楕円形、円形を呈していた。P1は深さ15cm、P2は深さ17cm、P3は深さ17cm、P4は深さ21cm、P5は深さ18cm、P6は深さ28cm、P7は深さ13cm、P8



第103図 F9号掘立柱建物址実測図

る。主軸方位はN-82°-Eを指す。覆土 黒褐色の粘質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は楕円形や円形を呈する。P1は深さ20cm、P2は深さ23cm、P3は深さ21cm、P4は深さ29cm、P5は深さ10cm、P6は深さ20cmを測る。

遺物 土師器の甕が出土したが、図示できなかった。

時期 本建物址の所属時期は、時期の認められる出土遺物もないため不明である。

10) F10号掘立柱建物址

遺構 (第104図)

検出位置 Dか10、Dき10、Eか1、Eき1グリッド。重複関係 F11・12号掘立柱建物址を切る。F13・14・15・16号掘立柱建物址と重複関係にあるが、ピット同士の切り合いが確認できなかったため、新旧関係については不明である。平面形態 1間×2間以上の竪柱式を呈すものと思われる。規模は桁行3.6m、梁行3.2mの矩形のプランを呈すものと思われる。主軸方位はN-100°-Wを測る。覆土 黒褐色、暗褐色の砂質土、有機質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は楕円形を呈していた。P1は深さ23cm、P2は深さ14cm、P3は深さ17cm、P4は深さ26cm、P5は深さ16cmを測る。

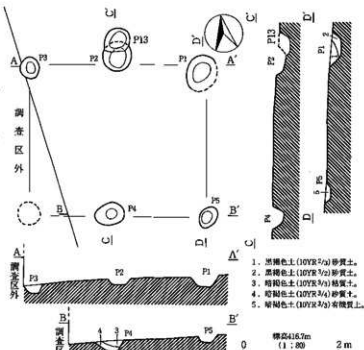
遺物 土師器の武蔵型の甕が出土したが、細片のため図示できなかった。

時期 本建物址の所属時期は武蔵型の甕の出土により、奈良~平安時代と思われる。

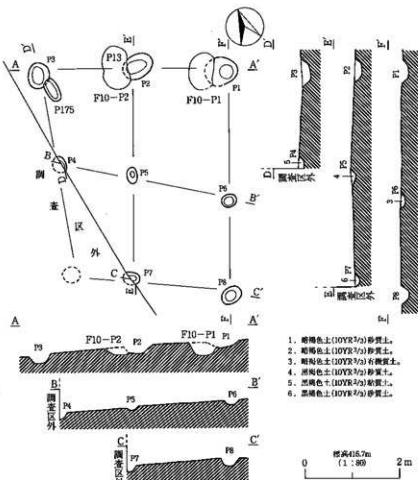
11) F11号掘立柱建物址

遺構 (第105図)

検出位置 Dか10、Dき10、Eか1、Eき1・2グリッド。重複関係 F10号掘立柱建物址に切られる。F12・13・14・15・16号掘立柱建物址と重複関係にあるが、ピット同士の切り合いが確認できな



第104図 F10号掘立柱建物址実測図



第105図 F11号掘立柱建物址実測図

かったため、新旧関係については不明である。平面形態 西側が調査区外に伸びるため詳細は不明であるが、2間×2間の総柱式を呈するものと思われる。規模は桁行4.72m、梁行4mの矩形のプランを呈するものと思われる。主軸方位はN-23°-Eを測る。覆土 黒褐色、暗褐色の砂質土、有機質土、粘質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は楕円形を呈していた。P1は深さ18cm、P2は深さ15cm、P3は深さ20cm、P4は深さ14cm、P5は深さ12cm、P6は深さ9cm、P7は深さ15cm、P8は深さ14cmを測る。

遺物 土師器の甕や須恵器の甕が出土したが、細片のため図示できなかった。

時期 本建物址の所属時期は出土遺物から奈良～平安時代と思われる。

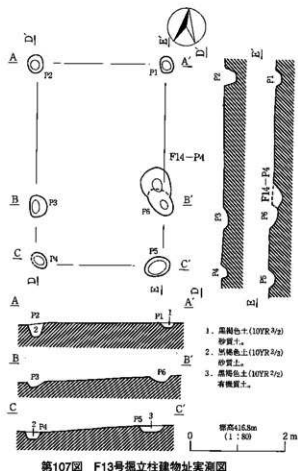
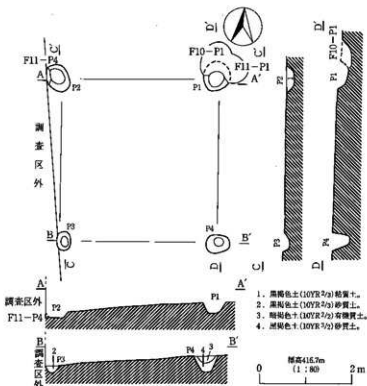
12) F12号掘立柱建物址

遺構 (第106図)

検出位置 Eか1、Eき1グリッド。重複関係 F10・11号掘立柱建物址に切られる。F13・14・15・16号掘立柱建物址と重複関係にあるが、ピット同士の切り合いが確認できなかったため、新旧関係については不明である。平面形態 西側が調査区外に伸びるため詳細は不明であるが、1間×1間の側柱式を呈するものと思われる。規模は桁行3.4~3.44m、梁行3.28~3.42mの正方形のプランを呈するものと思われる。主軸方位はN-5°-Wを測る。覆土 黒褐色、暗褐色の砂質土、有機質土、粘質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は楕円形を呈していた。P1は深さ22cm、P2は深さ10cm、P3は深さ14cm、P4は深さ37cmを測る。

遺物 土師器の甕が出土したが細片のため図示できなかった。

時期 本建物址の所属時期は出土遺物から古墳時代～平安時代と思われる。



13) F3号掘立柱建物址

遺構 (第107図)

検出位置 E1・2、Eき1グリッド。重複関係 F16号掘立柱建物址を切る。F10・11・12・15号掘立柱建物址と重複関係にあるが、ピット同士の切り合いが確認できなかったため、新旧関係については不明である。F14号掘立柱建物址とP6が重複関係にあったが、新旧関係については把握できなかった。平面形態 1間×2間の側柱式を呈すものと思われる。規模は桁行4.2m、梁行2.6～2.8mの矩形のプランを呈すものと思われる。主軸方位はN-7°-Wを測る。覆土 黒褐色の砂質土、有機質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は楕円形を呈していた。P1は深さ9cm、P2は深さ27cm、P3は深さ11cm、P4は深さ13cm、P5は深さ13cm、P6は深さ12cmを測る。

遺物 土師器の壺が出土したが、細片のため図示できなかった。

時期 本建物址の所属時期は、出土遺物から古墳時代～平安時代と思われる。

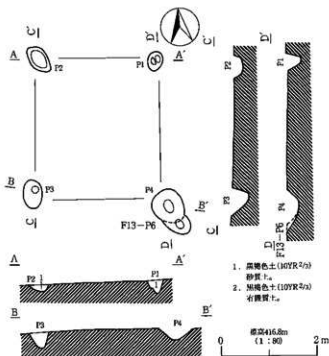
14) F14号掘立柱建物址

遺構 (第108図)

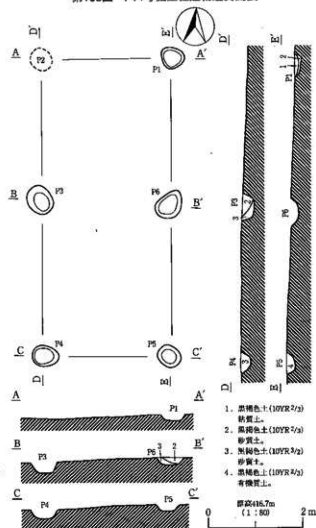
検出位置 Eか1・2、Eき1グリッド。重複関係 F10・11・12・15・16号掘立柱建物址と重複関係にあるが、ピット同士の切り合いが確認できなかったため、新旧関係については不明である。F13号掘立柱建物址とP4が重複関係にあったが、新旧関係については把握できなかった。平面形態 1間×1間の側柱式を呈すものと思われる。規模は桁行2.6～3.16m、梁行2.46～2.8mの矩形のプランを呈する。主軸方位はN-5°-Eを指す。覆土 黒褐色の砂質土、有機質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は楕円形を呈する。P1はテラスを有し、深さ31cm、P2は深さ14cm、P3は深さ35cm、P4は深さ23cmを測る。

遺物 土師器の壺が出土しているが、図示できなかった。

時期 本建物址の所属時期は、出土遺物から古墳時代～平安時代と思われる。



第108図 F14号掘立柱建物址実測図



第109図 F15号掘立柱建物址実測図

15) F15号掘立柱建物址

遺構 (第109図)

検出位置 Dか10、Dき10、Eか1・2、Eき1・2グリッド。重複関係 F18号掘立柱建物址を切る。F10・11・12・13・14・16号掘立柱建物址と重複関係にあるが、ピット同士の切り合いが確認できなかったため、新旧関係については不明である。F14号掘立柱建物址とP6が重複関係にあったが、新旧関係については把握できなかった。平面形態 西側柱列の北側に、浅い柱穴が存在したものと考えP2を推定した。1間×2間の側柱式を呈すものと思われる。規模は桁行6.28m、梁行2.62mの矩形のプランを呈するものと思われる。主軸方位はN-4°-Wを測る。覆土 黒褐色の砂質土、粘質土、有機質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は楕円形を呈していた。P1は深さ13cm、P3は深さ21cm、P4は深さ20cm、P5は深さ15cm、P6は深さ15cmを測る。

遺物 土師器の甕が出土したが、細片のため図示できなかった。

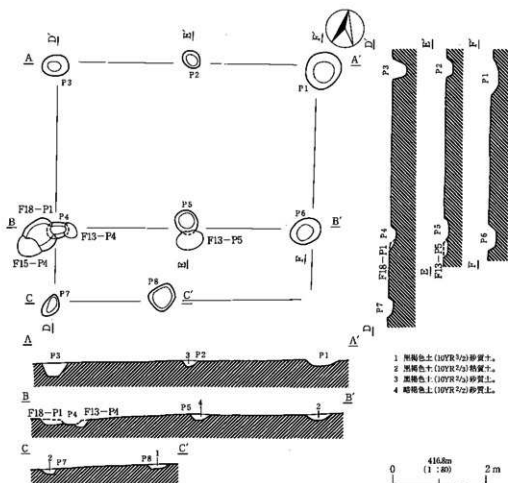
時期 本建物址の所属時期は、出土遺物から古墳時代～平安時代と思われる。

16) F16号掘立柱建物址

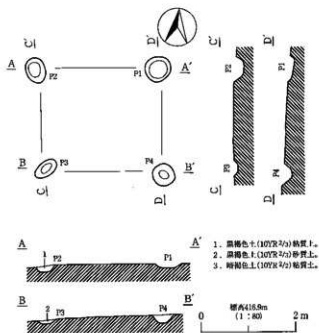
遺構 (第110図)

検出位置 Eお1・2、Eか1・2、Eき1・2グリッド。重複関係 F13号掘立柱建物址に切られる。F10・11・12・14・15・17号掘立柱建物址と重複関係にあるが、ピット同士の切り合いが確認できなかったため、新旧関係については不明である。

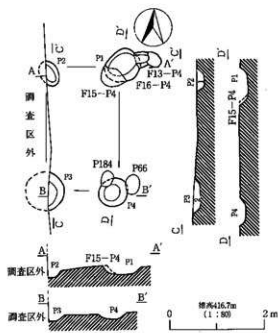
F18号掘立柱建物址とP4が重複しているが、新旧関係は把握できなかった。平面形態 1間×2間の側柱式に庇がつくものと思われる。規模は桁行5.4~5.8m、梁行3.4mの矩形のプランを呈する。主軸方位はN-82°-Eを指す。覆土 黒褐色、暗褐色の砂質土、粘質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は楕円形を呈する。P1は深さ14cm、P2は深さ13cm、P3は深さ29cm、P4は深さ10cm、P5は深さ13cm、P6は深さ17cm、P7は深さ10cm、P8は深さ6cmを測る。



第110図 F16号掘立柱建物址実測図



第111図 F17号掘立柱建物址実測図



第112図 F18号掘立柱建物址実測図

遺物 出土遺物はなかった。

時期 本建物址の所属時期は、重複関係や出土遺物がないが古墳時代～平安時代と思われる。

17) F17号掘立柱建物址

遺構 (第111図)

検出位置 Eえ1・2、Eお1・2グリッド。重複関係 F16号掘立柱建物址と重複関係があるが、ピット同士の切り合いが確認できなかったため、新旧関係については不明である。平面形態 1間×1間の隅柱式を呈すものと思われる。規模は桁行2.52～2.64m、梁行2.1～2.3mの矩形的プランを呈するものと思われる。主軸方位はN-7°-Wを測る。覆土 黒褐色・暗褐色土の砂質土、粘質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は楕円形を呈していた。P1は深さ7cm、P2は深さ14cm、P3は深さ9cm、P4は深さ21cmを測る。

遺物 出土遺物はなかった。

時期 本建物址の所属時期は、出土遺物がなく不明である。

18) F18号掘立柱建物址

遺構 (第112図)

検出位置 Eか2・3、Eき2・3グリッド。重複関係 F15号掘立柱建物址に切られる。F16号掘立柱建物址とP1が重複関係にあったが、新旧関係については把握できなかった。西側が調査区域外となってしまうため、詳細は不明である。平面形態 1間×1間以上の隅柱式と思われる。規模は東側列2.8mで、矩形的プランを呈するものと思われる。主軸方位はN-6°-Wを指すものと思われる。覆土 黒褐色、暗褐色の砂質土、粘質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は楕円形を呈する。P1は深さ16cm、P2は深さ14cm、P3は深さ16cm、P4は深さ12cmを測る。

遺物 土師器の甕が出土しているが、図示できるものはなかった。

時期 本建物址の所属時期は、出土遺物から古墳時代～平安時代と思われる。

19) F19号掘立柱建物址

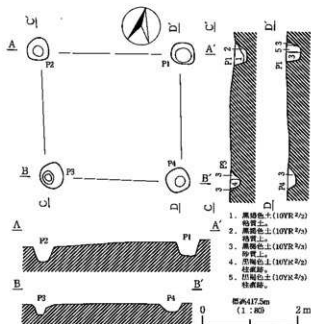
遺構 (第113図)

検出位置 DⅡ6・7、DⅣ6・7グリッド。重複関係 なし。
 平面形態 1間×1間の側柱式を呈すものと思われる。規模は桁行2.76～3m、梁行2.6～2.64mの矩形のプランを呈するものと思われる。主軸方位はN-72°-Wを測る。覆土 黒褐色・暗褐色土の砂質土、粘質土に被覆されていた。P1・3には柱痕跡が確認された。ピット ピットの掘り方は楕円形を呈する。P1は深さ35cm、P2は深さ29cm、P3は深さ22cm、P4は深さ15cmを測る。

遺物 (第115図)

底部調整が回転糸切り未調整の須恵器の坏が出土した。

時期 本建物址の所属時期は、出土遺物から奈良時代後半以降と思われる。



第113図 F19号掘立柱建物址実測図

20) F20号掘立柱建物址

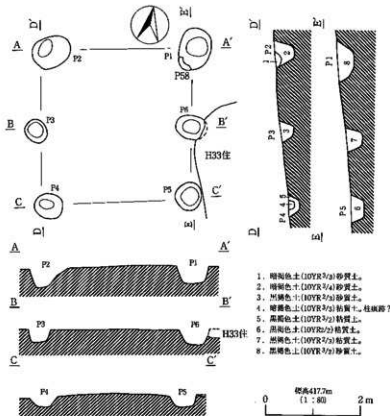
遺構 (第114図)

検出位置 Wか9・10、Wき9・10グリッド。重複関係 P6がH33号住居址に切られ、一部立ち上がり部分が破壊されている。平面形態 1間×2間の側柱式と思われる。規模は桁行3.2～3.24m、梁行3.2mの正方形のプランを呈するものと思われる。主軸方位はN-8°-Wを指す。覆土 黒褐色、暗褐色の砂質土、粘質土に被覆されていた。P4では柱痕跡が確認された。ピット ピットの掘り方は楕円形を呈していた。P1は深さ20cm、P2は深さ23cm、P3は深さ21cm、P4は深さ19cm、P5は深さ25cm、P6は深さ30cmを測る。

遺物 (第115図)

底部の調整が回転糸切り未調整の須恵器の坏が出土した。

時期 本建物址の所属時期は、重複関係から平安時代前半(8世紀後半～9世紀前半)以前と思われる。



第114図 F20号掘立柱建物址実測図



第115図 掘立柱建物址出土土器実測図

第5節 土坑址

1) D2号土坑址

遺構 (第116図)

検出位置 Rえ9・10グリッド。

重複関係 H18号住居址に切られ、西側が破壊されている。平面形態 重複関係により破壊されているため定かではないが、楕円形を呈するものと思われる。底面は平坦で断面形態は皿状を呈する。主軸方位は不明である。

覆土 粘質土に被覆されていた。

時期 本土坑址の所属時期については、出土遺物はなかったが、重複関係から古墳時代後期後半～奈良時代の前半(7世紀前半～8世紀前半)以前と思われる。

2) D3号土坑址

遺構 (第116図)

検出位置 Dい9、Dう9グリッド。

重複関係 自然流路に切られ、南側が破壊されている。P136と切り合うようであったが、新旧関係が不明となつてしまった。平面形態 重複関係により破壊されているため定かではないが、楕円形を呈するものと思われる。底面には凹凸が観察できた。主軸方位は不明である。覆土 粘質土に被覆されていた。

時期 出土遺物がなく本土坑址の所属時期については不明である。

3) D4号土坑址

遺構 (第116図)

検出位置 Eえ1、Eお1グリッド。

重複関係 P161に切られている。平面形態 円形を呈し、テラスを有する。底面は平坦で断面形態は皿状を呈する。長軸88cm、短軸84cmを測り、主軸方位はN-8°-Eを指す。覆土 粘質土に被覆されていた。

時期 本土坑址の所属時期は、出土遺物がなく不明である。

4) D5号土坑址

遺構 (第116図)

検出位置 Xき10、Yき1グリッド。

重複関係 なし。平面形態 方形を呈し、底面はやや平坦で断面形態は皿状を呈する。長軸1.8m、短軸1.75mを測り、主軸方位はN-16°-Eを指す。覆土 黒褐色の砂質土に被覆されていた。

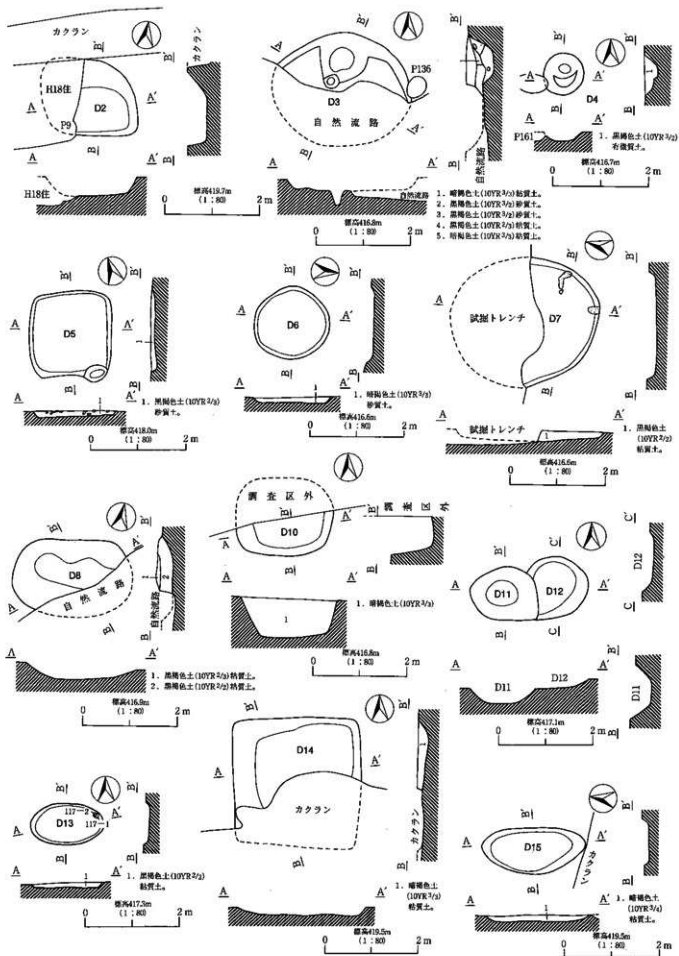
時期 出土遺物がなく本土坑址の所属時期については不明である。

5) D6号土坑址

遺構 (第116図)

検出位置 Xこ5、Dあ5グリッド。

重複関係 なし。平面形態 楕円形を呈するものと思われる。底面は平坦で断面形態は皿状を呈する。長軸1.6m、



第116図 D2~D8・D10~D15号土坑実測図

短軸1.55mを測り、主軸方位はN-9°-Eを指す。覆土 暗褐色の砂質土に被覆されていた。

時期 出土遺物がなく本土坑址の所属時期については不明である。

6) D7号土坑址

遺構 (第116図)

検出位置 X<7・8グリッド。

重複関係 試掘調査時の試掘トレンチによって破壊してしまったため、詳細に欠けるが切り合いはないものと思われる。平面形態 楕円形を呈するものと思われる。底面は平坦で断面形態は皿状を呈する。長軸と短軸の主軸方位は不明である。覆土 粘質土に被覆されていた。

時期 出土遺物がなく本土坑址の所属時期については不明である。

7) D8号土坑址

遺構 (第116図)

検出位置 X<6・7グリッド。

重複関係 自然流路に切られ、南東側を破壊される。平面形態 楕円形を呈するものと思われる。底面は平坦で断面形態は皿状を呈する。長軸・短軸、主軸方位は不明である。覆土 黒褐色の粘質土に被覆されていた。

時期 本土坑址の所属時期は、出土遺物がなく不明である。

8) D10号土坑址

遺構 (第116図)

検出位置 Dあ5グリッド。

重複関係 北側が調査区域外に続くため詳細は不明である。平面形態 隅丸方形を呈するものと思われる。覆土 暗褐色の粘質土に被覆されていた。

時期 出土遺物がなく本土坑址の所属時期については不明である。

9) D11号土坑址

遺構 (第116図)

検出位置 X<5、Xけ5グリッド。

重複関係 D12号土坑址と切り合うが、新旧関係については不明である。平面形態 楕円形を呈するものと思われる。底面は平坦で断面形態は鍋底状を呈する。長軸、短軸、主軸方位は不明である。覆土 粘質土に被覆されていた。

時期 出土遺物がなく本土坑址の所属時期については不明である。

10) D12号土坑址

遺構 (第116図)

検出位置 X<5、Xけ5グリッド。

重複関係 D11号土坑址と切り合うが、新旧関係については不明である。平面形態 楕円形を呈するものと思われる。底面は平坦で断面形態は皿状を呈する。長軸・短軸及び主軸方位は不明である。覆土 粘質土に被覆され

ていた。

時期 本土坑址の所属時期は、出土遺物がなく不明である。

11) D13号土坑址

遺構 (第116図)

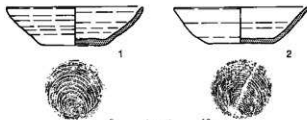
検出位置 Wお10、Wか10グリッド。

重複関係 なし。平面形態 長楕円形を呈し、底面は平坦で断面形態は皿状を呈する。長軸1.57m短軸0.9mを測り、主軸方位はN-90°-Eを指す。覆土 粘質土に被覆されていた。

遺物 (第117図)

本址からは須恵器の坏が出土し、2点が図示できた。1は底部調整が回転糸切り未調整の須恵器坏である。2は1と同様であるが、焼成が悪く、色調は明黄褐色を呈しているものである。

時期 出土遺物から平安時代(8世紀後半～9世紀前半)と思われる。



第117図 D13号土坑址出土土器実測図

12) D4号土坑址

遺構 (第116図)

検出位置 Tけ8グリッド。

重複関係 なし。平面形態 撓乱に南側を破壊されるため、不明であるが方形を呈するものと思われる。底面は概ね平坦で、断面形態は皿状を呈する。長軸・短軸及び主軸方位は不明である。覆土 暗褐色の粘質土に被覆されていた。

時期 本土坑址の所属時期は、出土遺物がなく不明である。

15) D15号土坑址

遺構 (第116図)

検出位置 Tく8グリッド。

重複関係 なし。平面形態 長楕円形を呈し、底面は平坦で断面形態は皿状を呈する。長軸2.2m、短軸1mを測り、主軸方位はN-10°-Wを指す。覆土 暗褐色の粘質土に被覆されていた。

時期 本土坑址の所属時期は、出土遺物がなく不明である。

第6節 溝状遺構

1) M2号溝状遺構

遺構 (第118図)

検出位置 Aい2・3・4・5、Aう2・3、Aお5、Eえ10、Eお10グリッド。重複関係 H4号住居址、H9号住居址を破壊する。形状 幅0.3～1.6m、深さ11～43cmを測る。覆土は明褐色の粘質土であった。断面形状はU字状を呈していた。検出状況では南側が浅く北側が深い状態で検出され、底面レベルから北に流れていたことが予想できる。北側が調査区域外となるため、詳細は不明である。

時期 本址の所属時期は出土遺物がないが、重複関係から奈良時代以降と思われる。

2) M3号溝状遺構

遺構 (第118図)

検出位置 Rか8・9、Rき8・9、Rく8・9、Rけ8・9、Rこ9グリッド。重複関係 なし。形状 幅0.3～0.6m、深さ5～18.5cm、検出長15.5mを測る。覆土は明褐色の粘質土であった。断面形状は皿状を呈していた。検出状況では南側が浅く南側が深い状態で検出され、底面レベルから東から西に流れていたことが予想できる。

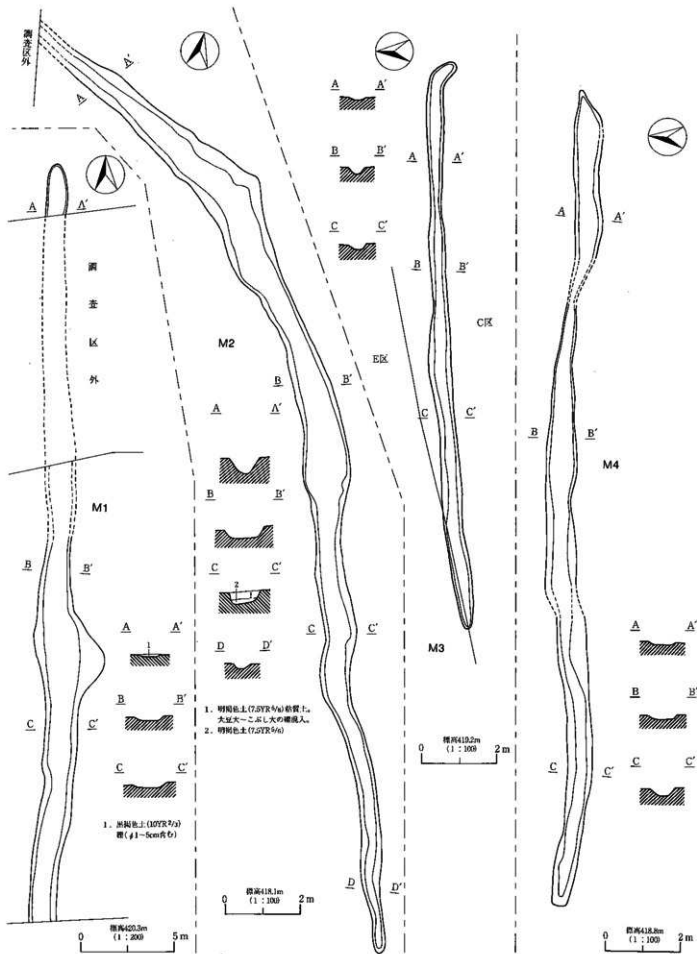
時期 本址の所属時期は出土遺物がないため不明である。

3) M4号溝状遺構

遺構 (第118図)

検出位置 Rか8、Rき8、Rく8、Rけ8、Rこ8、Wあ8グリッド。重複関係 なし。形状 幅0.25～0.8m、深さ4～21.5cm、検出長21.6mを測る。覆土は明褐色の粘質土であった。断面形状は皿状を呈していた。検出状況では南側が浅く南側が深い状態で検出され、底面レベルから東から西に流れていたことが予想できる。

時期 本址の所属時期は出土遺物がないため不明である。



第7節 ビット及び遺構外等の出土遺物

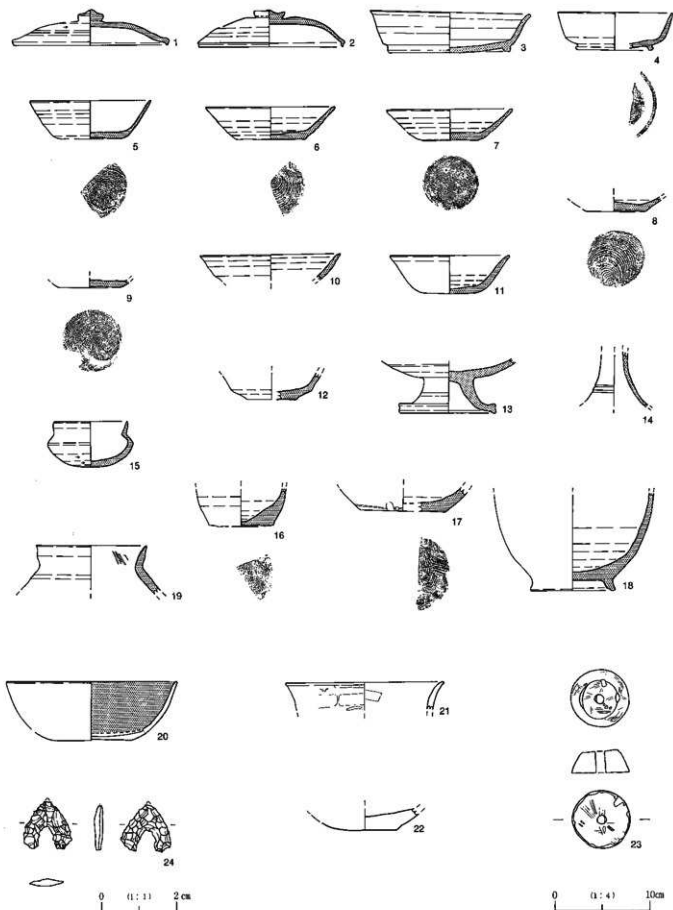
本調査にて出土した遺構外のグリッド遺物や竪穴住居址から出土した混入遺物には、石畿、弥生土器、土師器、須恵器が存在していた。第119図には図示できた土師器や須恵器などを第119図に掲載した。

1・2は須恵器の壺で、外面天井部に回転ヘラケズリの調整が見られる。3・4が須恵器の高台付坏である。3は口径が大きく、底部が高台よりも下がる器形を呈し、底部の調整は回転ヘラケズリ末調整である。5～12は須恵器の坏である。5～9の底部の調整は回転糸切り未調整である。13は須恵器高壺である。14は焼成の良い須恵器の高坏の脚部で、裾部が欠損している。2状の沈線が看取され、2方あるいは3方の透かし窓がつくものと思われる。古墳時代の後期の遺物と思われる。15は須恵器の壺の完形である、内外面の一部には自然釉の付着が看取される。底面は丸底を呈している。16は須恵器壺の底部で、底部外面に「×？」のヘラ描きが確認できる。17は須恵器壺の底部と思われる、底部外面にはハケ状工具による調整が見られる。18は須恵器長頸壺の底部から胴部で、高台部分が外側につまみ出されたような形状をしている。19は土師器の坏で、内面に黒色処理が施されている。20は土師器の甕で、内外面にヘラナデ調整が施されている。21は土師器甕の底部である。23は石製の紡錘車で、石質は蛇紋岩かと思われる。P229の覆土中からの出土である。24は黒曜石製の石畿で先端が欠損しているもので、無茎円脚畿と思われる。H21号住居址のカマド掘り方からの出土である。

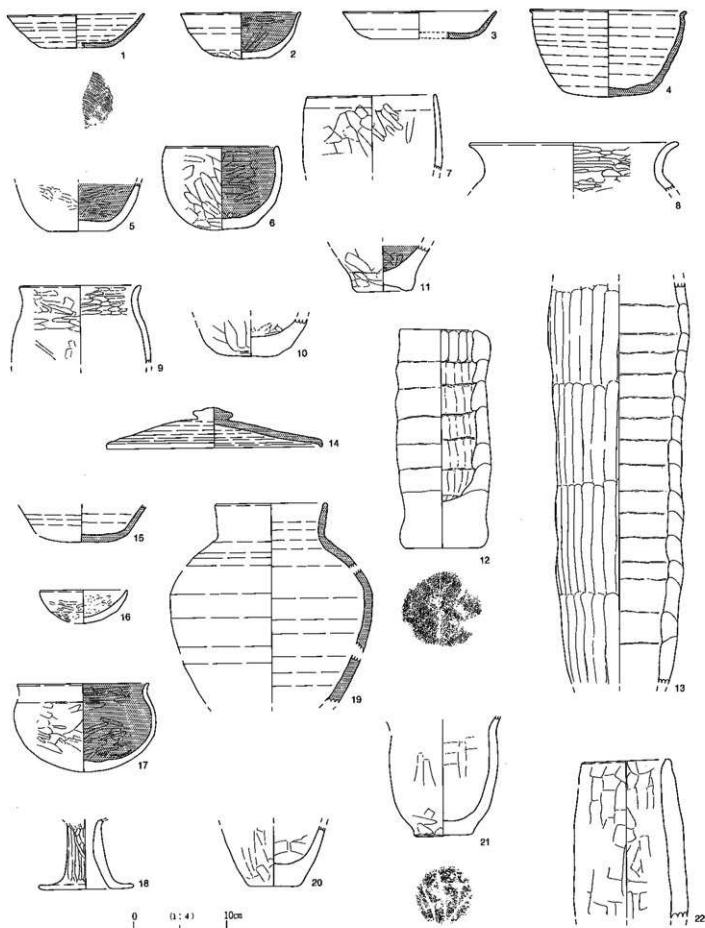
第8節 試掘調査出土遺物

ここでは平成3年度、本調査に先立って実施された試掘調査時に、出土した土器を掲載することとしたい。試掘調査では竪穴住居址が2棟と溝状遺構が検出された。試掘調査ではあったが、H2号住居址から多くの出土遺物があり、これらを第120図に掲載した。

1は須恵器の坏で、底部の調整は回転糸切り未調整である。2は土師器の黒色土器で、底部にヘラケズリ調整が認められる。以上は試掘調査時のH1号住居址からの出土である。3は須恵器の坏で、底部調整が回転ヘラケズリ末調整と思われる。H9号住居址からの出土である。4は須恵器の鉢で、口縁端部が外反する器形を呈する。底部調整は切り離し後ヘラナデ調整が施される。5は土師器の黒色土器で、内外面ヘラミガキが施されている。6は土師器の鉢で、内面黒色処理が施され、内外面にはヘラナデ調整が施されている。以上はグリッド出土土器である。7は土師器の鉢である。内外面にはヘラナデ調整が施されている。8は胴部球形を呈する器形と思われる土師器の甕である。9は小型の土師器甕である。内外面にヘラミガキが施されている。10・11は土師器甕の底部である。12・13は土師質の円筒形土製品である。12は当遺跡で多く見られる土製品の中で最も短く、23.5cmしか器高がないものである。底部の器厚は約4.8cmを測るなど、厚いものである。内外面には輪積み痕が観察される。13は外面縦方向にヘラナデが施されている。14は須恵器の蓋で、重みがある。15は須恵器の坏で、底部が回転ヘラケズリによるものと思われる。16は土師器の坏で、内外面ヘラミガキが施されている。17は土師器の鉢で、内面には黒色処理が施されている。18は土師器高坏の脚部で、縦位の雑なヘラミガキが施されている。19は須恵器の短頸壺で頸部から口縁部にかけて、まっすぐに立ち上がる器形である。20・21は土師器の小型の甕である。21の底部には木葉痕が残っている。22は土師質の円筒形土製品で、縦方向のヘラケズリが施される。



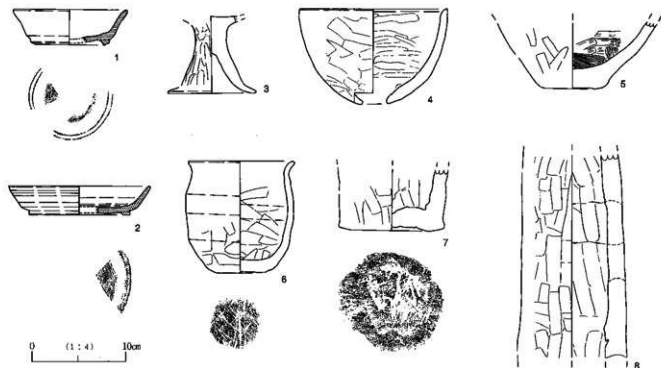
第119図 ビット及び遺構外等の出土遺物実測図



第120図 試掘調査出土遺物 (1)

第121図は本調査によって調査したM1号溝状遺構と同一と思われる溝状遺構の出土物を掲載した。図示できたものには須恵器の高台付杯や土師器の高坏、甌、甕、円筒形土製品がある。

1・2は須恵器の高台付杯で、ロクロ横ナデが施されている。3は土師器高坏の脚部で、外面ヘラケズリが施される。4は単孔式の土師器の甌で、内面には横方向のヘラミガキが施されている。5は土師器甕の底部で、内面にはハケ目が残っている。球闘状の甕と思われる。6は小型の甕で、内外面にヘラナデ調整が施されている。7・8は土師質の円筒形土製品である。7は底部が穿孔されていないものである。8はL縁部及び底部が欠損しており、状況がわからない胴部のものである。内面に輪積み痕が観察でき、内外面がヘラナデ調整となっている。



第121図 試掘調査出土遺物（2）

第V章 総括

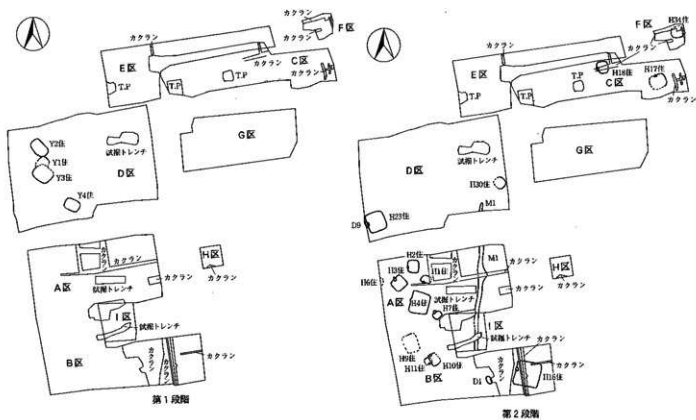
第1節 宮上遺跡の出土土器と遺構について

宮上遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの発掘調査の結果、34棟の竪穴住居址が検出された。これらの住居址は弥生時代～平安時代にかけての出土遺物により、おおよその所属時期が与えられた。ここでは出土した土器及び検出遺構から大まかな段階を設定し、各段階について概観していきたい。

(1) 第1段階・・・弥生時代中期末～後期後半

宮上遺跡の集落が形成される段階に位置づけられる。弥生時代中期末から後期後半の出土遺物があり、これらの土器群が対象となる。検出遺構ではY1～4号住居址が本段階に当たり、重複関係を見るとY1号住居址がY2・3号住居址に切られている。出土遺物からY1号住居址には中期末の土器群、Y2・3・4号住居址では後期後半の土器群が見られた。今回の段階設定では2段階の細分が可能であったが、あえて段階設定を行わなかった。

検出位置では、D区の中央西側にまともって住居址の検出が見られ、他の調査区では住居址が検出されなかった。出土遺物ではD区以外には、A区からの出土が見られることから、A・D区及びその西側に集落が展開している可能性が指摘できよう。また、遺構プランについては、すべての住居址が隅丸長方形のプランを呈しており、炉



第122図 宮上遺跡集落変遷図(1)

についてはY 2・4号住居址では地床炉が支柱穴間に位置していた。それ以外の住居址については検出されなかったものや重複関係によって破壊されてしまったものがあり、不明などが多い。

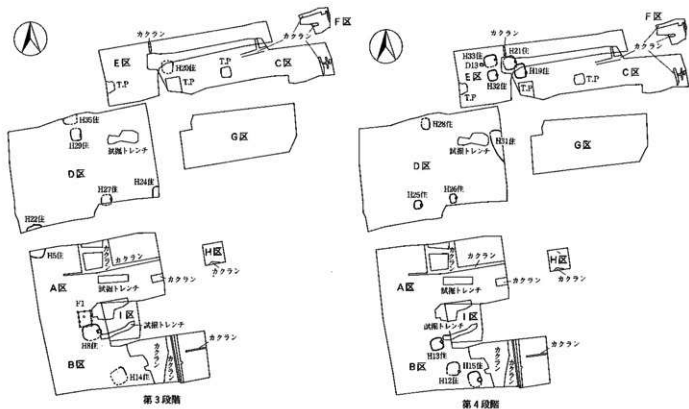
各住居址の時期差については、Y 1号住居址のみ長軸方位が異なっている状況も看取でき、土器様相だけでなく遺構プランなどからも差異が指摘できる。

(2) 第2段階・・・古墳時代後期後半

宮上遺跡の中で、円筒形土製品などの出土から特徴的な遺物をもつ段階にあたる。対象となる住居址はH 1・2・3・4・6・7・9・10・11・16・17・18・23・30・34号住居址であり、実年代的には6世紀末から8世紀初頭の時期にあたる住居址と出土土器群である。その中でもH 3・16・17・18・23・30号住居址の段階（本段階の中で、さらに細分が可能ではあるが今回は細分していない。）とH 9・10号住居址の段階と細分が可能である。掘立柱建物址ではF 1号掘立柱建物址が該当すると思われる。

前半段階の出土遺物では、H30号住居址以外の住居址から土師質の円筒形土製品（註1）が出土している点が最も注意すべき点であろう。また、カマドの構築される位置も北あるいは西側に見られ、出土した円筒形土製品がカマドの天井部あるいは、袖部構築材に使用されていたと見られる点も共通している。また、偶然かもしれないが円筒形土製品が出土したカマドの遺存状況は極めて良いこと、H 3号住居址、H23号住居址に見られるように出土した土器量が多いことも今後留意する課題の一つであろう。

本段階の住居址の床面積では、H16号住居址のように60㎡を越す非常に大型の住居址やH 4・23号住居址のような大型の住居址の存在が本段階の特徴でもある。またこの住居址群は円筒形土製品をカマドの構築材に使用す



第123図 宮上遺跡集落変遷図(2)

る住居址にあたり、円筒形土製品を有する住居址群の特異性の表れかもしれない。

該期の集落の広がりについては、今回の調査区の南に隣接している北浦遺跡からも住居址が検出されているため、南側に同集落が続いていることが指摘できよう。(註2)

第2段階の出土遺物から見られる特徴としては、土師器長胴甕の胎土に非常に多くの雲母粒子が混入しているといったことがあげられる。

(3) 第3段階・・・奈良時代～平安時代初頭

古墳時代後期以降の集落が継続した段階。住居址ではH5・8・14・20・22・24・27・29・35号住居址が該当すると思われる段階。掘立柱建物址ではF20号掘立柱建物址が本段階にあたると思われる。

本段階の遺物については、明確なセット関係を見出せる住居址が検出されていないため、不明な要素が多い。遺構についても完掘された住居址が少なく、不明な部分が多いわけではあるけれども、カマドの構築される位置は、北側あるいは東側となっており、新たに東方向にカマドが造られるようになった段階といえる。カマドの遺存状況については破壊を受けたものが多く、悪い状態であった。住居址の床面積については、H8号住居址の28㎡を除外すると、約20㎡の住居址が一般的と見られようか。

(4) 第4段階・・・平安時代初頭以降

宮上遺跡の最終段階。住居址ではH12・13・15・19・21・26・28・32・33号住居址が本段階にあたると思われる。第3段階同様に明確なセット関係を見出せる住居址は少ない。カマドは西側に構築されるようになっており、他の位置に造られたカマドは検出されていない。前段階同様にカマドの遺存状況については悪い状況といえる。住居址の面積については第3段階よりもさらに小型化した傾向が見られる。

第2節 円筒形土製品から見えること

宮上遺跡を特徴づける遺物として古墳時代後期の土師質の円筒形土製品があげられる。この種の土製品が出土する遺跡では、坂城町内では第124図に見られるように隣接する北浦遺跡(註3)、寺浦遺跡(註4)、寺浦遺跡Ⅱ(註5)、北川原遺跡Ⅱ(註6)といった当遺跡を総括する中之条遺跡群内の各遺跡、南条地区の東裏遺跡(註7)、保地遺跡Ⅱ(註8)からの出土もある。長野県内では長野市田中沖遺跡(註9)、田中沖遺跡Ⅱ(註10)、松原遺跡(註11)、松原遺跡Ⅲ(註12)、屋地遺跡(註13)、四ッ屋遺跡保育園地点(註14)、松本市出川南遺跡Ⅳ(註15)、小原遺跡Ⅱ(註16)、宮の上遺跡Ⅱ(註17)、箕輪町中遺跡(註18)、南箕輪村北垣外遺跡(註19)があげられる。県外に目を転じてみると山梨県に分布の中心が見られるようで、山梨県御坂町蛇塚遺跡(註20)、御坂町郷土遺跡(註21)、御坂町二ノ宮遺跡(註22)、一宮町鞍掛遺跡(註23)、石和町松本塚ノ越遺跡(註24)などに見られる。他県では東京都、栃木県、福島県、青森県でも出土が見られている。所属時期は6・7世紀に所属するもの、9世紀に所属するものがあり、形態的には大差ない状況である。6・7世紀代、あるいは9世紀代の円筒形土製品に共通していることは、カマド周辺からの出土例が多いといった点である。最近の研究においても異なった時代に同様の遺物が見られることの意味は依然不明とされており、今後の研究に委ねられているといった状況である。

坂城町内に見られる円筒形土製品は、古墳時代後期に所属するものとしなないものがある。南条地区の東裏遺跡Ⅱ出土例以外は古墳時代後期に所属するものといえる。それらの円筒形土製品は、底部が残存し木葉痕をとどめ



第124図 中之条遺跡群内の円筒形土製品出土遺跡分布図

るもの、木葉痕の見られないもの、底部を意図的に欠損（穿孔）するものの3タイプがあり、概して器壁が脆く、外面に縦位のハケ調整やヘラケズリがなされ、内面には輪積み痕あるいは巻き上げ痕が観察される。

本遺跡で円筒形土製品の出土した遺構は、H3・4・16・17・18・23号住居址、D1号土坑址、試掘調査M1号溝状遺構となる。D1号土坑址、試掘調査時のM1号溝状遺構は住居址のカマドからの廃棄後のものであると想定し、これを除外した場合、出土状態から住居址のカマドに使用されていたことが確実に指摘できる例が多い。その中でもカマドの袖部構築材としての使用例はH16・17・23号住居址例があげられ、H23号住居址では天井部構築材として使用されたことが明確に捉えられている。H3・4号住居址ではカマドの燃焼部付近で横位に出土したわけであるが、H23号住居址の出土例から推察して、カマド天井部の構築材として使用されていた円筒形土製品が、落下したのではないかと推察される。

円筒形土製品は長野県内においても出土遺跡が少なく、なじみ少なき土製品といえるわけであるが、本遺跡やその周辺遺跡から多くの出土が見られたことは、宮上遺跡の集落構造を考える上で重要な遺物となると考えられる。よって坂城町の円筒形土製品の出土状況の整理を行い、円筒形土製品についてのまとめを行うこととする。

第124図に中之条地区での古墳時代後期に所属する円筒形土製品の出土した遺跡を示した。遺跡名と住居址名で見ると中之条遺跡群内の宮上遺跡H3・4・16・17・18・23号住居址、D1号土坑址、試掘調査M1号溝状遺構、寺浦遺跡H10・20号住居址、寺浦遺跡ⅡH5号住居址、北川原遺跡ⅡH4号住居址、南条地区の保地遺跡ⅡH4号住居址である。これらの出土をもとに円筒形土製品の形態を分類してみると、下記のように分類できる。

- I-①宮上遺跡試掘H2号住居址出土品のように底部が残存し、木葉痕をとどめるもの。
- I-②宮上遺跡H3・16・23号住居址のように底部が残存し、木葉痕の見られないもの。
- Ⅱ-①宮上遺跡H4号住居址（50-18）、北川原遺跡ⅡH4号住居址出土例のように底部を欠損（穿孔）し、木葉痕をとどめるもの。
- Ⅱ-②宮上遺跡H4号住居址（49-16）、北浦遺跡例のように底部を欠損（穿孔）し、木葉痕をとどめないもの。

以上からIとⅡの2タイプに分類でき、木葉痕の有るのか無いのかの違いで細分すると各タイプを更に細分することも可能となる。しかし、木葉痕の有る無しについてよりも底部を欠損（穿孔）するのか、しないかの違いに注意が必要となつてこよう。円筒形土製品のカマドでの熱効率との関係もあわせ、今後検討したい課題である。また、今回は円筒形土製品の長さなど計測をもとにした詳細な検討も実施できず、円筒形土製品のもつ機能などについて更なる考察はできなかった。今後の課題としたい。

円筒形土製品を構築材として使用するカマドの状況について見ると、次の3タイプが見られる。

- ①宮上遺跡H16・17号住居址、寺浦遺跡Ⅱのカマドのように袖部構築材として縦位に埋設されるもの。
- ②保地遺跡ⅡH4号住居址のように天井部構築材として使用するもの。
- ③宮上遺跡H23号住居址のように袖部構築材と天井部構築材の両方に使用されるもの。

宮上遺跡H23号住居址のカマドについては、①と②の混合型であるため新たなタイプと見られるが、今後の円筒形土製品を使用したカマド構築方法等について検討する良い例となろう。円筒形土製品を袖部構築材と使用する場合も、左右の袖部に使用するのかあるいは、片側の袖部に埋設するのによっても細分は可能である。また、袖

部のどの位置に埋設されるのかといったことも今後再整理してみたいと考えている。

今回このような円筒形土製品についてのまとめをするにあたり、円筒形土製品を使用するカマドの遺存状態が極めて良かった結果に負うところが大きい。円筒形土製品を使用したカマドは、住居址の廃棄時での破壊行為による被害が少なかったのではないのかといった疑問点も新たに浮かび上がってきた。言い換えれば円筒形土製品をカマドに使用した人々は、カマドの破壊行為を意図的に行わなかった場合が多いのではないのかといった推測も可能ではないだろうか。もしそうだと仮定すると、宮上遺跡や隣接する北浦遺跡などを統括する中之条遺跡群の集落構造の解明の最大のヒントとなり得るかもしれない。今後の課題である。

また、円筒形土製品が当初からカマド構築のために製作されたものかどうかといった問題、円筒形土製品に巻き上げ痕や輪積み痕が観察された結果から、円筒形土製品の製作方法なども今後大いに検討されるべきものである。今後の課題としたい。

最後となったが、円筒形土製品の機能については西山克巳氏の論考（註25）があり、円筒形土製品を使用する人々は、派遣されてきた可能性があること、円筒形土製品は長胴甕の出現によって機能が転化され、消滅していったのではないかとする興味深い論考がされている。それらの内容等についても本報告書内では検討することができなかった。今後、詳細な検討を行いたいと思う。

註

- 1 円筒形土製品は一般的には円筒形土器と称されており、「中之条遺跡群宮上遺跡Ⅱ」1993年発行の概報においても「円筒形土器」と使用したが、土器としての機能に疑問があるため「円筒形土器」とはせず、「円筒形土製品」と名称を変更して1996年「中之条遺跡群寺浦遺跡Ⅱ」から使用している。
- 2 森嶋俊『坂城町誌』1981 昭和48年の学校給食センター建設工事に伴って、堅穴住居址が2棟検出され、集落址であることが判明している。
- 3 註2と同じ
- 4 坂城町教育委員会 1996 『豊徳堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡』
- 5 坂城町教育委員会 1996 『中之条遺跡群寺浦遺跡Ⅱ』
- 6 坂城町教育委員会 2001 『中之条遺跡群北川原遺跡Ⅱ』
- 7 坂城町教育委員会 1994 『南条遺跡群東裏遺跡Ⅱ・青木下遺跡』
- 8 平成11年度発掘調査を実施。現在整理中。
- 9 長野市教育委員会 1980 『田中沖遺跡』長野市埋蔵文化財センター飯島氏のご教授による。
- 10 長野市教育委員会 1991 『田中沖遺跡Ⅱ』
- 11 (財)長野市埋蔵文化財センター他 2000 『上伊越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 6』
- 12 長野市教育委員会 1993 『松原遺跡Ⅲ』
- 13 屋地遺跡 長野市埋蔵文化財センター飯島氏のご教授による。
- 14 屋地遺跡 長野市埋蔵文化財センター飯島氏のご教授による。
- 15 松本市教育委員会の直井氏、竹原氏のご教授による。
- 16 松本市教育委員会 1993 『小原遺跡Ⅱ』
- 17 松本市教育委員会の直井氏、竹原氏のご教授による。
- 18 長野県教育委員会 1974 『長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書』上伊那郡箕輪町
- 19 信濃毎日新聞 1992年10月31日付の記事によるとカマド祭祀用遺物としての可能性が指摘されている。

- 20 山梨県教育委員会 1987 『純塚遺跡 純塚無名墳』
 21 御坂町教育委員会 1979 『御坂町の埋蔵文化財「郷土遺跡」』
 22 山梨県教育委員会 1987 『二之宮遺跡』
 23 猪股 喜彦 1982 『丘陵』第9号「一宮町鞍掛遺跡発掘調査報告(1)」
 24 石和町教育委員会 1990 『松本塚ノ越遺跡』
 25 西山 克巳 1996 『長野県考古学会誌』「7世紀代に用いられた円筒形土器」

第3節 煤の付着した須恵器高台付坏について

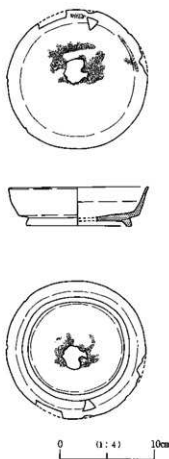
H33号住居址から出土した須恵器には、煤が付着した高台付坏(第93図19)があるため、ここで詳細な説明を加えることとする。第125図に煤の付着状況の実測図を示した。

煤は内外面の中央付近に付着が見られ、土器自体がその影響か欠損してしまっている状態である。われ方を観察すると内面底部側から外面底部側にかけて器壁が曲がっている状態である。観察の結果、内面の方が付着範囲は広範囲にわたるように思える。

更埴条里遺跡・屋代遺跡群の報告書内(註1)で明らかに灯明具とされているのは、口縁部に灯芯状のこびりつきがあるものであるが、灯芯状のこびりつきが見られなくても、特異な煤の付着やこびりつきが認められるものは灯明具として使われた可能性が指摘できるようなのである。よって本遺物についてもこびりつきが内外面に多く見られる点から、灯明具として使用された可能性を指摘しておきたい。

註

- 1 鳥羽英継 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26』
 「第8章第2節 古代の土器 重要遺物のまとめ」



第125図 H33号住居址出土須恵器の煤付着状況

第1表 出土土器観察表

番号	遺構名	種類	器形	法量(m)	残存度	調整	胎土	備考
8-1	Y1号住居址	弥生	高坏	(34.3) —	胴部1/5	内外面 赤色塗彩	10YR7/4にぶい黄褐色	
8-2	〃	〃	台付壺	(10.2) —	口縁部~胴部1/4	内外面 赤色塗彩 外面 胴部に縦向文	10YR5/6黄褐色土	雲母、石英粒含む
8-3	〃	〃	短頸壺	7.0 —	頸部~底部	外面 頸部ナダ? 内面 頸部ヨコナダ、胴部赤色塗彩	10YR7/4にぶい黄褐色土	
8-4	〃	〃	小茶碗	(8.2) —	口縁部~胴部	外面 口縁部ヨコナダ、以下ヘラミガキ、ハケ ハケ、内外面赤色塗彩	10YR7/4にぶい黄褐色土	雲母、石英粒わずかに含む
8-5	〃	〃	壺	(19.2) —	口縁部1/4	外面 口縁部ヨコナダ、頸部磨損き縹状文等周 際止め、胴部磨減 ナダ 内面	口縁部 5YR5/4灰褐色 その他 10YR6/4にぶい黄褐色 土	雲母、石英粒等含む
8-6	〃	〃	壺	4.5 —	ほぼ完形	外面 頸部磨損き縹状文等周際止め 内面	外面前面 10YR5/8黄褐色土 内面 10YR6/2灰黄褐色土	
8-7	〃	〃	壺	8.4 —	底部	磨耗激しく不明	10YR7/6明黄褐色土	雲母、石英粒わずかに含む
8-8	〃	〃	壺	(14.6) —	口縁部1/5	外面 頸部にわずかに波状文痕、その他 磨耗激しく不明	外面 7.5YR5/6明赤褐色土 内面 10YR6/4にぶい黄褐色土	
8-9	〃	〃	壺	(12.6) —	口縁部~胴部	外面 口縁部ヨコナダ、以下縹状文 内面 ヨコナダ	外面 5YR5/2灰褐色土 内面 5YR3/3暗赤褐色土	雲母、石英、長石 粒含む
8-10	〃	〃	小型壺	(14.8) 5.9 —	口縁部~底部1/4	外面 口縁部~頸部ヨコナダ、胴部ナダ? 内外面とも磨耗のため不明瞭	10YR6/6明黄褐色土、外面胴部に 10YR4/1灰褐色土が斑点状に 付く	
9-11	〃	〃	石皿	—				重さ11g
11-1	Y2号住居址	弥生	壺	10.0 —	底部	外面 縦方向のヘラミガキ 内面 磨耗により不明	外面 胴部5YR4/2にぶい赤褐色 土、底部5Y7/6明黄褐色土、 内面5YR3/2暗赤褐色土	雲母、長石、石英 粒含む
13-1	Y3号住居址	弥生	高坏	(8.8) —	胴部	内外面 ナダ?	10YR5/6明黄褐色土	雲母、石英粒含む
13-2	〃	〃	鉢	16.9 —	底部なし3/4	内外面 赤色塗彩	10YR5/6明褐色土	
13-3	〃	〃	鉢	22.6 —	底部なし1/3	内外面 赤色塗彩	2.5Y6/6明黄褐色土	
13-4	〃	〃	壺	(19.2) —	口縁部~胴部	外面 頸部磨損き丁文字、ハケ ハケ 内面 口縁部~胴部、赤色塗彩	10YR6/4、にぶい黄褐色土	
13-5	〃	〃	壺	— —	胴部	外面 縦方向のヘラミガキ、赤色塗彩 内面 磨耗により不明	10YR6/2灰黄褐色土	雲母、石英等含む
13-6	〃	〃	壺	9.3 —	底部	外面 ハケ、赤 内面 ヘラナダ、裏面ユビナダ	外面 10YR7/6明黄褐色土 内面 2.5Y6/4にぶい黄褐色土	
13-7	〃	〃	壺	11.2 —	底部	外面 胴部ハケ、底部ナダ 内面 ヘラナダ	10YR5/4にぶい黄褐色土	
13-8	〃	〃	壺	(8.6) —	胴部~底部	内面 ミガキ、一部赤塗彩 内面 磨耗により不明	10YR7/4にぶい黄褐色土	雲母、石英等含む
13-9	〃	〃	壺	14.7 —	口縁部~胴部	外面 口縁部ハケ磨損~縦方向のミガキ、胴部 磨損き縹状文(2連止め) 胴部縦方向のハ ケ 内面 横方向のミガキ	7.5YR4/3褐色土	
13-10	〃	〃	壺	(8.1) —	胴部~底部	外面 縦方向のヘラミガキ 内面 底部~立ちあがりヘラミガキ	外面 10YR7/3にぶい黄褐色土 内面 10YR6/6明黄褐色土	雲母、石英、長石 等含む
13-11	〃	〃	壺	8.8 —	底部	外面 ヘラズブリ 内面 底部ユビナダ	外面 10YR5/4にぶい黄褐色土 内面 7.5YR4/6褐色土	石英粒等多く含む
15-1	Y4号住居址	弥生	高坏	4.6 —	胴部	外面 ヘラミガキ、赤色塗彩 内面 ヘラミガキ	外面 10YR6/6明黄褐色土 内面 10YR6/4にぶい黄褐色土	
15-2	〃	〃	壺	20.4 —	口縁部~胴部	外面 胴部ヨコナダ、口縁部縦方向のヘラミガ キ、胴部磨損き丁文字 内面 口縁部~胴部赤色塗彩、口縁部ヘラミガ キ、胴部ナダ	10YR6/6明褐色土	
15-3	〃	〃	壺	10.2 —	胴部~底部	外面 ハケ 内面 ナダ、ハケ	外面 - 断面 7.5YR5/3にぶい黄 褐色土 内面 10YR6/3にぶい黄褐色土	

第2表 出土土器観察表

番号	遺構名	種類	形状	法量(m)	残存度	調査	土	備考
15-4	Y4号住居址	竪生	壘	— 5.6	底部	外面 ナデ 内面 ナデ	外面 7.5YR4/2灰褐色土 内面・断面 7.5YR5/4にぶい褐色土	
15-5	*	*	甕	— 8.2	胴部～底部	外面 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	外面・断面 10YR5/4にぶい黄褐色土 内面 10YR4/2灰褐色土	底部穿孔
15-6	*	*	壘	15.1 —	口縁部	外面 口縁部修整き波状文、頸部修整き線状文、等間隔止めのナデ 内面 ナデ	外面・断面 10YR5/4にぶい黄褐色土 内面 7.5YR4/2灰褐色土	
15-7	*	*	壘	— 6.0	胴部～底部	外面 胴部縦方向のハケ、底部ヘラケズリ 内面 胴部ヘラナデ、底部横方向のハケ	外面 10YR6/4にぶい黄褐色土 内面 7.5YR5/3にぶい褐色土 断面 10YR5/1褐色土	内面に付着物
16-1	II2号住居址	竪生	高坏	— (12.4)	胴部1/2	外面 赤色塗彩 内面 ハケ	外面・断面 2.5Y6/4にぶい黄色土 内面 10YR6/6明黄褐色土	
16-2	III号住居址	*	高坏	— (7.8) (8.3)	胴部	外面 縦方向にヘラミガキ 内面 底部ヨコナデ 内外面 赤色塗彩	外面・内面 10YR6/3にぶい黄褐色土 断面 10YR5/1褐色土	石灰等含む
16-3	III号土坑址	*	高坏	— —	基部～胴部	断片により不明	7.5YR5/8明褐色土	中央部に穿孔有
16-4	P7	*	壘	— 10.7	底部	外面 赤色塗彩 内面 断片により不明	10YR5/8黄褐色土	
16-1	II1号住居址	土器群	高坏	17.4 14.2 18.0	穴部	外面 胴部、縦方向のミガキ 内面 胴部ハケ、底部ヨコナデ、坏部黒色処理	10YR6/8明黄褐色土	
18-2	*	*	高坏	— (10.0)	坏底部～胴部	外面 胴部縦方向のヘラケズリ 内面 胴部縦方向のヘラナデ、坏部黒色処理	10YR5/6明黄褐色土 胴部 5G/0赤土 断面 7.5G6/1緑灰色土	
18-3	*	*	球胴壘	<22.0> —	口縁部～胴部1/4	外面 胴部縦方向のヘラミガキ 内面 口縁部横方向のヘラミガキ、胴部ハケナデ	2.5Y7/4浅黄色土	
18-4	*	*	壘	19.7 8.0 25.5	完形	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ 内面 縦方向のハケ→ヘラミガキ	外面・内面 10YR6/4にぶい黄褐色土 断面 10GY1/1緑灰色土	
20-1	II2号住居址	土器群	甕	— 6.4	胴部1/2	外面 ヘラケズリ 内面 胴部縦方向のヘラミガキ	外面 10YR7/2にぶい黄褐色土 内面 10YR6/2にぶい黄褐色土 断面 10YR5/1褐色土	
20-2	*	*	甕	(10.4) (4.6) (6.5)	口縁部～底部2/3	外面 縦方向のヘラミガキ→ナデ 内面 ヘラミガキ→ナデ	7.5YR5/4にぶい褐色土	
20-3	*	*	壘	(17.2) —	口縁部～胴部1/4	外面 縦方向のヘラケズリ 内面 ナデ	外面・断面 10YR6/3にぶい黄褐色土 内面 10YR5/2灰黄褐色土	
20-4	*	*	球胴壘	— (8.9)	胴部～底部1/4	外面 縦方向のヘラケズリ 内面 黒色処理ナデ	外面 10YR7/2にぶい黄褐色土 断面 10YR4/1褐色土	
22-1	II3号住居址	土器群	坏	(13.9) — 4.6	口縁部～底部1/2	外面 ナデ→ケズリ 内面 黒色処理、ナデ	外面・断面 10YR6/4にぶい黄褐色土	
22-2	*	*	坏	—	口縁部～底部3/4	外面 ケズリ 内面 黒色処理、ヘラミガキ	外面・断面 10YR6/4にぶい黄褐色土	
22-3	*	*	坏	13.4 — 4.2	口縁部～底部3/4	外面 ナデ→ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ(筒底) 内外面 黒色処理	外面 10YR5/3にぶい黄褐色土 断面 10YR5/1褐色土	
22-4	*	*	坏	13.2 — 4.1	完形	外面 筒底ヘラケズリ 内面 黒色処理	外面・断面 10YR6/3にぶい黄褐色土	
22-5	*	*	坏	14.0 — 4.1	口縁部～底部4/5	外面 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面 黒色処理、ヨコナデ	10YR5/2、灰色褐色土	
22-6	*	*	坏	16.9 —	口縁部～胴部4/5	外面 ヨコナデ→ケズリ 内面 黒色処理、ヨコナデ	外面・断面 10YR6/6明黄褐色土	
22-7	*	*	高坏	17.2 13.0 16.3	完形	外面 胴部、縦方向のヘラミガキ 内面 黒色処理	外面・断面 10YR7/6明黄褐色土 胴部内面 10YR6/6明黄褐色土	
22-8	*	*	高坏	— 12.4	胴部1/2	外面 縦方向のヘラミガキ 内面 横方向のヘラミガキ	10YR7/3にぶい黄褐色土	白い塗土
22-9	*	*	小型壘	(13.8) 7.9 15.7	口縁部～底部3/4	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ハケ、帯状線い 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ハケ	外面 7.5YR5/8明褐色土 内面・断面 7.5YR5/4にぶい褐色土	

第3表 出土土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法量(m)	残存度	調整	胎土	備考
22-10	H3号住居址	土師器	小型壺	13.4 —	口縁部~胴部	外面 口縁部クロココナテ、胴部縦方向のハケ 内面 胴部、ココナテ	外面・断面 10YR4/2R黄褐色土 内面 10YR6/3にぶい黄褐色土	
22-11	*	*	小型壺	— 5.0 (10.8)	胴部~底部3/4	外面 ナテ 内面 ココナテ	10YR4/6褐色土	白灰、雲母粒多含む
22-12	*	*	小型壺	— 6.5 (12.7)	胴部~表面1/3	外面 胴部縦方向のナテ、底部ココナテ 内面 ココナテ	外面・断面 10YR6/4にぶい黄褐色土	底部木炭痕
22-13	*	*	瓶	15.5 3.4 12.2	完形	外面 縦方向のハケ 内面 ハケ	外面 10YR7/3にぶい黄褐色土 内面 10YR5/6黄褐色土	雲母粒含む 穿孔あり
22-14	*	*	球胴壺	16.2 3.2 13.5	ほぼ完形	外面 口縁部ココナテ、胴部ケズリ? 内面 ココナテ→ハケ	2.5Y7/4淡黄色土	
22-15	*	*	球胴壺	22.2 —	口縁部~胴部1/10	外面 ココナテ 内面 ヘラミガキ	10YR7/4にぶい黄褐色土	
22-16	*	*	鉢	18.5 — 14.5	完形	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	外面・内面 2.5Y6/4にぶい黄褐色土 断面 10YR6/3にぶい黄褐色土	
22-17	*	*	鉢	13.0 3.0 12.9	口縁部~底部3/4	外面 縦位のヘラミガキ 内面 黒色処理、ココナテ	外面 断面 10YR7/4にぶい黄褐色土	
22-18	*	*	球胴壺	21.2 7.2 30.4	口縁部~底部2/3	外面 口縁部ナテ、胴部ヘラミガキ 内面 口縁部ナテ、胴部縦方向のヘラナテ、ハケ	2.5Y7/4淡黄色土	
22-19	*	*	球胴壺	— 7.8 —	口縁部~胴部 胴部~底部	外面 ヘラミガキ 内面 ヘラケズリ、擦痕痕	2.5YR8/6褐色土	
23-20	*	*	壺	31.0 —	口縁部~胴部1/2	外面 ココナテ、ハケ 内面 横方向のハケ	2.5YR6/6褐色土	北陸系
23-21	*	*	長胴壺	(18.0) — (20.7)	口縁部~胴部2/5	外面 口縁部ココナテ、縦方向のナテ 内面 ナテ	10YR6/4にぶい黄褐色土	46mmまでの小石を多く含む、雲母粒多含む
23-22	*	*	長胴壺	20.4 — (23.8)	口縁部~胴部	外面 縦方向のハケ、口縁部ナテ 内面 横方向のハケ、口縁部ナテ	10YR5/4にぶい黄褐色土	雲母粒多含む、外面僅付着
23-23	*	*	長胴壺	23.3 — (23.8)	口縁部~胴部	外面 ココナテ、ハケ 内面 横方向のナテ	10YR6/4にぶい黄褐色土	雲母、灰石粒含む
23-24	*	*	長胴壺	— 8.5 37.1	ほぼ完形	外面 縦方向のハケ 内面 横方向のハケ	10YR6/4にぶい黄褐色土	雲母粒多含む、底部木炭痕
23-25	*	*	長胴壺	(18.2) — (27.4)	口縁部~胴部1/3	外面 口縁部ココナテ、縦方向のハケ 内面 口縁部ココナテ、斜め方向のハケ	外面 5YR4/6赤褐色土 内面 10YR3/3暗褐色土 断面 10YR4/4暗褐色土	雲母、石英粒多含む
23-26	*	*	長胴壺	17.3 (8.2) (32.5)	口縁部~底部3/4	外面 縦方向のハケ 内面 斜め方向のハケ	10YR6/4にぶい黄褐色土	底部木炭痕 雲母、灰石粒含む
23-27	*	*	長胴壺	— 7.0 37.8	胴部~底部	外面 縦方向のハケ 内面 横方向のハケ	10YR7/4にぶい黄褐色土	底部木炭痕
24-28	*	*	長胴壺	(19.6) 7.0 (30.0)	口縁部~底部3/4	外面 ココナテ 内面 底部ヘラケズリ、胴部ナテ、輪縁み気	7.5YR3/4暗褐色土	45mm前後の小石を含む、石英、雲母粒多含む
24-29	*	*	長胴壺	22.8 7.2 (34.8)	ほぼ完形	外面 ヘラケズリ 内面 横方向のケズリ	外面 10YR5/3にぶい黄褐色土 内面・断面 10YR5/4にぶい黄褐色土	雲母粒含む、焼成やや粗
24-30	*	*	長胴壺	20.0 5.6 34.9	完形	外面 縦方向のハケ 内面 横方向のハケ	外面 10YR6/4にぶい黄褐色土 内面 10YR5/4にぶい黄褐色土	雲母粒多、灰石、石英粒含む
24-31	*	*	長胴壺	(20.1) — (28.5)	口縁部~胴部2/3	外面 縦方向のヘラケズリ、口縁部ココナテ 内面 横方向のヘラナテ、口縁部ココナテ	10YR6/4にぶい黄褐色土	外面僅付着
24-32	*	*	長胴壺	13.5 8.3 (29.6)	口縁部~胴部3/4	外面 縦方向のヘラケズリ 内面 ナテ	10YR5/4にぶい黄褐色土	焼成粗
24-33	*	*	長胴壺	18.8 5.1 27.3	完形	外面 縦方向のハケ 内面 ココナテ、横方向のハケ	10YR6/6明黄褐色土	
23-34	*	土師器	円形器土製品	12.1 6.7 52.7	ほぼ完形	外面 縦方向のハケ 内面 縦方向のハケ、指痕痕	外面 10YR6/6明黄褐色土 内面・断面 10YR5/4にぶい黄褐色土	雲母粒多含む 焼成粗

第4表 出土土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法量(m)	残存度	調査	胎土	備考
26-1	H7号住居址	土師器	坏	12.4 7.0 5.7	完形	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ	10YR6/4にぶい黄褐色土	石英粒多く含む
26-2	*	土師器	短胴壺	9.8 —	口縁部~胴部1/3	外面 ヘラナデ 内面 黒色処理、横方向のミガキ	10YR5/4にぶい黄褐色土	1~2mmの石英粒多く含む
26-3	*	土師器	瓶	12.2 7.1 11.9	完形	外面 底部ハケ、口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ 内面 口縁部ヨコナデ	外面・断面 10YR6/6明黄褐色土 内面 5YR5/3にぶい赤褐色土	内外面 テール状の付着物、底部多孔、器身軽多、石英等含む
26-4	*	土師器	小壺型	13.4 7.0 15.5	ほぼ完形	外面 磨耗著しいヘラケズリか? 内面 ヘラケズリ	10YR6/4にぶい黄褐色土	内面 上部黒ずんでいる
26-5	*	土師器	甕	13.8 6.5 23.5	完形	外面 縦方向のヘラケズリ~ハケ 内面 ヘラナデ	10YR6/4にぶい黄褐色土	内外面テール状の付着物
26-6	*	土師器	長胴壺	— 6.4 (29.0)	胴部~底部	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	外面 10YR5/3にぶい黄褐色土 内面 10YR6/6明黄褐色土	1~3mmの石英、炭屑を含む
26-7	*	土師器	長胴壺	(22.1) (7.5) (33.2)	口縁部~底部3/4	外面 縦方向のハケ 内面 横方向のハケ	外面・断面 10YR7/4にぶい黄褐色土 内面 10YR6/6明黄褐色土	
28-1	H9号住居址	須恵器	坏	(11.4) (8.6) (5.1)	口縁部~底部1/3	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	7.5GY5/1緑灰色土	底部ヘラキり痕
28-2	*	土師器	坏	(14.5) — 4.7	口縁部~底部2/3	外面 ヘラナデ 内面 黒色処理	10YR5/3にぶい黄褐色土	1mm 炭粒、石英粒多く含む
28-3	*	*	坏	(12.3) 5.6 4.7	口縁部~底部2/3	外面 ヘラミガキ 内面 黒色処理、ヘラミガキ	10YR6/3にぶい黄褐色土	炭屑、石英粒多く含む
28-4	*	*	高坏	(11.7) (5.0) 7.0	半完形	外面 ヘラケズリ 内面 坏部黒色処理	10YR6/4にぶい黄褐色土	
28-5	*	*	高坏	— (13.5)	脚部	外面 縦方向のヘラミガキ 内面 黒色処理	10YR6/4にぶい黄褐色土	1~3mmの炭物を含む
28-6	*	*	高坏	—	脚部1/2	外面 縦方向のヘラミガキ 内面 坏部黒色処理	10YR7/4にぶい黄褐色土	1mm 前後の家母、石英粒含む
28-7	*	*	長胴壺	(23.9) —	口縁部~胴部	外面 ヨコナデ、ヘラミガキ 内面 縦横のヘラミガキ	外面 10YR6/4にぶい黄褐色土 内面 10YR7/4にぶい黄褐色土	
28-8	*	*	小壺型	(12.6) 7.6 (13.5)	口縁部~胴部1/3	外面 ヘラケズリ、輪縁み板 内面 ロクロヨコナデ	外面 10YR5/4にぶい黄褐色土 内面 10YR6/6明黄褐色土	
28-9	*	*	甕	— 7.2	胴部~底部	外面 ヘラナデ 内面 ナデ	外面 10YR4/3にぶい黄褐色土 内面 10YR6/2灰青褐色土	
28-10	*	*	甕	— 6	底部	外面 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	外面 10YR6/3にぶい黄褐色土 内面 10YR6/4にぶい黄褐色土	
28-11	*	*	甕	(19.7) (10.8) (27.7)	ほぼ完形	外面 ヘラミガキ、口縁部ヘラナデ 内面 横方向のヘラミガキ	外面・断面 10YR7/4にぶい黄褐色土 内面 10YR5/4にぶい黄褐色土	
29-1	H10号住居址	土師器	坏	11.8 — 4.9	一部欠損のほぼ完形	外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	10YR6/6明黄褐色土	1~3mm 石英、炭屑等炭物を含む
29-2	*	*	高坏	— 12.0	坏底部~脚部	外面 ヘラミガキ 内面 ロクロヨコナデ、黒色処理	10YR6/4にぶい黄褐色土	
29-3	*	*	鉢	(20.0) — 14.5	口縁部~底部2/3	外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	10YR7/4にぶい黄褐色土	
32-1	H11号住居址	土師器	坏	12.2 — 4.9	ほぼ完形	外面 ヘラミガキ 内面 黒色処理、ヘラミガキ	10YR6/4にぶい黄褐色土	1~3mm 石英、炭屑、炭屑等含む
32-2	*	*	高坏	—	坏部~脚部	外面 ヘラミガキ 内面 坏部内面黒色処理	10YR6/4にぶい黄褐色土	炭屑、石英粒等多く含む
32-3	*	*	小壺型土甕	(12.4) 7.4 8.4	口縁部~底部1/2	外面 ナデ 内面 ナデ	外面・内面 10YR6/4にぶい黄褐色土	石英粒多、その他炭屑、灰屑等含む
35-1	H16号住居址	須恵器	甕	(14.4) —	体部~口縁部	外面 縦横ヘラケズリ、口縁部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	外面 2.5GY5/1オリーブ灰色土 内面、断面 10BC4/1暗黄灰色土	

第5表 出土土器観察表

番号	発掘名	種類	形状	法量(m)	残存度	備 考	土	備 考
35-2	116号住居址	土師器	坏	11.8 11.5 4.2	完形	外面・口縁 ロタロヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面・口縁 ロタロヨコナデ、底部ヘラケズリ	16YR7/2にふい黄褐色土	
35-3	*	*	坏	14.3 — 5.2	2/3	磨耗著しく不明	2.5GY6/1キリーブ灰色土	灰白色 焼成痕し
35-4	*	*	坏	13.6	4/5	外面 ケズリ、口縁部ヨコナデ 内面 ヨコナデ	10YR6/4にふい黄褐色土	霰母粒含む
35-5	*	*	坏	(10.9) — (3.1)	1/5	外面 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	外面 10YR5/1緑灰色土 内面 10GY4/1暗黄灰色土	焼成痕
35-6	*	*	坏	(10.2) — (3.3)	1/4	外面 磨耗している。ヘラミガキ? 内面 磨耗している。ヘラミガキ?	2.5Y7/1灰黄褐色土	焼成痕
35-7	*	須恵器	甕	(27.4) —	口縁部	外面 ナデ 内面 ナデ	外面・断面 5R3/1暗黄灰色土 内面 5B4/1暗黄灰色土	
35-8	*	土師器	長胴甕	19.3 7.3 22.1	完形	外面 ヨコナデ・縦方向のハケ 内面 ヨコナデ・縦方向のハケ	10YR5/4にふい黄褐色土	外面に粘土付着
35-9	*	長胴甕		(24.3) 5.9 30.8	ほぼ完形	外面 ヨコナデ・縦方向のヘラケズリ 内面 ヨコナデ。巻き上げ痕残る	2.5YR5/6明赤褐色土	
35-10	*	長胴甕		25.6 —	口縁部・胴部	外面 縦方向のヘラケズリ 内面 縦方向のケズリ	7.5YR4/4褐色土	
35-11	*	*	甕	7.3 —	胴部・底部	外面 ナデ? 内面 ナデ?	外面・断面 10YR4/3にふい黄 褐色土 内面 10YR5/6明黄褐色土	外面に煤付着
35-12	*	*	甕	7.4 —	胴部・底部	外面 ヘラナデ 内面 ナデ、底部ヘラナデ	7.5YR4/4褐色土	
35-13	*	*	甕	4.1 —	胴部・底部	外面 ナデ 内面 ナデ	5YR4/3にふい赤褐色土	霰母、石英等細物 较多く含む
35-14	*	*	甕	7.1 —	底部	外面 ナデ 内面 ナデ	外面 7.5YR5/4にふい褐色土 内面 5YR3/3暗赤褐色土	石灰、長石、霰母 粒含む
35-15	*	土製品	円筒形 土製品	— —	胴部のみ	外面 縦方向のヘラケズリ 内面 巻き上げ痕	外面 5YR5/6明赤褐色土 内面・断面 10YR6/6明黄褐色 土	
35-16	*	*	円筒形 土製品	(8.0) —	胴部・底部	外面 縦方向のヘラケズリ 内面 巻き上げ痕	10YR5/3にふい黄褐色土	
35-17	*	*	羽口	— —		外面 ヘラケズリ?	外面 10YR7/4にふい黄褐色土 内面 10YR5/6明黄褐色土	
38-1	H17号住居址	土師器	坏	9.2 — 3.6	完形	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ	5YR5/3にふい赤褐色土	
38-2	*	*	坏	(8.2) — (3.6)	口縁部1/4 底部1/5	外面 磨耗している。ヘラケズリ? 内面 黒色焼痕、ヘラミガキ	2.5Y7/4淡黄褐色土	
38-3	*	*	坏	13.2 — 4.3	ほぼ完形	外面 ヘラケズリ 内面 黒色焼痕、ヘラミガキ	10YR7/4にふい黄褐色土 ~2.5YR/4淡黄褐色土	
38-4	*	*	坏	12.6 — 4.1	口縁部・底部3/4	外面 ヘラナデ・ヘラケズリ 内面 黒色焼痕、ヘラミガキ	2.5YR4/5黄褐色土 ~10YR7/4に ふい黄褐色土	
38-5	*	*	坏	(15.6) — 6.1	口縁部・底部3/4	外面 ヘラミガキ? 内面 ヘラミガキ	外面 10YR5/4にふい黄褐色土 内面 7.5YR5/3にふい褐色土	
38-6	*	*	鉢	13.3 — (8.7)	口縁部・底部3/4	外面 ヘラケズリ 内面 頸部ヘラミガキ	7.5YR4/6褐色土	石灰粒多く含む
38-7	*	須恵器	小豆皿	— —	胴部・胴部	外面 ロタロヨコナデ 内面 ロタロヨコナデ	外面・断面 8B/6灰色土 内面 10GY5/1緑灰色土	自然釉付着
38-8	*	須恵器	甕	(20.5) —	口縁部・胴部	外面 平付唯き目文 内面 同心円文	7.5Y5/1灰色土	自然釉付着
38-9	*	土師器	球腹甕	(19.8) —	口縁部・胴部	外面 ヘラミガキ 内面 口縁部ヘラミガキ、胴部ヘラナデ一部ハ ケ	外面 10YR6/6明黄褐色土 内面・断面 10YR7/3にふい黄 褐色土	

第6表 出土土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法量(m)	残存度	副 装	胎 土	備 考
38-10	H17号住居址	土師器	壺	— 7.0 —	底部	外面 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	7.5YR5/4にぶい褐色土	石灰粒多く含む
38-11	＊	土製品	支脚	4.8 4.0 16.4	完形	外面 ヘラナズリ 内面 指頭灰	10YR5/4にぶい黄褐色土	石灰粒多く含む
38-12	＊	＊	文脚	5.2 4.4 15.6	完形	外面 ヘラナズリ 内面 指頭灰	10Y6/3にぶい黄褐色土	
38-13	＊	＊	円筒形土製品	(11.2) — —	口縁部～胴部	外面 ハケ 内面 巻き上げ灰	外面・内面 10YR5/4にぶい黄褐色土	
38-14	＊	＊	円筒形土製品	— — —	胴部のみ	外面 ハケ 内面 巻き上げ灰	10YR5/6黄褐色土	
40-1	H18号住居址	須恵器	坏	(8.4) (6.7) 2.4	口縁部～底部1/3	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	10YR5/1褐色土	
40-2	＊	土師器	土製品	— (5.4) —	底部のみ	外面 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	外面・内面 10YR4/1褐色土 断面 7.5YR5/6褐色土	底部に穿孔有
40-3	＊	土師器	小型壺	— (7.4) (12.4)	口縁部～底部3/4	外面 ナデ、磨耗激しい 内面 黒色処理、ヘラナデ	外面 5YR5/4にぶい赤褐色土 内面 5YR5/3にぶい赤褐色土	
40-4	＊	土師器	高坏	— — —	胴部	外面 ヘラナズリ 内面 胴部、黒色処理	10YR6/6明黄褐色土	
40-5	＊	土師器	高坏	(19.4) — —	坏部1/4	外面 ヘラナズリ 内面 坏部黒色処理	10YR7/4にぶい黄褐色土	
40-6	＊	須恵器	壺	(20.0) — 4.6	1/5	外面 回転ヘラナズリ 内面 ロクロヨコナデ	外面 SBG4/1青灰色土 内面 10YR7/3にぶい黄褐色土	右を多く含む、強い環状のつまみが付く
40-7	＊	須恵器	壺	(26.8) — —	口縁部～胴部	外面 平行向き目文 内面 円心目文	外面 10G4/1緑褐色土 内面 10Y5/1緑褐色土 断面 7.5G6/1緑褐色土	
40-8	＊	土師器	長脚壺	(19.4) — —	口縁部～胴部1/2	外面 ナデ 内面 巻き上げ灰、他は磨耗により不明	10YR8/4淡黄褐色土	
40-9	＊	土師器	長脚壺	(26.6) — —	口縁部～胴部	外面 ナデ 内面 磨耗のため不明	10YR7/4にぶい黄褐色土	石灰、雲母粒含む
40-10	＊	土製品	円筒形土製品	— 8.2 —	胴部～底部	外面 ナデ 内面 ナデ	10YR7/6明黄褐色土	
43-1	H23号住居址	土師器	坏	12.3 — 4.4	口縁部～底部3/4	外面 ヨコナデ、底部ヘラナズリ 内面 ヨコナデ	10YR1/6灰褐色土	
43-2	＊	土師器	坏	(12.8) — —	口縁部1/3	外面 ナデ 内面 黒色処理、ヘラミガキ	10YR6/2にぶい黄褐色土	
43-3	＊	土師器	坏	14.4 — 4.7	完形	外面 ヘラナズリ 内面 黒色処理、ヘラミガキ	10YR7/4にぶい黄褐色土	
43-4	＊	土師器	坏	(15.2) 9.2 3.7	口縁部～底部1/2	外面 ヘラナズリ 内面 黒色処理、ヘラミガキ	10YR7/4にぶい黄褐色土	
43-5	＊	土師器	高坏	16.4 — —	坏部	外面 ヘラミガキ 内面 黒色処理、ヘラミガキ	10YR7/4にぶい黄褐色土	
43-6	＊	土師器	鉢	(17.8) — 10.7	口縁部～底部2/3	外面 ヘラナズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ、底部ナデ	10YR7/4にぶい黄褐色土	
43-7	＊	土師器	鉢	(9.0) 6.0 7.7	ほぼ完形	外面 磨耗著しく不明 内面 ヘラナズリ	外面 2.5YR4/6赤褐色土 内面 5YR4/6赤褐色土	
43-8	＊	土師器	鉢	21.0 8.0 10.2	完形	外面 縦方向のハケ→口縁部ナデ 内面 横方向のハケ	外面・内面 5YR5/6明黄褐色土	
43-9	＊	土師器	短頸壺	13.2 14.8 10.9	完形	外面 ヘラミガキ 内面 ナデ	10YR4/7にぶい黄褐色土	
43-10	＊	土師器	短頸壺	9.2 — (7.7)	口縁部～胴部	外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	外面 5YR4/4にぶい赤褐色土 内面 5YR5/4にぶい赤褐色土	

第7表 出土土器観察表

番号	遺構名	種類	形状	法量(cm)	残存度	調査	胎土	備考
43-11	E23号住居址	土師器	短頸壺	(11.2) — 9.1	口縁部~底部2/3	外面 口縁部ヨコナデ、他は磨耗のため不明 内面 黒色処理、ナデ?	2.5YR4/4にぶい赤褐色土	
43-12	*	土師器	甕	16.8 — 17.4	ほぼ定形	外面 縦方向のハケ 内面 ヘラミガキ	10YR4/4暗褐色土	底部単孔 穿孔部径3.1cm
43-13	*	土師器	甕	15.6 — 14.0	口縁部~底部2/3	外面 ハケ 内面 ヘラミガキ	10YR5/4にぶい褐色土	底部単孔
43-14	*	土師器	小型甕	11.0 6.5 12.2	口縁部~底部	外面 ハケ 内面 黒色処理、ヨコナデ	10YR5/6黄褐色土	底部本裏面
43-15	*	土師器	小型甕	(10.9) 5.8 13.1	口縁部~底部3/4	外面 ハケ 内面 ナデ	10YR4/4暗褐色土	底部本裏面
43-16	*	土師器	小型甕	15.1 7.6 17.5	ほぼ定形	外面、ヘラケズリ 内面 ナデ	外面 10YR5/4にぶい黄褐色土 内面 10YR4/3にぶい黄褐色土	底部本裏面
43-17	*	土師器	小型甕	(21.4) (8.0) (15.5)	口縁部~底部	外面 縦方向のハケ 内面 ヘラナデ	外面 2.5YR5/6明褐色土 内面・断面 10YR4/3にぶい黄褐色土	
43-18	*	土師器	甕	(15.4) — (15.3)	口縁部~胴部	外面 縦方向のハケ 内面 ヨコナデ	10YR4/4暗褐色土	
43-19	*	土師器	甕	17.8 20.0	口縁部~底部2/3	外面 口縁部ナデ、胴部ヘラミガキ 内面 縦方向のヘラケズリ	外面・断面 5YR4/6赤褐色土 内面 10YR5/3にぶい黄褐色土	
43-20	*	土師器	長胴甕	20.4 —	口縁部~胴部	外面 ハケ 内面 ハケ	10YR4/3にぶい黄褐色土	外面に扉付着
44-21	*	土師器	長胴甕	22.3 —	口縁部~胴部	外面 縦方向のヘラケズリ 内面 縦方向のハケ	外面 10YR5/3にぶい黄褐色土 内面・断面 10YR4/3にぶい黄褐色土	外面に扉付着
44-22	*	土師器	長胴甕	(20.8)	口縁部~胴部	外面 縦方向のナデ 内面 ナデ?	10YR4/4にぶい黄褐色土	
44-23	*	土師器	長胴甕	20.3 7.8 36.4	ほぼ定形	外面 縦方向のヘラケズリ 内面 ヘラケズリ、巻き上げ板	10YR5/4にぶい黄褐色土	外面に扉付着
44-24	*	土製品	円筒形土製品	— —	胴部	外面 ハケ 内面 巻き上げ板	10YR4/4暗褐色土	
44-25	*	土製品	円筒形土製品	— 7.0 (54.0)	ほぼ定形	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ、巻き上げ板	5YR4/8赤褐色土	
44-26	*	土製品	円筒形土製品	10.3 6.5 55.4	ほぼ定形	外面 ヘラケズリ~ハケ 内面 ヘラケズリ~ハケ、巻き上げ板	10YR6/4にぶい黄褐色土	外面に扉付着
46-1	E30号住居址	土師器	罎	(12.0) — 4.2	口縁部~底部	外面 ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ 内面 ヨコナデ	7.5YR5/4にぶい褐色土	45mm前後の硝母、石英粒を含む
46-2	*	土師器	罎	13.4 8.0 3.7	4/5	外面 ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ 内面 黒色処理、ヘラミガキ	10YR7/4にぶい黄褐色土	
46-3	*	土師器	鉢	11.2 4.3 4.8	定形	外面 ナデ、腰部中にヘラ状工具による跡 内面 ナデ	10YK7/4にぶい黄褐色土	43mm前後の石英、長石粒等含む
46-4	*	土師器	小型甕	— 2.6 —	底部	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ	10YR5/4にぶい黄褐色土	
46-5	*	土師器	甕	— 7.3 —	底部	磨耗著しく不明	10YR7/4にぶい黄褐色土	43mm程度の石を含む
48-1	E34号住居址	須恵器	罎	(8.8) —	腰部~底部1/5	磨耗のため不明 底部切り離し後ナデ?	2.5Y7/1灰白色土	
48-2	*	土師器	甕	14.6 9.4 14.4	口縁部~底部4/5	外面 ナデ 内面 ヘラナデ	外面 5YR3/4明赤褐色土 内面 7.5YR5/4にぶい褐色土	石英粒多
48-3	*	土師器	甕	— —	胴部~胴部	外面 ヘラミガキ 内面 胴部ヘラミガキ、胴部縦方向のハケ	外面・内面 10YR6/4にぶい黄褐色土	石英粒多
49-1	E4号住居址	土師器	罎	(14.8) (4.2)	口縁部~底部1/2	外面 ロタヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	外面 5Y7/4黄褐色土 内面 2.5Y6/4にぶい黄褐色土 断面 5Y7/4黄褐色土	

第8表 出土土器観察表

番号	遺蹟名	種別	器形	法量(m)	残存度	調整	胎土	備考
49-2	114号住居址	土師器	坏	(13.5) (4.9)	口縁部～底部2/3	外面 磨耗激しいため不明 内面 黒色処理	外面 10YR6/4にぶい黄褐色土 断面 10YR5/1焼灰色土	石炭粒多
49-3	*	土師器	坏	(12.8) — (4.2)	口縁部～底部1/3	外面 ヘラケズリ 内面 黒色処理、ヘラミガキ	外面 10YR7/3にぶい黄褐色土 断面 10YR4/1焼灰色土	
49-4	*	土師器	坏	12.8 4.4 (8.6)	口縁部～底部2/3	外面 ヘラミガキ 内面 黒色処理、ヘラミガキ	外面 2.5Y6/6明黄褐色土 断面 2.5Y7/3成黄色土	
49-5	*	土師器	鉢	(9.4) (5.6) (7.4)	口縁部～底部1/4	外面 ナデ 内面 黒色処理、ナデ	外面・断面 10YR7/3にぶい黄褐色土	石炭粒多量に含む、 雲母粒も多
49-6	*	土師器	鉢	(12.8) — —	口縁部～底部1/3	外面 ヘラケズリ 内面 黒色処理、ヘラミガキ	外面・断面 2.5Y7/3成黄色土	
49-7	*	須恵器	指鉢	— 10.0	底部のみ	外面 底部に浅い割突痕多	2.5GY6/1オリーブ灰色土	
49-8	*	土師器	坏	8.9 — 3.9	完形	外面 ヨコナデ、指痕痕 内面 黒色処理	10YR7/3にぶい黄褐色土	
49-9	*	土師器	鉢	(15.0) — —	口縁部～胴部	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ	10YR6/6明黄褐色土	
49-10	*	土師器	甕	(20.5) — —	口縁部～頸部	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	外面・断面 2.5Y7/2成黄色土 内面 10YR7/2にぶい黄褐色土	
49-11	*	土師器	甕	(17.5) (7.5) (17.9)	口縁部～底部3/4	外面 縦方向のヘラケズリ 内面 ヘラケズリ、ハケ	10YR6/4にぶい黄褐色土	
49-12	*	土師器	甕	(18.1) (7.3) (19.0)	口縁部～底部2/3	外面 縦方向のヘラケズリ、ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	外面・断面 2.5Y7/4成黄色土 内面 10YR6/6明黄褐色土	
49-13	*	土師器	長柄甕	(20.6) — —	口縁部～胴部	外面 ハケ 内面 ハケ	7.5YR5/4にぶい褐色土	雲母粒多
49-14	*	土師器	長柄甕	24.2 7.4 (38.0)	口縁部～底部2/3	外面 ヘラナデ 内面 巻き上げ痕	外面 7.5YR3/4暗褐色土 内面・断面 7.5YR5/4にぶい褐色土	底部木炭痕
49-15	*	土師器	甕	(19.0) (5.5) (19.5)	口縁部～底部1/2	外面 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	2.5Y6/6明黄褐色土	底部穿孔
49-16	*	土師器	円筒形土製品	9.8 9.7 58.0	完形	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	外面・断面 10YR5/4にぶい黄褐色土 内面 7.5YR5/6明褐色土	底部穿孔有
50-17	*	土師器	球胴甕	— (12.0) —	胴部～底部	外面 横方向のヘラナデ 内面 ハケ?	外面 7.5YR5/4にぶい褐色土 内面・断面 10YR5/4にぶい黄褐色土	
50-18	*	土製品	円筒形土製品	— 11.2 (26.0)	胴部～底部	外面 縦方向のヘラケズリ 内面 横方向のヘラナデ	10YR5/4にぶい黄褐色土	石炭、長石粒含む、 雲母粒多、底部穿孔有、木炭痕
50-19	*	土製品	円筒形土製品	— — (28.0)	胴部のみ	外面 縦方向のヘラケズリ 内面 横方向のヘラナデ	10YR5/4にぶい黄褐色土	
50-20	*	土製品	円筒形土製品	— 6.0 (5.5)	底部	外面 ヘラケズリ? 内面 ヘラナデ、巻き上げ痕	外面 10YR4/2成黄褐色土 内面・断面 10YR5/6黄褐色土	
50-21	H9号住居址	土師器	小型甕	11.5 13.7	完形	外面 左から右へ斜め方向のヘラミガキ 内面 横方向のヘラミガキ	10YR6/3にぶい黄褐色土	外側に付着物
50-22	*	土師器	小型甕	— 8.0	胴部～底部1/4	外面 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	外面・内面 10YR5/4にぶい黄褐色土 断面 10YR4/1焼灰色土	
50-23	*	土師器	球胴甕	25.2 8.4 26.0	口縁部～底部3/4	外面 左から右下へのヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	外面・内面 2.5Y6/4にぶい黄褐色土 断面 N4/0成灰色土	
52-1	D1号土壇址	土師器	坏	12.8 10.4 4.6	2/3	外面 縦方向のヘラケズリ 内面 黒色処理、ヘラミガキ	外面・内面 10YR5/3にぶい黄褐色土	
52-2	*	土師器	高坏	17.2 12.8 15.4	ほぼ完形	外面 胴部縦方向のヘラミガキ、底部ヘラケズリ 内面 胴部縦方向のヘラケズリ、底部黒色処理	2.5Y6/4にぶい黄褐色土	
52-3	*	土師器	高坏	— 13.4	胴部	外面 縦方向のヘラケズリ 内面 横方向のヘラケズリ	外面 10YR7/4にぶい黄褐色土 内面・断面 10YR5/2成黄褐色土	

第9表 出土土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法量(cm)	残存度	調 整	動 土	備 考
52-4	D1号土坑址	土師器	鉢	16.0 — (12.0)	口縁部~底部	外面 横方向のヘラミガキ 黒色処理	10YR6/4にぶい黄褐色土	
52-5	*	土師器	鉢	— — —	頸部~底部1/4	外面 横方向のヘラミガキ 内面 黒色処理、ヘラミガキ	10YR7/4にぶい黄褐色土	
52-6	*	土師器	甕	(15.8) — —	口縁部~頸部	外面 横方向のヘラミガキ、口縁部ヨコナデ 内面 ハケ	10YR7/3にぶい黄褐色土	
52-7	*	土師器	球形甕	(29.3) — —	口縁部~胴部	外面 横方向のヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	2.5Y7/3黄褐色土	
52-8	*	土師器	甕	16.4 (8.0) 18.4	口縁部~底部3/4	外面 ヘラミガキ 内面 ヘラナデ	外面・内面 10YR7/3にぶい黄褐色土 断面 10YR5/1褐色土	
52-9	*	土師器	鉢	4.4 — —	頸部~底部1/2	外面 ヘラミガキ、底部ヘラケズリ 内面 黒色処理ヘラミガキ	10YR5/4にぶい黄褐色土	
52-10	*	土師器	甕	14.0 7.0 15.6	3/4	外面 磨滅しているが横方向のヘラミガキ 内面 磨滅により不明	10YR6/6黄褐色土	
52-11	*	土師器	甕	(22.0) — —	口縁部~胴部	外面 ヘラナデ 内面 横方向のヘラナデ	10YR5/4にぶい黄褐色土	赤母、石英、長石 粒含む
52-12	*	土師器	甕	(18.4) (6.4) (17.1)	口縁部~底部1/2	外面 磨滅により不明 内面 ヘラミガキ	外面 10YR7/3にぶい黄褐色土 内面 10YR6/4にぶい黄褐色土	片岩、長石粒多
52-13	*	土師器	長胴甕	(22.0) — —	口縁部~胴部	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	10YR4/6褐色土	赤母粒多
52-14	*	土師器	長胴甕	(20.2) 7.5 33.0	口縁部~底部	外面 縦方向のハケ 内面 横方向のハケ	7.5YR4/4褐色土	
52-15	*	土師器	長胴甕	(20.0) — —	口縁部~底部	外面 ヘラケズリ 内面 磨滅により不明	外面・断面 5YR5/4にぶい赤褐色土 内面 5YR4/6赤褐色土	
52-16	*	土師器	甕	(25.8) — —	口縁部~胴部	外面 ヘラナデ 内面 磨滅により不明	10YR5/3にぶい黄褐色土	赤母、石英、長石 粒多
52-17	*	土師器	内白形 上製品	7.6 — —	口縁部~胴部	外面 ヘラケズリ 輪轆み面	外面 7.5YR5/4にぶい褐色土 内面・断面 7.5YR4/2褐色土	
54-1	M1号溝状 遺構址	須恵器	甕	10.8 — 3.0	ほぼ完形	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	10Y5/1灰色土	玉環つまみ
54-2	*	須恵器	甕	(22.0) — —	3/4	外面 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ	外面 7.5YR4/2灰褐色土 内面 2.5YR4/6赤褐色土	
54-3	*	須恵器	甕	(39.6) — —	口縁部1/2	外面 頸部磨滅き波状文 内面 ヨコナデ	外面 5R4/1暗赤灰色土 内面 5Y5/2灰オレンジ色土	
54-4	*	須恵器	甕	— — —	口縁部~胴部	外面 ヘラ状工具による施文 内面 ヨコナデ	7.5Y5/1灰色土	
54-5	*	須恵器	甕	— — —	頸部~胴部1/3	外面 平行叩き目文 内面 同心付文をナゲ消し	外面・内面 5Y4/1灰色土 断面 5R5/0灰褐色土	
54-6	*	須恵器	頸甕	(12.5) (26.5)	口縁部~胴部1/3	外面 回転ヘラケズリ、平行叩き目文 内面 ヘラナデ	10Y5/1灰色土	内外面に自然釉付 着
54-7	*	須恵器	甕	— — —	胴部	外面 平行叩き目文 内面 同心付文	7.5Y5/1灰色土	
54-8	*	土師器	甕	13.4 6.0 14.0	ほぼ完形	外面 横方向のヘラミガキ 内面 横方向のヘラミガキ	5YR6/6褐色土	
54-9	*	土師器	高杯	16.7 10.6 11.6	ほぼ完形	外面 杯部ヘラナデ、胴部ヘラケズリ 内面 杯部黒色処理	外面 10YR7/4にぶい黄褐色土 内面 5R5/0褐色土	
54-10	*	土師器	高杯	— — —	杯底部~胴部	外面 ヘラケズリ 内面 杯部ヘラミガキ	10YR5/4にぶい黄褐色土	
54-11	*	土師器	甕	6.6 — —	底部	外面 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	7.5YR5/4にぶい褐色土	

第10表 出土土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法量(cm)	残存度	調 査	胎 土	備 考
56-1	I15号住居址	須恵器	甕	<16.5> —	2/3	外面 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ	10GY6/1緑灰色土	
56-2	*	須恵器	甕	<18.0> —	1/3	外面 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ	外面・内面 5G4/1暗緑灰色土 断面 7.5Y5/3(オリーブ)灰色土	
56-3	*	須恵器	坏	(13.6) (5.3) (4.6)	口縁部~底部1/2	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 ヘラケズリ	2.5GY6/1オリーブ灰色土	火障有
56-4	*	須恵器	坏	(13.0) (7.6) (4.4)	口縁部~底部4/5	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り	10GY5/1緑灰色土	火障有
56-5	*	須恵器	坏	(14.0) (8.5) (4.7)	口縁部~底部1/3	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り+一部ヘラケズリ	2.5GY6/1オリーブ灰色土	焼成悪
56-6	*	須恵器	坏	(13.6) (7.7) (4.0)	口縁部~底部1/3	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り	5GY5/1オリーブ灰色土	
56-7	*	須恵器	高台付 坏	(14.2) (10.8) (5.9)	口縁部~底部1/4	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転ヘラケズリ	外面 7.5GY5/1緑灰色土 内面・断面 2.5GY6/1オリーブ 灰色土	
56-8	*	須恵器	高台付 坏	(14.2) (10.4) (4.7)	口縁部~底部1/2	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転ヘラケズリ	10Y7/2灰白色土	
56-9	*	須恵器	高台付 坏	(15.2) (11.0) (3.9)	口縁部~底部2/3	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転ヘラケズリ	外面 10BG4/1暗青灰色土 内面・断面 10GY5/1緑灰色土	
56-10	*	須恵器	高台付 坏	(13.6) (5.3) (3.8)	口縁部~底部1/2	外面 ロクロヨコナデ 内面 底部 回転ヘラケズリ	5G4/1暗緑灰色土	
56-11	*	須恵器	高台付 坏	(15.3) (5.3) 底部	口縁部~底部5/6	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転ヘラケズリ	外面 10BG3/1暗青灰色土 内面・断面 5GY5/1オリーブ 灰色土	
56-12	*	須恵器	高台付 坏	(16.4) (11.4) (6.5)	口縁部~底部1/2	外面 ロクロヨコナデ 内面 底部 回転ヘラケズリ	7.5GY6/1緑灰色土	
56-13	*	須恵器	高台付 坏	(16.8) (10.0) (7.3)	口縁部~底部1/3	外面 ロクロヨコナデ 内面 底部 回転ヘラケズリ	外面 10YR4/1褐色土 内面・断面 7.5Y5/3(オリーブ)褐色土	
56-14	*	須恵器	高台付 坏	(11.7) (7.0) (3.8)	口縁部~底部1/2	外面 ロクロヨコナデ 内面 底部 回転ヘラケズリ後ナデ滑し	10Y5/1灰色土	
56-15	*	須恵器	甕	(18.7) —	口縁部~脚部	外面 平行明き目文 内面 ロクロヨコナデ	外面 2.5GY0/1オリーブ灰色土 内面・断面 10BG5/1暗青灰色土	
56-16	*	須恵器	甕	(16.0) —	底部	外面 平行明き目文 内面 ナデ	外面・内面 10BG4/1暗青灰色土 断面 5GY5/1オリーブ灰色土	
56-17	*	土師器	坏	(12.2) (8.8) (2.8)	口縁部~底部1/3	外面 ヘラケズリ 内面 黒色粘層ヘラミガキ	2.5Y7/2灰黄色土	
56-18	*	土師器	甕	(15.8) — (15.1)	口縁部~底部2/3	外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	外面・内面 10YK7/2(ぶい)黄 褐色土 断面 10YR5/1緑灰色土	
56-19	*	土師器	甕	(13.9) —	口縁部~胴部	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	7.5YR5/3(ぶい)褐色土	
56-20	*	土師器	壺	(8.6) —	底部1/2	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ+ハケ	2.5Y6/4(ぶい)黄色土	
58-1	I18号住居址	須恵器	甕	12.2 — 2.4	4/5	外面 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ	10GY5/1緑灰色土	甕宝珠つまみ
58-2	*	須恵器	甕	14.0 — 2.8	4/3	外面 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ	5BG4/1暗青灰色土	甕宝珠つまみ
58-3	*	須恵器	高台付 坏	(16.2) (12.8) 4.0	口縁部~底部1/4	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り糸調整	5BG5/1青灰色土	
58-4	*	須恵器	坏	(14.2) (8.0) 3.7	口縁部~底部1/4	外面 ロクロヨコナデ 内面 底部 回転糸切り糸調整	10YR6/1褐色土	火障有
58-5	*	須恵器	坏	(14.4) (8.4) (3.4)	口縁部~底部1/2	外面 ロクロヨコナデ 内面 底部 回転糸切り糸調整	10Y5/1灰色土	

第11表 出土土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法検(cm)	残存度	表 面	胎 土	備 考	
58-6	H8号住居址	須臾器	坏	13.4 6.2 4.2	完形	外面 内面 底部 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転糸切り未調整	10YR7/11灰白色土	火傷者	
58-7	*	須臾器	坏	(13.0) (8.0) 4.9	口縁部~底部1/2	外面 内面 底部 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 静止糸切り未調整	5Y7/1灰白色土		
58-8	*	須臾器	坏	(10.8) — —	口縁部1/5	外面 内面 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ	N5/0A色土		
58-9	*	土埴器	小型碗	(4.2) (5.8) 4.8	口縁部~底部2/5	外面 内面 ヘラケズリ→ヘラミガキ 黒色処理	10YR4/1褐色色土		
58-10	*	土埴器	坏	(8.6) — (5.3)	口縁部~底部1/4	外面 内面 ヘラケズリ 黒色処理、ヘラミガキ	10YR7/4に多い黄褐色土		
58-11	*	土埴器	坏	(15.2) (8.0) 5.0	口縁部~底部1/4	外面 内面 底部 ヘラケズリ 黒色処理 回転糸切り未調整	7.5YR5/4に多い褐色土		
58-12	*	土埴器	坏	(14.0) (7.6) 5.0	口縁部~底部1/2	外面 内面 ロクロヨコナデ 黒色処理、ヘラミガキ	10YR7/4に多い黄褐色土		
58-13	*	須臾器	広口甕	(56.0) — —	口縁部~胴部	外面 内面 平行叩き目文 ナデナシ	外面 10YR6/4に多い黄褐色土 内面 10YR6/2A黄褐色土		
58-14	*	須臾器	甕	(14.6) — —	底部	外面 内面 平行叩き目文 ナデ	外面 10Y5/1A色土 内面 10Y6/2オリーブ灰色土	自然隆付窯 外部保存者	
58-15	*	土埴器	甕	(21.8) (5.4) (29.6)	ほぼ完形	外面 内面 縦方向のヘラケズリ 横方向のヘラケズリ	10YR7/4に多い黄褐色土	武蔵型の髹 外部保存者	
60-1	III2号住居址	須臾器	壺	(17.8) 4.7	5/6	外面 内面 回転ヘラケズリ ロクロヨコナデ	外面・断面 2.5GY6/1オリーブ 灰色土 内面 10GY5/1緑灰色土	擬宝珠つまみ	
60-2	*	須臾器	甕	18.6 5.2	ほぼ完形	外面 内面 回転ヘラケズリ ロクロヨコナデ	外面・断面 5Y6/2Aオリーブ 色土 内面 7.5Y7/1灰白色土	火傷者 擬宝珠つまみ	
60-3	*	須臾器	坏	12.2 6.6 3.6	ほぼ完形	外面 内面 底部 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転糸切り未調整	10GY5/1緑灰色土	内外面付着物有	
60-4	*	須臾器	坏	12.8 7.0 3.8	口縁部~底部4/5	外面 内面 底部 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転糸切り未調整	6GY5/1オリーブ灰色土	内面付着物有	
60-5	*	須臾器	坏	12.8 6.4 3.5	ほぼ完形	外面 内面 底部 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転糸切り未調整	7.5GY5/1緑灰色土	外面付着物有	
60-6	*	須臾器	甕	— — —	頸部~胴部	外面 内面 平行叩き目文 ナデナシ	外面 9G4/1暗緑灰色土 内面 9G5/1緑灰色土 断面 7.5GY5/1緑灰色土	10YR5/4に多い黄褐色土	武蔵型の甕
60-7	*	土埴器	甕	(20.0) — —	口縁部~胴部1/2	外面 内面 ヘラケズリ ヘラナデ	10YR5/4に多い黄褐色土	武蔵型の甕	
62-1	H13号住居址	土埴器	小型甕	(12.0) (6.2) 9.9	口縁部~底部	磨耗著しく不明	外面 10YR6/4に多い黄褐色土 内面・断面 10YR6/3に多い黄 褐色土		
62-2	*	土埴器	甕	— 7.0 —	底部	外面 内面 ヘラケズリ ナデ?	外面 10YR6/4に多い黄褐色土 内面・断面 10YR5/4に多い黄 褐色土	武蔵型の甕	
62-3	*	土製品	紡錘車	6.0 7.6 4.6	完形	外面 内面 ナデ —	5YR5/3に多い赤褐色土	重さ305g	
64-1	III4号住居址	土埴器	甕	— 8.0 —	底部	外面 内面 ヘラケズリ ヘラケズリ	外面 10YR6/4に多い黄褐色土 内面・断面 10YR6/3に多い黄 褐色土		
64-2	*	土製品	紡錘車	(2.8) (4.4) 3.2	1/2	外面 内面 ヘラナデ —	10YR7/2に多い黄褐色土		
67-1	H15号住居址	須臾器	坏	13.7 7.1 4.6	完形	外面 内面 底部 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 静止糸切り未調整	外面 7.5Y6/6/1緑灰色土 内面 2.5GY6/1オリーブ灰色 土	口縁彎曲	
67-2	*	須臾器	坏	14.5 6.9 4.4	完形	外面 内面 底部 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転糸切り未調整	2.5GY6/1オリーブ灰色土		
67-3	*	須臾器	坏	12.5 5.7 3.7	完形	外面 内面 底部 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転糸切り未調整	外面 10GY6/1緑灰色土 内面 2.5GY6/1オリーブ灰色 土		

第12表 出土土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法量(m)	残存度	調整	胎土	備考
67-4	H15号住居址	須恵器	坏	(13.6) (7.6) (4.5)	口縁部~底面1/2	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整	2.5GY6/1オリーブ灰色土	
67-5	*	須恵器	坏	14.9 7.0 4.4	口縁部~底面2/3	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整	5GY6/1オリーブ灰色土	
67-6	*	土師器	坏	15.0 — 5.0	ほぼ完全	外面 ロクロナデ 内面 黒色処理・ヘラミガキ 底部 ヘラナデ	10YR6/4にぶい黄褐色土	
67-7	*	須恵器	高台付 坏	— 8.7 —	— 底部	外面 — 内面 — 底部 回転糸切りの後ヘラナデ調整	10BG4/1晴岩灰色土	
67-8	*	須恵器	高台付 坏	— 9.7 —	— 底部	外面 — 内面 — 底部 回転糸切りの後ヘラナデ調整	外面 2.5GY7/1明オリーブ灰色土 内面 7.5GY6/1緑灰色土	
67-9	*	土師器	小型壺	(9.8) (3.5) (12.4)	口縁部~底面1/2	外面 縦方向のヘラケズリ ヘラナデ、短線保存	10YG5/3にぶい黄褐色土	
67-10	*	土師器	壺	(23.0) —	口縁部~胴部	外面 横方向のヘラケズリ ナデ	10YR6/3にぶい黄褐色土	武蔵型の要
67-11	*	土師器	壺	(6.5) —	底部1/2	外面 横方向のヘラケズリ ヘラナデ	外面 10YR5/3晴岩色土 内面 10YR5/4にぶい黄褐色土	武蔵型の要
67-12	*	須恵器	壺	(28.4) (13.6) (25.6)	口縁部~底部	外面 平行印き 日文 内面 同心円文をナデケン	外面 5Y4/1灰色土 内面 5Y5/1灰色土	
69-1	H19号住居址	須恵器	壺	15.4 3.8	完全	外面 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ	10Y6/2オリーブ灰色土	固定座つまみ 器形に重み有
69-2	*	須恵器	坏	(13.6) (6.0) 3.0	口縁部1/4	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部、回転糸切り未調整	2.5GY6/1オリーブ灰色土	
69-3	*	須恵器	坏	(12.9) (6.0) 3.2	口縁部~底面1/4	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整	7.5Y6/2オリーブ色土	
69-4	*	須恵器	坏	(12.8) (5.6) 4.9	口縁部~底面1/2	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整	5Y7/1灰白色土	
69-5	*	須恵器	坏	(15.2) (8.4) 3.5	口縁部~底面1/6	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整	10Y7/1灰白色土	
69-6	*	須恵器	坏	13.0 7.4 2.9	口縁部~底面3/4	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整	7.5Y6/1灰色土	
69-7	*	須恵器	坏	(13.4) (5.4) 3.4	口縁部~底面1/2	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整	5GY6/1オリーブ灰色土	
69-8	*	須恵器	坏	14.0 8.0 3.6	ほぼ完全	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整	2.5GY6/1オリーブ灰色土	
69-9	*	須恵器	坏	(14.4) (7.6) 4.1	口縁部~底面1/3	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整	10GY6/1緑灰色土	
69-10	*	土師器	坏	(15.0) —	口縁部1/6	外面 ロクロヨコナデ 内面 黒色処理、ヘラミガキ	10YR5/3にぶい黄褐色土	須母、石英粒含む
69-11	*	須恵器	長頸壺	— 8.0 —	胴部~底部	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	10GY6/1緑灰色土	一部自然輪付
69-12	*	土師器	壺	18.1 —	口縁部~胴部1/2	外面 ヘラケズリ ヘラナデ	10YG5/4にぶい黄褐色土	武蔵型の要 輪付
69-13	*	土師器	壺	(22.3) —	口縁部~胴部	外面 ヘラケズリ ヘラナデ	10YR5/4にぶい黄褐色土	武蔵型の要 須母、石英粒含む
69-14	*	土師器	壺	(14.8) —	口縁部~胴部	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	10YR6/4にぶい黄褐色土	
72-1	H21号住居址	須恵器	坏	(10.6) (4.5) 3.6	口縁部~底面1/5	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	外面 7.5Y6/2オリーブ灰色土 内面 5GY5/1オリーブ灰色土	
72-2	*	須恵器	坏	(14.0) —	口縁部	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	2.5GY6/1オリーブ灰色土	

第13表 出土土器観察表

番号	遺跡名	種類	器形	径長(cm)	残存度	調査	土	備考
72-3	H21号住居址	須恵器	坏	13.9 6.2 4.0	口縁部～底縁3/4	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底面 回転糸切り一部ナデケシ	外面 10Y5/2オリーブ灰色土 内面 2.5Y5/4黄褐色土	
72-4	*	須恵器	坏	14.0 7.6 3.9	口縁部～底縁1/2	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底面 回転糸切り未調整	2.5GY6/1オリーブ灰色土	火押有
72-5	*	須恵器	盃	— — —	胴部～胴部	外面 平行向き目文 指痕あり	外面 5GY5/1オリーブ灰色土 内面 10GY5/1緑灰色土	突帯付四耳直
72-6	*	須恵器	壺	16.0	胴部～底部	外面 平行向き目文 指痕あり	外面 2.5GY6/1オリーブ灰色土 内面 5G5/1緑灰色土	
72-7	*	須恵器	長頸瓶	— — —	胴部	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	外面 2.5GY6/1オリーブ灰色土 内面 5Y6/1灰色土	一部自然輪付着
72-8	*	土師器	壺	18.4	口縁部～胴部	外面 ヘラケズリ ヘラナデ	5Y6/3にふい黄褐色土	武蔵型の壺
72-9	*	土師器	鍋	31.0	口縁部～胴部1/3	外面 ロクロヨコナデ、一部ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ	7.5Y6/6黄褐色土	
74-1	H22号住居址	須恵器	高台付斗	9.5	底部	外面 — 内面 — 底面 回転ヘラケズリ	2.5Y4/1黄灰色土	
74-2	*	須恵器	壺	— — —	胴部	外面 平行向き目文 内面 指痕あり	外面・断面 2.5Y6/1黄灰色土 内面 2.5Y6/3にふい黄褐色土	
76-1	H24号住居址	須恵器	壺	(13.7) — —	1/4	外面 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ	外面・内面 10G4/1暗緑灰色土 断面 10Y5/2オリーブ灰色土	
76-2	*	須恵器	壺	(15.8) — —	1/4	外面 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ	外面・内面 7.5GY5/1緑灰色土 断面 10GY5/1緑灰色土	
76-3	*	須恵器	壺	(14.8) — —	口縁部1/8	外面 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ	外面・断面 10G6/1緑灰色土 内面 5BG5/1黄褐色土	
76-4	*	須恵器	坏	(12.5) (6.4) 4.1	口縁部～底縁1/5	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底面 ヘラケリ	5GY6/1オリーブ灰色土	
76-5	*	須恵器	坏	(12.8) (6.5) 3.9	口縁部～底縁1/5	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	10GY5/1緑灰色土	
76-6	*	土師器	壺	18.0	口縁部～胴部	外面 ヨコナデ 内面 ナデ	外面 10Y2/4にふい黄褐色土 内面・断面 10Y6/4にふい黄褐色土	石炭粒多
79-1	H25号住居址	須恵器	壺	(13.6) — —	口縁部1/10	外面 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ	外面 10Y5/2オリーブ灰色土 内面 2.5GY5/1オリーブ灰色土	
79-2	*	須恵器	坏	(15.3) — —	口縁部	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	2.5GY6/1オリーブ灰色土	
79-3	*	土師器	坏	(8.6) (3.5) (5.6)	口縁部～底縁1/3	外面 ロクロヨコナデ 内面 黒色焼成、ヘラミガキ 底面 ヘラケズリ	10Y6/3にふい黄褐色土	
79-4	*	土師器	鍋	(36.2)	口縁部～胴部	外面 縦方向のヘラケズリ→横方向のヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ	5Y6/6黄褐色土	
80-5	*	須恵器	壺	(19.2) — —	胴部～底部	外面 平行向き目文 内面 ナデ	外面 2.5GY5/1オリーブ灰色土 内面 7.5GY5/1オリーブ灰色土 断面 10Y5/2オリーブ灰色土	
80-6	*	須恵器	壺	(36.6) — —	口縁部～胴部	外面 平行向き目文、頸部ハケ 指痕あり、頸部ハケ	5Y4/1灰色土	
82-1	H26号住居址	須恵器	坏	13.9 8.0 3.5	完形	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底面 回転糸切り未調整	5GY5/1オリーブ灰色土	火押有
82-2	*	土師器	壺	(5.9) — —	胴部～底部	外面 ヘラケズリ ヘラナデ	外面 10Y6/4にふい黄褐色土 内面 10Y6/4にふい黄褐色土	武蔵型の壺
83-1	H27号住居址	須恵器	壺	(11.6) 6.5 (3.4)	1/3	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	外面 2.5GY6/1オリーブ灰色土 内面・断面 5G5/1緑灰色土	環状のつまみ 自然輪付着
83-2	*	土師器	壺	— 4.8 —	底部	外面 ヘラケズリ ヘラナデ	外面・断面 10Y6/3にふい黄褐色土 内面 10Y6/3にふい黄褐色土	武蔵型の壺

第14表 出土土器観察表

番号	遺構名	種類	器形	法量(m)	残存度	調 整	土 質	備 考
83-3	H27号住居址	土師器	甕	20.8 —	門縁部~胴部	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナゲ	10YR5/2にぶい黄褐色土	武蔵型の甕
87-1	H12号住居址	須恵器	高台付 杯	— (7.4)	底部1/6	外面 ロクロヨコナゲ 内面 ロクロヨコナゲ	10YR6/1褐色土	
87-2	*	土師器	杯	(13.1) 6.1 4.5	門縁部~底部2/3	外面 磨耗しているがヘラケズリか 内面 黒色処理、ヘラミガキ	10YR7/4にぶい黄褐色土	±2m 前後の石炭、 長石粒含む
87-3	*	土師器	甕	(12.0) —	L1縁部	外面 ヨコナゲ 内面 ヨコナゲ	外面 5YR4/4にぶい赤褐色土 内面 5YR3/3暗赤褐色土	右溝わずかに含む 武蔵型の甕
87-4	*	土師器	甕	(0.8) —	口縁部~胴部	外面 ヘラケズリ 内面 ナゲ	7.5YR4/3褐色土	炭粒、石炭粒を含む 武蔵型の甕
87-5	*	土師器	甕	— 5.0	底部	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナゲ	外面 7.5YR5/4にぶい褐色土 内面 7.5YR5/1褐色土	黒石、右溝わずかに含む 武蔵型の甕
87-6	*	土師器	甕	(25.2) 3.8 29.0	口縁部~底部1/2	外面 縦方向のヘラケズリ 内面 ハケ	10YR5/2にぶい黄褐色土	内外面に付着物有 陶師型の甕
89-1	H31号住居址	須恵器	杯	— 6.5 —	底部	外面 ロクロヨコナゲ 内面 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り未調整	5P5/1青灰色土	
89-2	*	須恵器	杯	(12.5) (9.4) 4.5	口縁部~底部	外面 ロクロヨコナゲ 内面 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り未調整	10YR5/1褐色土	
89-3	*	須恵器	高台付 杯	— (11.0) —	底部	外面 — 内面 — 底部 回転ヘラケズリ未調整	10YR6/1褐色土	
89-4	*	土師器	杯	(12.4) 6.0 4.5	口縁部~底部1/2	外面 ロクロヨコナゲ 内面 黒色処理、ヘラミガキ ヘラケズリ	10YR5/6黄褐色土	灰石等粒々細かい
89-5	*	須恵器	甕	(28.8) —	口縁部1/4	外面 磨部へウ伏工具による波状文 内面 ヨコナゲ	10B6/1青灰色土	
91-1	H32号住居址	須恵器	甕	16.0 — 3.5	3/4	外面 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナゲ	10C4/1暗褐色土	鑑定珠つまみ
91-2	*	須恵器	杯	13.0 6.9 3.6	口縁部~底部2/3	外面 ロクロヨコナゲ 内面 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り未調整	5GY6/1キープ灰色土	
91-3	*	須恵器	杯	(13.0) (7.4) 3.5	口縁部~底部1/2	外面 ロクロヨコナゲ 内面 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り未調整	10YR5/1褐色土	
91-4	*	須恵器	杯	13.0 5.8 3.7	口縁部~底部1/2	外面 ロクロヨコナゲ 内面 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り未調整	7.5YR7/1明褐色土	
91-5	*	須恵器	杯	(12.8) 8.0 3.8	口縁部~底部2/5	外面 ロクロヨコナゲ 内面 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り未調整	10YR6/1褐色土	
91-6	*	須恵器	杯	(12.2) (7.0) 3.9	口縁部~底部1/3	外面 ロクロヨコナゲ 内面 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り未調整	10B5/1青灰色土	火罨有
91-7	*	須恵器	杯	(12.8) (7.4) 3.6	口縁部~底部1/3	外面 ロクロヨコナゲ 内面 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り未調整	5G5/1緑灰色土	
91-8	*	須恵器	杯	(12.6) (8.2) 4.0	口縁部~底部1/3	外面 ロクロヨコナゲ 内面 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り未調整	7.5YR6/1褐色土	
91-9	*	須恵器	杯	— 6.4 —	底部1/2	外面 — 内面 — 底部 回転糸切り未調整	10YR6/1褐色土	
91-10	*	須恵器	杯	13.7 7.4 3.8	口縁部~底部2/3	外面 ロクロヨコナゲ 内面 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り未調整	5GY6/1キープ灰色土	
91-11	*	須恵器	杯	13.0 5.8 3.7	口縁部~底部4/5	外面 ロクロヨコナゲ 内面 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り未調整	7.5YR7/1明褐色土	
91-12	*	須恵器	杯	(14.4) (7.3) 3.9	口縁部~底部1/3	外面 ロクロヨコナゲ 内面 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り未調整	5B6/1青灰色土	
91-13	*	須恵器	杯	(13.6) (7.2) 4.3	口縁部~底部1/3	外面 ロクロヨコナゲ 内面 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り未調整	10YR8/1灰黄褐色土	

第15表 出土土器観察表

番号	遺構名	種別	部形	流量(ml)	残存数	調整	胎土	備考
91-14	H32号住居址	須恵器	坏	(12.6) (6.0) 3.7	L線部～底部2/5	外蓋 ロクロヨコナゲ 内蓋 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り未調整	7.5YR7/1明緑灰色土	
91-15	*	須恵器	高台付 坏	(11.2) (7.6) 3.9	口線部～底部1/4	外蓋 ロクロヨコナゲ 内蓋 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り後外蓋をナゲ調整	10YR5/1明灰色土	火葬骨
91-16	*	須恵器	高台付 坏	(11.0) 6.6 4.5	L線部～底部1/2	外蓋 ロクロヨコナゲ 内蓋 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り後外蓋をナゲ調整	外蓋 10YR6/1弱灰色土 内蓋 7.5Y6/1緑灰色土	
91-17	*	須恵器	高台付 坏	(14.1) 8.8 5.9	口線部～底部3/5	外蓋 ロクロヨコナゲ 内蓋 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り後外蓋をナゲ調整	10YR5/1弱灰色土	
91-18	*	須恵器	高台付 坏	(14.7) 10.4 6.8	口線部～底部3/4	外蓋 ロクロヨコナゲ 内蓋 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り後外蓋をナゲ調整	10GY4/1暗緑灰色土	
91-19	*	土師器	坏	(14.4) 8.6 4.7	口線部～底部1/3	外蓋 ロクロヨコナゲ 内蓋 黒色処理	5YR4/6明緑灰色土	
91-20	*	土師器	坏	14.0 8.2 4.1	口線部～底部1/3	外蓋 ロクロヘラケズリ 内蓋 黒色処理	10YR5/4にぶい黄褐色土	
91-21	*	須恵器	瓶	— (11.4) —	頸部～底部1/4	外蓋 半円明き斜文 内蓋 ナゲ	外蓋 2.5GY4/1暗オリーブ灰色土 内蓋 10GY4/1暗緑灰色土	
91-22	*	須恵器	鉢	(10.4) —	口線部～胴部1/4	外蓋 ロクロヨコナゲ 内蓋 ロクロヨコナゲ	外蓋・内蓋 7.5GY4/1暗緑灰色土 蓋面 10Y5/1オリーブ灰色土	
91-23	*	須恵器	鉢	(18.0) —	口線部～胴部1/4	外蓋 ロクロヨコナゲ 内蓋 ロクロヨコナゲ	10G5/1緑灰色土	
91-24	*	須恵器	鉢	(19.6) 10.4 14.7	L線部～底部1/2	外蓋 ロクロヨコナゲ 内蓋 ロクロヨコナゲ	外蓋 10VC7/3にぶい黄褐色土 内蓋 10YR6/1弱灰色土	
91-25	*	土師器	甕	— 6.5 —	底部	外蓋 ヘラケズリ 内蓋 ヨコナゲ	外蓋・断面 10YR4/3にぶい黄褐色土 内蓋 10YR5/6黄褐色土	
93-1	H33号住居址	須恵器	甕	(16.8) —	口線部1/10	外蓋 回転ヘラケズリ 内蓋 ロクロヨコナゲ	外蓋 NS/0灰色土 内蓋 2.5GY6/1オリーブ灰色土	
93-2	*	須恵器	蓋	(19.6) —	L線部1/4	外蓋 回転ヘラケズリ 内蓋 ロクロヨコナゲ	10Y6/5弱灰色土	
93-3	*	須恵器	蓋	(18.2) —	1/3	外蓋 ロクロヨコナゲ 内蓋 ロクロヨコナゲ	7.5Y6/1灰色土	
93-4	*	須恵器	坏	(12.8) 5.6 4.5	口線部～底部1/2	外蓋 ロクロヨコナゲ 内蓋 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り未調整	5Y6/1灰色土	
93-5	*	須恵器	坏	14.0 (7.4) 4.0	口線部～底部1/2	外蓋 ロクロヨコナゲ 内蓋 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り未調整	10YR7/1灰白色土	
93-6	*	須恵器	坏	(13.2) 5.6 3.9	L線部～底部	外蓋 ロクロヨコナゲ 内蓋 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切りヘラケズリ?	10YR7/1灰白色土	
93-7	*	須恵器	坏	(13.8) (7.0) 3.8	口線部～底部1/2	外蓋 ロクロヨコナゲ 内蓋 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り未調整	5YK7/1明緑灰色土	
93-8	*	須恵器	坏	12.6 6.4 3.7	ほぼ球形	外蓋 ロクロヨコナゲ 内蓋 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り未調整	2.5Y6/1黄灰色土	
93-9	*	須恵器	坏	(12.6) (7.0) 3.7	L線部～底部2/5	外蓋 ロクロヨコナゲ 内蓋 ロクロヨコナゲ 底部 静止糸切り未調整	2.5Y6/1黄灰色土	
93-10	*	須恵器	坏	(13.0) 7.8 3.8	口線部～底部1/4	外蓋 ロクロヨコナゲ 内蓋 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り未調整	10Y6/2オリーブ灰色土	
93-11	*	須恵器	坏	(12.2) (7.0) 3.3	口線部～底部1/2	外蓋 ロクロヨコナゲ 内蓋 ロクロヨコナゲ 底部 静止糸切り未調整	10Y6/1灰色土	
93-12	*	須恵器	坏	(14.1) (8.2) 4.2	口線部～底部1/4	外蓋 ロクロヨコナゲ 内蓋 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り未調整	7.5Y6/1灰色土	
93-13	*	須恵器	坏	(15.4) (9.4) 3.4	2/5	外蓋 ロクロヨコナゲ 内蓋 ロクロヨコナゲ 底部 回転糸切り未調整	5Y5/1灰色土	

第16表 出土土器観察表

番号	遺物名	種類	器形	法量(m)	残存度	調査	胎土	備考	
93-14	H33号住居址	須恵器	坏	14.7 7.6 4.2	口縁部~底部1/2	外面 内面 底部	ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転糸切り未調整	10Y6/1灰色土	
93-15	*	須恵器	坏	(12.8) (5.6) (5.0)	口縁部~底部1/5	外面 内面 底部	ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ ヘラケズリ未調整	7.5YR6/2黄褐色土	
93-16	*	須恵器	坏	(11.0) (5.5) (4.2)	口縁部~底部1/5	外面 内面 底部	ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転糸切り未調整	N4/0灰色土	
93-17	*	須恵器	坏	(13.8) (10.4) —	口縁部~底部1/6	外面 内面	ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ	10Y6/1灰色土	
93-18	*	須恵器	坏	— (7.4) —	底部~底部1/3	外面 内面 底部	ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ ヘラケズリ	5Y6/1灰色土	
93-19	*	須恵器	高台付 坏	(14.4) (10.0) 5.9	口縁部~底部1/8	外面 内面 底部	ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転ヘラケズリ	5Y6/1灰色土	
93-20	*	須恵器	高台付 坏	14.8 11.2 4.2	ほぼ完形	外面 内面 底部	ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転糸切り→ヘラケズリ	10Y6/1灰色土	灯明否?
93-21	*	須恵器	高台付 坏	— 7.6 —	底部4/5	外面 内面 底部	— — 回転ヘラケズリ未調整	外面 N4/0灰色土 内面 2.5GY6/1オリーブ灰色 土	底部の一部にヘラ 記号残る
93-22	*	土師器	坏	(15.4) (8.6) (4.4)	口縁部~底部1/4	外面 内面	ロクロヨコナデ 黒色焼物、ヘラミガキ	外周 10YR6/4にぶい黄褐色土	
93-23	*	土師器	坏	— 7.0 —	底部1/2	外面 内面	ヘラケズリ ナデ	10YR7/4にぶい黄褐色土	
93-24	*	土師器	壺	— 6.9 —	底部	外面 内面	ヘラナデ ハナナデ	外面 5YR4/6赤褐色土 内面 10YR5/6黄褐色土	底部未発見
93-25	*	土師器	壺	(23.0) — —	口縁部1/4	外面 内面	ヨコナデ、胴部ヘラケズリ ヨコナデ	10YR5/6黄褐色土	武蔵型の壺
93-26	*	土師器	壺	(19.4) — —	口縁部1/4	外面 内面	ヨコナデ ヨコナデ	5YR4/6赤褐色土	武蔵型の壺
93-27	*	須恵器	壺	(12.0) — —	底部1/8	外面 内面	ヘラ? ヨコナデ	10YR4/1褐色灰色土	
93-28	*	須恵器	壺	(21.4) — —	口縁部1/4	外面 内面	ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ	10YR6/1褐色土	
93-29	*	須恵器	壺	— (16.0) —	底部1/3	外面 内面	平打明き日文 ナデ一部ハケナデ	外面 2.5Y5/1黄灰色土 内面 7.5YR5/2灰褐色土	
115-1	F7号横立柱 遺物址	須恵器	坏	(13.2) (8.0) 4.1	口縁部~底部1/3	外面 内面 底部	ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ ヘラケズリ	2.5Y5/1黄灰色土~5YR4/6赤褐色 土	
115-2	F19号横立柱 遺物址	須恵器	坏	— (7.2) —	底部~底部1/4	外面 内面 底部	ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転糸切り	7.5YR7/1明褐色土	
115-3	F20号横立柱 遺物址	須恵器	坏	— 5.8 —	底部	外面 内面 底部	— — 回転糸切り	2.5Y6/1黄灰色土	
117-1	D13号土坑	須恵器	坏	14.6 7.2 4.2	口縁部~底部3/4	外面 内面 底部	ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転糸切り	2.5Y6/1黄灰色土	
117-2	*	須恵器	坏	14.2 6.8 3.7	口縁部~底部3/4	外面 内面 底部	ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転糸切り	10YR7/6黄褐色土	
119-1	Xか2C 又く4G	須恵器	壺	(16.7) — 3.8	1/2	外面 内面	回転ヘラケズリ ロクロヨコナデ	7.5YR5/3にぶい褐色土	鑑定珠つまみ
119-2	NNM II P.77	須恵器	壺	(15.6) — 4.0	2/3	外面 内面	ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ	5YR5/3にぶい赤褐色土	鑑定珠つまみ 火押有
119-3	H9号住居址	須恵器	高台付 坏	16.5 12.8 4.6	口縁部~底部4/5	外面 内面 底部	ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ ヘラナリ	10BG5/1青灰色土	
119-4	W<10G	須恵器	高台付 坏	(12.0) (8.0) 4.0	口縁部~底部1/3	外面 内面 底部	ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 糸切り?	外面 10YR5/1褐色灰色土 内面 8GY5/1オリーブ灰色土	

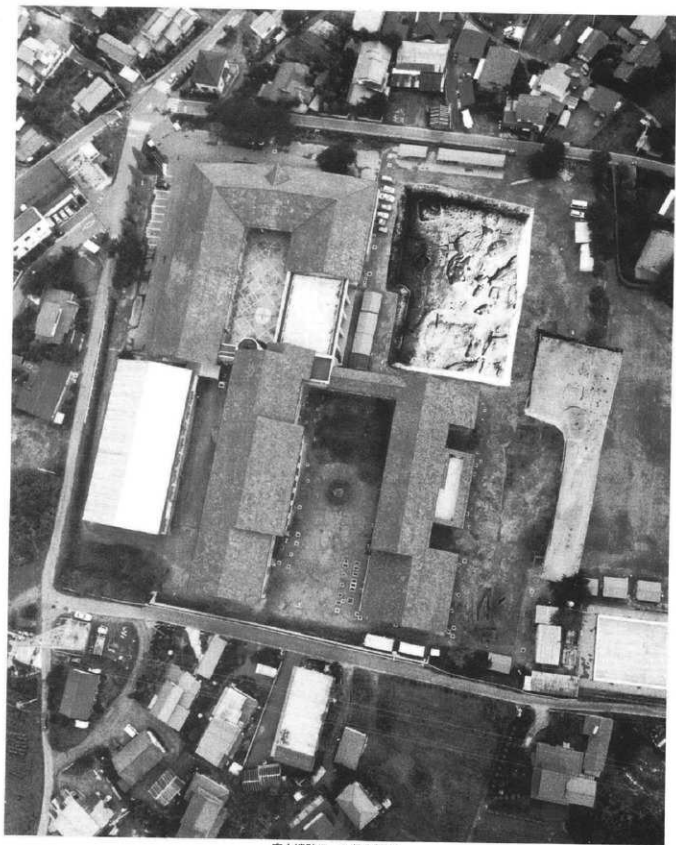
第17表 出土土器観察表

番号	遺構名	種類	器形	法量(cm)	残存状況	調整	胎土	備考
119-5	W<10G	須恵器	環	(12.8) (5.6) 4.1	口縁部~底部1/4	外面 内面 底部 回転糸切り未調整	外面 10YR6/2赤黄褐色土 内面 10YR6/1褐色土	
119-6	W<10G	須恵器	環	(13.8) (7.4) 3.5	口縁部~底部1/4	外面 内面 底部 回転糸切り未調整	10YR5/1褐色土	
119-7	H18号住居址	須恵器	環	(13.4) 3.4 6.0	口縁部~底部1/2	外面 内面 底部 回転糸切り未調整	外面 5BG5/1黄褐色土 内面 10YR6/1褐色土	
119-8	W&10G	須恵器	環	6.4 —	底部	外面 内面 底部 回転糸切り未調整	10YR1/6褐色土	
119-9	NNM/VP.11	須恵器	環	— 6.7 —	底部	— 外面 内面 底部 回転糸切り未調整	7.5YR7/1黄褐色土	
119-10	NNM/VP.11	須恵器	環	(15.0) —	口縁部1/4	外面 内面 回転糸切り未調整	10GY5/1緑灰色土	
119-11	H23号住居址	須恵器	環	(12.8) (5.0) 4.1	口縁部~底部1/5	外面 内面 底部 回転糸切り未調整	7.5YR6/1褐色土	
119-12	W>9G	須恵器	環	(5.4) —	底部1/3	外面 内面 底部 回転糸切り未調整	10YR7/1灰白色土	
119-13	H19号住居址	須恵器	高盤	10.2 —	底部~脚部	外面 内面 回転糸切り未調整	5GY6/1オリーブ灰色土	
119-14	W&9G	須恵器	高环	— —	脚部	外面 内面 平行注線2本 回転糸切り未調整	外面 5BG4/1黄褐色土 内面 5BG5/1黄褐色土	
119-15	R&7G	須恵器	短盤	7.9 4.5 4.9	完形	外面 内面 回転糸切り未調整	2.5GY5/1オリーブ灰色土	底部にヘウ記号右 内外面に自然輪付 環
119-16	W<10G	須恵器	要	6.8 —	底部1/4	外面 内面 底部 回転糸切り未調整	外面 2.5GY5/1オリーブ灰色土 内面 2.5GY6/1オリーブ灰色土	底部にヘウ記号右
119-17	NNM/VP.11	須恵器	要	(9.2) —	底部1/2	外面 内面 底部 回転糸切り未調整	5YR4/1褐色土	
119-18	NNM/III Q1	須恵器	白付足	(9.0) —	脚部~底部1/4	外面 内面 底部 回転糸切り未調整	2.5YR4/1赤褐色土	
119-19	W<10G&1G	須恵器	短頸壺	(11.8) —	口縁部1/4	外面 内面 ヨコナデ ヨコナデ	10YR6/1褐色土	外面に自然輪付
119-20	YH7G	土師器	埴	(18.2) 5.3 9.0	口縁部~底部1/2	外面 内面 磨耗のためはっきりしないがヨコナデか 黒色処理	外面 5YR5/6明赤褐色土	
119-21	NNM/VP.11	土師器	小型壺	(17.0) —	口縁部1/5	外面 内面 ヨコナデ はっきりしないがヨコナデか?	10YR6/3に濃い黄褐色土	武蔵型の壺 蓋母、石灰粒含む 粒子細かい
119-22	NNM/VP.43	土師器	要	— 7.5 —	底部	外面 内面 ヘラナデ? 磨耗著しく不明	5YR4/3に濃い赤褐色土	石英、長石粒含む
119-23	NNM II P.229		紡錘形	4.0 6.0 5.3	完形			穴径0.9cm 重さ129.9g 石質粘板片
119-24	H21号住居址		石皿					重さ0.2g
120-1	試掘H1号住居址	須恵器	環	(14.7) (7.5) 3.6	口縁部~底部1/5	外面 内面 底部 回転糸切り未調整	10YR6/1褐色土	
120-2	*	土師器	環	12.8 6.0 5.0	口縁部1/4欠損 ほぼ完形	外面 内面 底部 ヨコナデ 黒色処理、ヘラミガキ ヘラズリ	10YR6/3に濃い黄褐色土	
120-3	試掘H2号住居址	須恵器	高白付環	(16.4) (10.5) (2.9)	口縁部~底部1/6	外面 内面 ヨコナデ ヨコナデ	10YR6/1褐色土	
120-4	*	須恵器	鉢	16.6 9.0 9.3	口縁部~底部3/4	外面 内面 底部 ヨコナデ ヨコナデ 切り履し後にヘラナデ	5GY6/1オリーブ灰色土	
120-5	*	土師器	環	6.4 —	底部~底部2/3	外面 内面 ヘラミガキ 黒色処理、ヘラミガキ	10YR6/4に濃い黄褐色土	

第18表 出土土器観察表

番号	遺物名	種別	器形	法量(m)	残存状況	調査	胎土	備考
120-6	試掘12号 住居址	土師器	鉢	12.1 — 8.9	口縁部～底部3/4	外面 ヘラナデ 内面 黒色処理、ヘラミガキ	10YR6/3にぶい黄褐色土	
120-7	*	土師器	鉢	(13.8) — —	口縁部～胴部1/2	外面 ヘラナデ 内面 ヘラミガキ	10YR6/4にぶい黄褐色土	
120-8	*	土師器	壺	(22.2) — —	口縁部～胴部1/4	外面 ナデ 内面 ヘラミガキ	2.5Y6/4にぶい黄色土	
120-9	*	土師器	壺	(13.0) — —	口縁部～胴部1/6	外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	5YR6/4にぶい藍色土	
120-10	*	土師器	壺	— 6.1 —	底部	外面 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	10YR6/4にぶい黄褐色土	
120-11	*	土師器	壺	— 6.4 —	底部	外面 ヘラナデ 内面 黒色処理	10YR6/3にぶい黄褐色土	工具痕多く残る
120-12	*	土製品	円筒形 土製品	8 8.5 23.5	壳形	外面 輪積み痕 内面 輪積み痕	5YR5/6明赤褐色土	底部本葉痕
120-13	*	土製品	円筒形 土製品	— — (42)	胴部1/2	外面 縦方向のヘラナデ 内面 輪積み痕	10YR5/4にぶい黄褐色土	
120-14	築港住居址 周辺	須恵器	壺	23.1 — 4.3	3/4	外面 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ	外面 7.5GY4/1暗緑灰色土 内面 7.5YR/2Aオリーブ色土	歪み有
120-15	*	須恵器	杯	— 7.3 —	底部～底部1/3	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転ヘラ切り?	10YR6/1暗灰色土	
120-16	*	土師器	杯	(9.4) — 3.6	口縁部～底部1/2	外面 やや隆起ヘラミガキ 内面 やや隆起ヘラミガキ	10YR7/4にぶい黄褐色土	
120-17	*	土師器	鉢	14.1 — 9.5	口縁部～底部2/3	外面 ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面 黒色処理、ヘラミガキ	2.5Y6/4にぶい黄色土	
120-18	*	土師器	高杯	— 10.2 —	胴部	外面 やや隆起縦方向のヘラミガキ 内面 ヘラケズリ	外面 2.5Y7/3淡黄色土 内面 3N/O暗灰色土	
120-19	*	須恵器	短頸壺	(12.0) — —	口縁部～胴部	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	2.5Y7/1灰白色土	
120-20	*	土師器	小型壺	— 5.4 —	胴部～底部	外面 ヘラナデ→部ヘラミガキ 内面 ヘラナデ	外面 5YR3/3暗赤褐色土 内面 10YR7/3にぶい黄褐色土	
120-21	*	土師器	小型壺	— 6.5 —	胴部～底部	外面 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	外面 10YR4/1暗灰色土 内面 10YR7/6明黄褐色土	底部本葉痕
120-22	*	土製品	円筒形 土製品	9.5 — —	口縁部～胴部	外面 縦方向のヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	7.5YR6/4にぶい藍色土	
121-1	試掘M1	須恵器	高台付 杯	(12.2) (7.5) 3.8	口縁部～底部1/2	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	5G2/1緑褐色土	
121-2	*	須恵器	高台付 杯	(15.1) (10.8) 3.1	口縁部～底部1/5	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	外面 5B3/1暗青灰色土 内面 1N5/O赤土 裏面 2.5YR5/2灰赤色土	
121-3	*	土師器	高杯	— (9.6) —	胴部	外面 縦方向のナデ 内面 環部黒色処理	5YR6/6褐色土	
121-4	*	土師器	瓶	15.7 — 10.2	ほぼ定形	外面 ヘラナデ? 内面 横方向のヘラミガキ	7.5YR6/4にぶい褐色土	穿孔
121-5	*	土師器	壺	— 6.8 —	底部	外面 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	5YR6/6褐色土	
121-6	*	土師器	小型壺	11.3 5.0 12.0	口縁部～底部2/3	外面 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	5YR6/4にぶい藍色土	底部本葉痕
121-7	*	土師器	円筒形 土製品	— 11.3 —	底部	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	7.5YR6/4にぶい褐色土	底部本葉痕
121-8	*	土製品	円筒形 土製品	— — —	胴部	外面 縦方向のヘラナデ 内面 縦方向のヘラナデ、輪積み痕	5YR5/6明赤褐色土	石灰結晶有

写 真 图 版



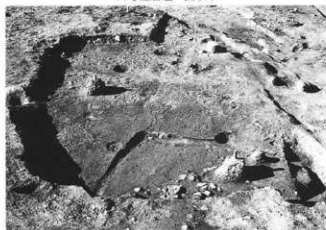
富上遺跡Ⅲ、Ⅳ航空写真



Y1号住居址 西より



Y2号住居址 北東より



Y3号住居址 南より



Y4号住居址 東より



H1号住居址 北東より



H1号住居址 北東より



H2号住居址 東より



H2号住居址カマド掘り方 東より



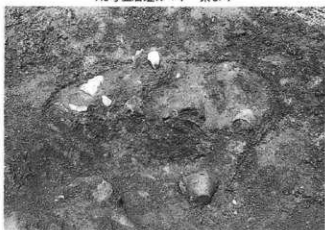
H3号住居址遺物出土状況 東より



H3号住居址カマド 東より



H7号住居址 北西より



H7号住居址カマド 南東より



H9号住居址 南より



H10号住居址 南より



H10号住居址カマド 南より



H11号住居址 東より



H16号住居址 東より



H16号住居址カマド 東より



H17号住居址 南より



H17号住居址カマド 南より



H18号住居址 東より



H18号住居址カマド 東より



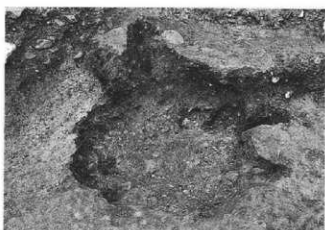
H23号住居址 南より



H23号住居址カマド 東より



H23号住居址カマド石組み状況 東より



H23号住居址カマド掘り方 東より



H30号住居址 北東より



H34号住居址 西より



D1号土坑址 東より



D9号土坑址 東より



H8号住居址 北西より



H8号住居址カマド 西より



H12号住居址 西より



H12号住居址 西より



H13号住居址 西より



H14号住居址 西より



H15号住居址 西より



H15号住居址カマド 西より



H19、20号住居址 西より



H19号住居址カマド 西より



H21号住居址 西より



H21号住居址カマド 西より



H22号住居址 西より



H24号住居址 南より



H25号住居址 西より



H25号住居址カマド 西より



H25号住居址カマド石組み 西より



H25号住居址カマド掘り方 西より



H26号住居址 西より



H26号住居址カマド 西より



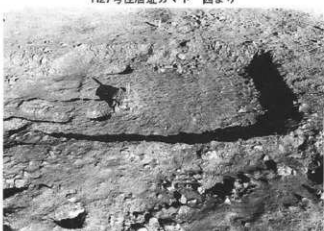
H27号住居址 北より



H27号住居址カマド 西より



H28、35号住居址 南より



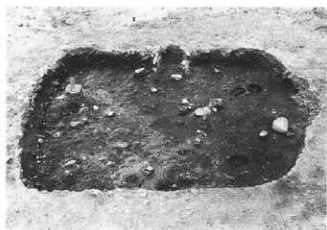
H29号住居址 西より



H29号住居址カマド 南より



H31号住居址 南より



H32号住居址 西より



H32号住居址カマド 西より



H33号住居址 西より



H33号住居址カマド 西より



F1号掘立柱建物址 西より



F5号掘立柱建物址 北西より



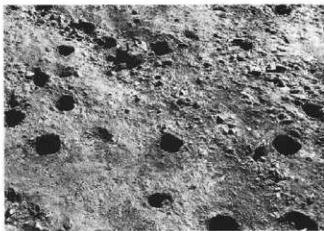
F6号掘立柱建物址 北東より



F7号掘立柱建物址 南より



F8号掘立柱建物址 北より



F9号掘立柱建物址 北より



F10、11、12号掘立柱建物址周辺 南西より



F15、16号掘立柱建物址周辺 南東より



F14、17号掘立柱建物址周辺 東より



F19号掘立柱建物址 西より



F20号掘立柱建物址 西より



D2号土坑址 東より



D3号土坑址 南東より



D4号土坑址 北より



D5号土坑址 南より



D7号土坑址 北より



D8号土坑址 北より



D11、12号土坑址 南より



Y1住、8-6 (1:2)



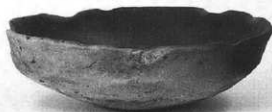
H1住、18-1 (1:3)



H3住、22-7 (1:2)



H1住、18-4 (1:3)



H3住、22-4 (1:2)



H3住、22-13 (1:2)



H3住、22-14 (1:3)



H3住、22-16 (1:3)



H3住、22-18 (1:4)



H3住、24-29 (1:4)



H3住、24-30 (1:4)



H3住、24-33 (1:4)



H3住、24-34 (1:4)



H7住、26-1 (1:2)



H7住、26-3 (1:2)



H7住、26-4 (1:3)



H7住、26-3 (1:2)



H7住、26-5 (1:3)



H7住、26-7 (1:4)



H9住、28-4 (1:2)



H9住、28-11 (1:3)



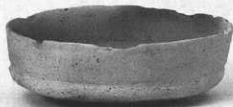
H10住、29-2 (1:2)



H10住、29-1 (1:2)



H11住、32-1 (1:2)



H16住、35-2 (1:2)



H17住、38-1 (1:2)



H17住、38-3 (1:2)



H17住、38-6 (1:2)



H16住、35-8 (1:4)



H16住、36-16 (1:3)



H17住、38-11 (1:2)



H17住、38-12 (1:2)



H18住、40-10 (1:3)



H23住、43-1 (1:2)



H23住、43-3 (1:2)



H23住、43-7 (1:2)



H23住、43-8 (1:3)



H23住、43-9 (1:2)



H23住、43-14 (1:2)



H23住、43-12 (1:3)



H23住、43-17 (1:3)



H23住、43-16 (1:3)



H23住、44-23 (1:4)



H23住、44-25 (1:4)



H23住、44-26 (1:4)



H4住、49-16 (1:4)



H30住、46-3 (1:2)



H4住、49-8 (1:2)



H4住、50-18 (1:3)



H4住、50-19 (1:3)



H6住、50-21 (1:3)



M1、54-1 (1:2)



D1、52-2 (1:3)



D1、52-10 (1:3)



H5住、56-4 (1:2)



H5住、56-11 (1:3)



H8住、58-1 (1:2)



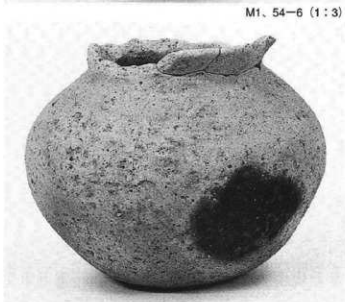
H8住、58-2 (1:2)



H8住、58-6 (1:2)



M1、54-6 (1:3)



M1、54-8 (1:2)



M1、54-9 (1:2)



H8住、58-9 (1:2)



H12住、60-3 (1:2)



H12住、60-4 (1:2)



H12住、60-5 (1:2)



H8住、58-15 (1:3)



H15住、67-1 (1:2)



H12住、60-1 (1:2)



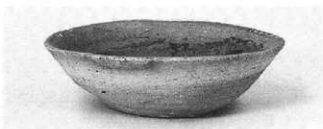
H15住、67-9 (1:2)



H12住、60-2 (1:2)



H15住、67-2 (1:2)



H15住、67-3 (1:2)



H15住、67-6 (1:2)



H15住、67-12 (1:4)



H19住、69-1 (1:2)



H19住、69-8 (1:2)



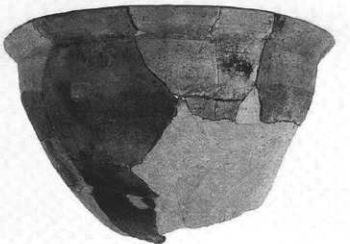
H19住、69-11 (1:3)



H21住、72-3 (1:2)



H26住、82-1 (1:2)



H25住、79-4 (1:4)



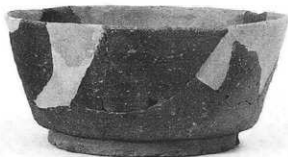
H32住、91-1 (1:2)



H33住、93-20 (1:2)



H32住、91-11 (1:2)



H32住、91-18 (1:2)



H33住、93-20 (1:2)



H33住、93-8 (1:2)



H32住、91-24 (1:3)



119-15 (1:2)



120-2 (1:2)



119-2 (1:2)



120-4 (1:2)



120-6 (1:2)



120-14 (1:3)



121-6 (1:2)



121-4 (1:2)



Y1住9-1 (1:2)



H13住62-3 (1:2)



119-23 (1:2)



120-12 (1:3)

あとがき

坂城町発掘調査指導者 塩入 秀敏

坂城町立坂城中学校の全面改築工事に先立ち行われた宮上遺跡の緊急発掘調査は、校舎の建設計画に沿って平成3・4・7・9の4年次にわたり実施された。『坂城町遺跡分布図』では周辺遺跡を含めて「中之条遺跡群」とされていたが、試掘調査によって集落址であると判明した本遺跡地は、その重要性にかんがみ新たに宮上遺跡と命名されるようになったものである。

その宮上遺跡の試掘調査から1次2次の発掘調査を団長として担当・指導された森嶋稔先生は、第2次発掘調査の概要報告書『宮上遺跡Ⅱ』のあとがきで、坂城広谷に華開いた古代文化の原点は中之条遺跡群、とりわけ宮上遺跡にあったのかもしれないと、坂城町の古代遺跡のなかにおける宮上遺跡の重要性を示唆されている。第3次以降の調査で、『宮上遺跡Ⅱ』段階ではまだ知られていなかった弥生時代中期末～後期後半の住居址が検出され、以後、平安時代の初頭以降に及ぶおよそ800年間にわたり、何回かの断絶はあるものの集落が営まれてきたことが判明したことは、その感を一層強くさせる。あえて言うならば、宮上遺跡の南側に展開する北浦遺跡・北川原遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡などの内容が明らかになるに従って、坂城町の古代文化の原点を御堂川扇状地の扇央部に展開する宮上遺跡から寺浦遺跡に及ぶ広い範囲とした方が良いかもしれない。とくに、上町遺跡から奈良二彩（三彩）の葉壺蓋が、寺浦遺跡から緑釉陶器が出土するなど、坂城町の他の地域には見られない特殊な遺物が出土する特別な集落は宮上遺跡より少し南方になりそうな様相である。しかし、いずれにしても、宮上遺跡は坂城町の古代文化の原点を構成する主要遺跡であることは言をまたない。

4次にわたる発掘調査は、前述したように校舎の建設計画に沿って工事の合間をぬって実施され、その整理は他の特に緊急を要する発掘調査の後回しにされながら行われてきた。ここに、多くの成果をまとめて『宮上遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』として調査報告者を上梓することができた。初めの試掘調査が行われた平成3年から10年以上の年月が経っているので、その都度の発掘調査にかかわってきた者にとって、この刊行は等しく喜びとするものである。森嶋先生が、遺跡の上に建設された校舎で学ぶ中学生に対してあつい思いを述べておられることは、本書の序に大橋幸文教育長が紹介されているとおりである。いまや、卒業生の数は1万人を超えたという。それに続く坂城中学校の生徒の皆さんは、坂城町の古代文化の原点を構成する宮上遺跡の上にたつ校舎で学ぶことに自負をもつとともに、遺跡について学ぶことをとおして、自らもまた坂城町の歴史の一員であることを知ってほしいと思う。

最後に、発掘調査の現場での厳しい作業に、また地味で細密な整理作業に従事された皆さんを始め、発掘調査にかかわったすべての皆さんに先ず感謝したい。そして、現場から本書作成の各過程において様々なご指導ご協力ご配慮を賜った多くの方々と機関に、深甚なる敬意と感謝を申し上げてあとがきとさせていただきます。

平成13年（2001）3月

報告書抄録

ふりがな	なかのじょういせきぐん みやうえいせき いち・に・さん・よん
書名	中之条遺跡群 宮上遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ
副書名	長野県埴科郡坂城町坂城中学校改築事業に係る緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	坂城町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第19集
編集者名	塩入 秀敏・助川 朋広
編集機関	坂城町教育委員会
所在地	〒389-0602 長野県埴科郡坂城町大字中之条2468番地 TEL0268-82-2069
発行年月日	2001年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みやうえいせきぐん 宮上遺跡Ⅰ ・Ⅱ・Ⅲ・ Ⅳ	埴科郡坂城町 大字中之条 921-1他	1521	—	36° 26′ 48″	138° 11′ 40″	1991年 8月20日～8月31日 1992年 6月2日～9月4日 1995年 6月19日～12月15日 1997年 4月21日～7月2日 9月25日～10月2日	6,784m ²	坂城中学校 改築事業に 伴う事前調 査。

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
宮上遺跡Ⅰ ・Ⅱ・Ⅲ・ Ⅳ	集落 址	弥生中期 \ 平安時代	壁穴住居址 38棟 掘立柱建物址 20棟 土坑址 15基 溝状遺構 4条		弥生土器 土師器 須恵器	弥生時代中期末～平 安時代の集落址の調 査。

坂城町埋蔵文化財調査報告書

	【開畝製鉄遺跡—第1次調査報告書】	1977
	【開畝製鉄遺跡—第2次調査報告書】	1978
	【東裏遺跡】	1983
	【中之条遺跡群 宮上遺跡Ⅱ】(概報)	1993
	【南条遺跡群 塚田遺跡】	1993
第1集	【南条遺跡群 東裏遺跡Ⅱ・青木下遺跡】	1994
第2集	【町内遺跡発掘調査報告書】	1994
第3集	【町内遺跡発掘調査報告書】	1995
第4集	【南条遺跡群 塚田遺跡Ⅱ】	1995
第5集	【農鏡堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡】	1996
第6集	【中之条遺跡群 寺浦遺跡Ⅱ】	1996
第7集	【中之条遺跡群 上町遺跡Ⅱ】	1996
第8集	【上五明条里水出址】	1996
第9集	【町内遺跡発掘調査報告書1995】	1996
第10集	【坂城町試掘調査・立会い調査報告書】	1996
第11集	【町内遺跡発掘調査報告書1996】	1997
第12集	【戌久保遺跡・町横尾遺跡】	1998
第13集	【込山Bほか 発掘調査報告書1997】	1998
第14集	【町内遺跡発掘調査報告書1998】	1999
第15集	【町内遺跡発掘調査報告書1999】	2000
第16集	【開畝遺跡Ⅲ】	2000
第17集	【中之条遺跡群 北川原遺跡Ⅱ】	2001
第18集	【町内遺跡発掘調査報告書2000】	2001
第19集	【中之条遺跡群 宮上遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ】(本書)	2001

発行日	2001年3月30日
編集者	坂城町教育委員会 〒389-0602長野県埴科郡坂城町大字中之条2468番地 TEL 0268 (82) 2069
印刷者	信毎書籍印刷株式会社 〒381-0037長野県長野市西和田470 TEL 026 (243) 2105